
かみさまは自業自得

藤森応輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かみさまは自業自得

【Nコード】

N2778X

【作者名】

藤森応輝

【あらすじ】

「なんでこんなことに……私は神様じやのに……」

全知全能。まさに究極チートの神様。

ごく普通の男子高校生アキヒトの3つの願いを叶えてやり異世界に転生させてやったのは良いものの、その結果、神様は少年の理想の彼女に変身して異世界に同行する事に。

だが少年の理想の彼女は、外見は美少女だが、能力的には「何のとりえも無い少女」だった。

究極チートからまさかの無能者への転落。逆チート状態。

このままでは神様なのに死んでしまう。神様は少年の彼女「設定」なのを利用し、「彼女は命がけで守るもの」とチート能力を得た少年に言い聞かせ、これで一安心と思っては見たものの……。

主人公はチート能力者の少年ではなく、あくまで少女の姿になった神様なので、俺TUEEEEの話がメインではありません。今までただ眺めるだけだった人間の世界に、実体として降りた神様はどの様に生きていくのか？という事と、むしろ少年を取り巻く女性達の話がメインです。

第1話：思わぬ要求

> i 3 2 6 4 7 — 3 5 9 7 <

私は神である。

宇宙を創造し、星々を作り上げ、命を生み出した全知全能の神である。

じゃがその神にもどうしようもないものがある。

それは退屈というもののじゃ。

あらかた宇宙を作り上げてしまいやる事の無くなった私は、暇で暇でしようがないのである。

しかし最近その退屈を紛らわせる面白い事を思いついた。

ある世界の人間を別の世界に送り込み、そしてその様子をここから見て楽しむのじゃ。

なぐに。私は気前が良い。私の遊びに付き合って貰うのだからちやんとそれなりの恩恵を与えてから、異世界に送ってやる。

その者達は、ある者は勇者として賞賛され、ある者は一国の王となり栄華を極め、またある者は欲望の限りを尽くしてハーレムを作

ったりもしている。

そしてさっき異世界に送り込んだ者が寿命で死んだのじゃ。私は慈悲深いので、ちゃんと寿命で死ぬまで見取ってやっているのじゃ。私には十分時間があるのでな。

そして今、新たなおもちゃを、いやいや、転生者を探しているところだったのだ。

昔は歩いているところをいきなり連れてきたりもしたが、それでは元の世界で神隠しだのと大騒ぎになり、連れてきた者も連れてこられたことに納得せず説得が面倒なので、最近では別の方法を行っている。

それはちょうど死ぬところを連れてくるのじゃ。そしたら元の世界では死んだ事になっているので騒ぎにならず、連れてきた者もお前は死んだのだからここに来たのだと言えば、あっさり納得する。さらに転生させてやると言えば、死ぬところだったのに転生できてラッキーといった具合にあっさりOKするのである。

そして今、地球という星の日本という国を万能の力で覗いた。高校というものから家へ帰るらしき少年、少女達が道を歩いているのが見える。するとそこにトラックが通りかかった。トラックは左右にふらふらと揺れ、運転手は寝ている様だった。そしてそのトラックは1人に少年に近づいていく。

お!? ちょうどトラックに轢かれそうになっている。よし、運転手そのまま轢くのじゃ。あ、こら! 運転手起きるな!! ハンドルを切るんじゃない! そして運転手は避けきれず、少年はトラックに弾き飛ばされた。

よし！ 上手く轢いたぞ。不運にも死んだ少年をさっそくここに転送させた。転送されてきた少年は暗闇の中で宙に浮き、その身体は微かに光を放っている。ちなみに服の汚れや傷はすでに治している。

名前は、高井^{タカイ} 明仁^{アキヒト} 身長は170センチくらいでまあ普通。顔も可もなく不可もなくと言った感じでまあ普通。頭の良さも普通というところか。うむ。まあ極普通の者が巨大な力を手に入れて、どう行動するのか見るのもまた一興だろう。

よし！ さっさと起きよ！ 私が神の能力で気付けさせると少年はまぶたを開け、あたりを見渡した。そして足場の無いところに自分が立っている事に気付き、足を不安そうに何度も踏みしめ、さらに何度もあたりを見回している。

ちなみに高次元の存在である私に実体はないので奴からは見ええない。私は性別のない中性的な声で少年に話しかけた。

「怯えるでない。ここは高次元空間である」

「高次元空間？ 君は誰なの？」

「私は神である」

「神様？ じゃあ君が僕をここに連れてきたの？」

神を君呼ばわりとは、これがゆとりというものか。しかしその程度で怒ったりはしない。なにせ神は心が広いのである。こんな事で一々腹を立てては居られない。おおらかな気持ちでないと何十億年

もこんなところに1人で居られないのである。

「うむ。お前は不幸にもトラックに轢かれて死んでしまったのじゃ。それを私が不憫に思いここに連れてきてやったのじゃ」

「え？ 僕死んじやったの？」

トラックに轢かれたくらい自分でも分かっているだろう。ずいぶんのんびりした者を選んでしまったかな？ まあよい。変わっている奴ほど眺めていて退屈はしまい。問題ないだろう。

「そうじゃ。お前は死んだのじゃ。しかしその若さで死ぬのはあまりにも不憫である為、別の世界に転生させてやろうと思う。どうじゃ。死ぬところを助かって嬉しいであろう」

「じゃあ、お父さんとお母さんや学校の友達とは、もう会えないの？」

うーん。うじうじした奴だな。死んだんだからそこはもう諦めればよいものを。

「それは、止む得まい。何せ死んだのだからな。ここは生き返れる事を素直に喜ぶべきであろう」

「えー。でも、別の世界ってどんなところ？ そこに僕1人で行くの？」

少年は喜ぶどころか不安そうな表情をしている。まあ別世界に1人で行けと言われれば怯えるのも仕方ないじやろう。一つ安心させてやるとしよう。

「今からお前が行く世界は、お前の星での中世ヨーロッパという時代の世界と似ているな。石造りの城が建ち、王や貴族がいる。そしてなんと魔法もある。どうじゃ楽しそうであろう？　しかもちゃんと1人でも生きていける様に、3つ願いをかなえてやろう」

「3つの願い？」

「そうじゃ。もっとも大抵の者は、チート能力、最高の装備、そしてその世界での大金を希望するがの。それと3つの願いとは別に、今から行く世界の言葉と文字を自在に使える様にはしてやろう。それで願いを1つ使うのは馬鹿馬鹿しいのでな」

「ありがとう。それでチート能力って？」

「なんじゃ知らんのか。その世界で他の者にはどうしようもない圧倒的な力のことじゃ。その能力を得れば、今から行く世界でお前に勝てる者なぞ誰一人存在しないのじゃ」

「具体的には？」

「まず一つ目は、絶対防御結界。これはお前が意識せずとも自動的にお前の身体を守りどんな攻撃にも破られることの無い外部ダメージをすべて無効化する結界じゃ。二つ目は、光神槍破。これは全力で放てばどんな相手も必ず殺す事が出来る決して外さぬ魔法の光の槍じゃ。数百発を同時に放つ事も出来、手加減して打てば相手を気絶させるだけに留める事も出来る。どうじゃこれならば負けようがなからう」

「絶対防御結界を全力の光神槍破で打ったらどうなるの？」

ふ。矛盾と言いたいのであろう。そんな質問聞き飽きたわ。

「光神槍破で絶対防御結界を打つと、結界は破れはせぬが結構へこむので中の者は死ぬ。どうじゃ。両方の条件を満たしておろう」

「分かったけど、なんか屁理屈っぽいね」

中々無礼な奴だな。じゃが神である私は心が広いので、怒って取り乱したりはしないのである。

「でも、それって光神槍破と同じくらい威力がある攻撃をされたら死んじゃうって事？」

「いや、光神槍破の場合だけ絶対防御結界はへこむ。そして光神槍破を撃てるのはお前だけなので実質防御は完璧じゃ」

「完全に矛盾を指摘されない為だけの設定じゃないか。でも、確かにそれだったら無敵かも」

少年はやつと不安が取れたのか微かに笑みを浮かべた。やれやれ面倒な事よ。

まあ本当に完全に敵なしにするなら、他にも相手の能力を無効にするとか、飛行能力をつけても良いんじゃないじゃが、何せ私が見物して楽しむ為に異世界に送るんじゃないからな。あんまり優位過ぎてても詰まらん。最強の攻撃と絶対防御があれば一応こやつ自身の安全は保障されるし、これで十分というものよ。

「うむ。だから安心して行くが良い。あっそれとあらゆる毒や病氣

に対する免疫もオプションで付けておく。いくら外部ダメージに対して完璧でも毒や病気で死んでは元も子も無いのでな」

「でも、それじゃチート能力があれば、最高の装備やお金は無くても何とかなるんじゃないの？」

「何を言うか、最高の装備はカッコいいし、お金は無いと大変ではないか」

「うーん。そうなんだけど、別に他のお願いでも良いんだよね？」

うむ。別の願いか。みんな同じ様な願いばかりで飽き飽きしていたところじゃ。これは思ったより楽しめるかもしれん。

「うむ。当然他の願いも可能じゃ。神に二言は無い。かなえて進ぜよう」

すると少年はうーん。と考えんでいる。まあいま少しまってやろうではないか。何せ神は心が広いのである。

「そう言えば、僕ってその世界に行って何をすればよいの？」

「それはお前の自由じゃ、その力を使って戦い、英雄になるのも、国を建てそこに君臨するのもよい。欲望に身を任せハーレムを作ってもよいのじゃ」

「戦うのってあんまり好きじゃないし、王様になってもなんか大変そうだし、その中だったらハーレムかな」

虫も殺さぬ様な顔をしているくせに、さらっとハーレム作りを宣

言するとは中々侮れない奴。じゃが意外性があつた方が面白い。これはなかなか退屈せずにすむかも知れんな。

「勿論構わん。その力を使って何人でも女をものにするが良い」

「でも、僕女の子と付き合つたこと無いし、女の子を誘うとかつて上手く出来るかな？」

「なに心配あるまい。今からお前が行く世界は、力さえあれば結構どうとでもなる世界じゃ。チート能力があれば問題あるまい」

しかし少年はまだ、うーんうーん。と腕を組み悩んでいる。さすがに心の広い私もじれったくなってきたな。そう思っていると少年はやつと口を開いた。

「そう言えば君って男の人なの女の人の人なの？」

ふむ。変な質問をするものだが、まあ答えてやろう。

「私には実体は無い。ゆえに男でも女でもない」

「そうなんだ……」

そう言う少年はまた考え込んでいたが、しばらくすると遠慮がちに口を開いた。

「本当に何でも良いの？」

「神に二言は無いと言っておろう。遠慮せずに何でも言うが良い」

すると少年は顔に笑みを湛え喜んでいる。うむうむ。それでこちらでも安心して送り出せるというものじゃ。転生させた者があまりにもネガティブだと見ているこっちも面白くないのでな。

「じゃあ、一つ目はさっき君が言っていたチート能力でね」

うむうむ。

「で、後二つは、やっぱり1人で行くのはさびしいし、もし他の女の子に声を掛けるのが失敗してずっと1人ぼっちになるのも嫌だから――」

なに？　では、お供でも欲しいのか？　まあ犬でもサルでもキジでも、用意してやろうではないか。

「君が僕の理想の彼女に変身してね」

え？

「僕と一緒にその世界に来て欲しいな」

はい？

第2話：理想の彼女の諸設定

その少女と少年は突然その世界に現れた。少女は少年よりは少し年上にも見えるが、それは少年が童顔だからかも知れない。

少女は、腰まである長い真っ直ぐな黒髪。眉は美しい曲線を描き、大きくパッチリと開きながらも若干切れ長で、怒ると鋭いが笑うとあどけなさがでる瞳。その色は吸い込まれそうなほど黒く、だが澄んでいる。鼻は高くすつと通るが作り物の様な真っ直ぐな線ではなく自然なラインをとり、唇は若干小さめで上唇に比べて下唇が僅かに厚い。輪郭は理想的なタマゴ型の曲線を頬に持つが、顎は微かに尖っている。雪の様な白い肌に頬は微かに桜色に染まる。首は細く少し長め。手足は長く全体的にスラリとしているが、胸は大きく、腰も十分張り、当然ウエストはくびれている。

少年は極普通の容貌だった。特徴を挙げるとすれば童顔である。

少女の服装はこの世界の一般的な服装で、ベージュのブラウスと紺の膝が隠れるほどのスカート。ブラウスには襟のところに刺繍がされ、生地は厚手だが風通しはよさそうで、この世界での季節は初夏となっているが快適そうだ。スカートも生地は厚いが、足にまとわりつく事無く風になびいている。

少年の服装は、白いシャツに黒いズボンだった。特徴はこれといって無い。

全知全能の力を持つ私は一つ一つ願いを叶えるなどちまちました事などしない。少年アキヒトにチート能力を与え、奴の頭の中にある理想の彼女とやらを「忠実」に再現し、そしてアキヒトと共にこ

の世界に降り立つ事を同時に行った。

もっとも奴の理想の彼女になるというのは、奴が死ねば解除される様にしてある。いつまでもこの姿でいる訳にもいかないからな。

しかしこれが実体というものか。この頬に当たるのが風で、鼻から何か感じるのが匂いというのだな。ふむ。アキヒトの願いには驚いたが、これはこれで中々新鮮で良いではないか。うむうむ。これは退屈せずにすみそうじゃ。

改めて辺りを見渡すと、木々が生い茂り鳥達が鳴いている。ここは街道を少し外れた森の中でこの先には大きな町がある。当然全知全能の私に抜かりが有るはずも無く、はじめからこの人目につかず、そして町には近いこの場所を指定して現れたのじゃが。

アキヒトに視線を向けると、私と同じく辺りを見渡している。しかし、その視線は私と違いオドオドとしている。せっかくチート能力を与えてやって、怖いものなど無いはずなのに情けない奴よ。そのアキヒトが不安そうな声で聞いてきた。

「これからどうしたら良いの？」

「とりあえず町を目指す」

「その町で何をしたらいいの？」

「好きにすれば良い。お前の力で支配するなり滅ぼすなり、まあ大人しくしているなりな」

私の言葉にアキヒトは、うーん。と首を捻った。

「支配するのも滅ぼすのも嫌だね。じゃあ、取り敢えず大人しくしているよ。その場合はどうするの？」

「大人しくしているなら仕事をして金を稼がなくてはなるまい。お前は金が欲しいという願いをしなかったからな」

「そっか。でもどんな仕事をすれば良いだろう？　僕の力でお金を稼げるの？」

アキヒトは首をかしげて私に問いかけ続ける。まったく他力本願な奴じゃな。もし1人でこっちの世界にやって来させていたら、ずっと森の中で動かなかったかもしれない。

「金が欲しかったら、お前の能力で強引に奪うのが手っ取り早いけど、それが嫌で仕事をするなら、やはり国や町や村で出されている化け物退治の依頼をこなすか、それか傭兵になって戦うかだろうな」

するとアキヒトは渋い顔をして腕を組んだ。

「うーん。傭兵って戦争するんだよね？　それは嫌だね。じゃあ、化け物退治かな。僕の力なら絶対に勝てるんだよね？　その退治の依頼ってどこで受けるの？　やっぱりギルド？」

「なんじゃ。ギルドを知っておるのか。では話が早い、その通りじゃ。しかしアキヒトよ。どうしてギルドなどというものを知っているのだ？」

「ラノベを読んでいると、よく出て来るんだよ」

「ほーラノベか。じゃがまあそれならば手っ取り早い。町のギルドに向かうぞ。確かそのギルドは女性が受付をされていて中々の美人だったはずじゃ」

「え？ そうなの？ でも、良くそんな事まで知っているね」

「ふ。私は全知全能の神じゃぞ。なんでも知っている。どうだ？ いっその事その受付の女をお前のハーレムに加えるというのは？ 確か名前は……」

「名前は？」

「名前は……」

あれ？ 確かに知っているはずなのに頭にその名前が浮かんで来んな。どうした事じゃ？ 額から水が一筋流れ頬を伝わり首に沿って胸を這う。これが汗というものか？ それはそうとして何か嫌な予感がする……。

「どうしたの？」

アキヒトが黙り込んだ私の顔を不思議そうな表情で覗き込んできた。ふ。こいつに心配されるとは思ってもおらなんだな。

「なんでもない。とにかく町に向かうぞ」

私は町に向けて右足を一步踏み出そうとした。だがやはり実体になれていない所為で足が上手く動かず、自分の左足に右足が躓く。^{つまづ}

「うわっ！」

と倒れて地面に左膝を付いた。その膝からズキッ！ という鋭いものが走る。くっ！ これが痛みというものじゃな。じゃがまあよい。せつかく実体を持ったのだから痛みも感じておかねばな。これも一興というものよ。

じゃが、やっぱり痛いのでこのままにはしておれん。怪我を治そうと、その場で怪我をした左足を膝立てた形で座るとアキヒトが「大丈夫？」とその足を覗き込んできた。私は反射的に「駄目！」と立てていた膝を内側にたたみスカートの奥を隠す。

私とアキヒトは共に「え？」と顔を見合わせた。アキヒトはそんなつもりじゃなかったと弁解しているけど、私の方もそんなつもりは無かった。本来性別は無く当然異性に下着を見られて恥ずかしいと思うはずの無い私が、アキヒトにスカートの中を覗かれると思った瞬間、身体が勝手に動いたのだ。

じゃが私には大体理由は分かっていた。アキヒトの理想の彼女の設定と言っても外見だけではない。当然性格の設定も存在する。えーと。アキヒトの理想の彼女の性格はと……。と「私の設定」を思い出す。

なになに「活発だが恥じらいは持っている」ふむふむ。恥じらいか。今のはこれに抵触したのじゃな。納得納得。えーと。他には「アキヒトの浮気には多少怒りはするものの寛容で、決定的に嫌になる事はない」ずいぶん都合の良い彼女じゃな。それから「恥じらいは持っているが、実はエッチな事は嫌いじゃない」うーん。まったく思春期の少年が考えそうな設定じゃ。

ん？ 続きがあるな。えーと。「いや、むしろ本当はM気質。彼氏であるアキヒトのする事は拒みつつも最終的には何でも受け入れ

る」……。なんじゃと!!」

思わずアキヒトを改めて見つめた。アキヒトは、理想の彼女の外見を持つ私に正面から見つめられた事と、さっき下着を覗こうとしたと思われた事に恥ずかしがっているのか顔を赤くして目をそらした。

じゃが、この女に慣れぬ態度の奥底でこんな事を考えているとは。邪気のなさそうな童顔の癖に、この鬼畜め!　じゃがラノベばかり読んでいる思春期の少年の願望など、こんなもんかも知れん。こいつの彼女の設定になったのはちよつと迂闊じゃったか。の○太の様に無害そうなくせに。

しかし、こうなると自分の能力が憎い。私の能力は完璧じゃ。アキヒトの理想の彼女を「忠実」に再現している。そしてその解除はアキヒトが死んだ時と設定してある。これはちよつと警戒しなければなるまい。

じゃがとにかく今はこの膝の怪我を治そう。片膝をつき怪我をした膝に手をかざす。この程度の怪我、私の能力を使えばたちどころに……。

私の額からまた汗が流れる。一筋、二筋。背中にも冷たいものが走った。私は、膝を見つめそのままアキヒトに問いかけた。

「アキヒト。お前の理想の彼女ってどんな能力を持ってる?」

アキヒトは私の問いかけにキョトンとしたが、しばらくすると首をかしげながら答えた。もっとも答えにはなっておらず私の問いに對し、問いかけ返してきたのじゃが。

「能力って？ 例えばどんなの？」

「万能の力とか、全宇宙すべての知識を頭に入れる事が出来る記憶力とかじゃ」

するとアキヒトは笑い出した。

「あはは。そんな能力を持っている女の子が理想の彼女な訳ないじゃないか。だって僕が住んでいた世界はファンタジーの世界じゃないんだから。いくら僕がラノベを読むからって、彼女にまでそんなラノベみたいな設定を望んだりしないよ」

「ははは。そうだな。あははははははは——」

「あははははははは——」

私とアキヒトの笑い声が森中をこだました。

アキヒトの理想の彼女の能力、技能の設定…特になし

第3話…さっそく最強の敵現れる。そして。

足を怪我しそれを治せぬので、アキヒトに背負われ道を進み町に向かっていた。

どうしてこの様な事になってしまったのか？ いや分かっている。私の能力があまりにも完璧過ぎたのだ。アキヒトの願望を忠実に読み取り、完璧に再現してしまった結果、その彼女の能力設定までアキヒトの願望にそって再現してしまったのだ。

そして普通の高校生が、彼女に特殊能力など望む訳も無い。つまりただの人である。

そして足の怪我すら治せない私は足の痛みに歩く事も出来ず、全知全能の神たる私は今アキヒトに背負われている。

足の痛みに耐えなんとか立ち上がった私だったが、歩こうとする
とやはり

「イタッ」と声を上げてしまった。そしてその声に気付いたアキヒトが私の顔を覗き込んだ。

「大丈夫？」

声を掛けてきたアキヒトに状況を説明するのは躊躇われた。ここはあまり弱みを見せぬ方が良さだろう。だが実際歩けそうに無い。膝をすりむいたくらいでと言われるかも知れないが、どうやら今まで痛みを感じた事のない私は、人一倍痛みに弱いようじゃ。

状況を説明せぬままアキヒトの手を借りねばなるまい。まあせつ

かくアキヒトの彼女という設定なのだ。ここはその設定を利用させて貰おう。

「ふっ。分かっておらぬなアキヒト。お前は这个世界では私の彼氏なのであらう。二度と言わぬから良く聞け。こういう時、彼氏は黙って彼女に手を貸すのじゃ。お前は彼女である私を、その能力を持って全力で助け、そして守る義務があるのじゃ！」

「そっか。彼氏だから彼女は守らないとね！」

「そうじゃ。お前は命を掛けて私の事を守るのじゃ！」

何せ全知全能の神である私は死んだ事がないからな。この状態で死んだらどうなるのか私にも分からん。案外実体を失うだけで大丈夫かも知れんが、試す訳にも行くまい。

私の言葉にアキヒトは目を輝かせ頷き、こうしてなんとかその場を切り抜ける事に成功した。そして今アキヒトの背に乗り、今後の事を考えていた。

アキヒトは一文無しじゃ。金を稼ぐ必要がある。とはいっても、実は金を稼ぐまで、食べ物などは私の能力でちよちよいと出すつもりだったのじゃ。しかしその考えは脆くも碎けた。

これは本気で早急に金を稼がなくてはならん。いつその事どこかを襲撃して金目の物を奪う様にアキヒトをそそのかすか？ しかしアキヒトが自主的にするならともかく、神様が犯罪を示唆するのもなんじゃな。

この付近に隠されている財宝などの知識、記憶もあったはずなの

じやが、普通の人間である今の私の記憶力ではそれを覚えきれず、知識の大半は忘れてしまっている。

やはりギルドに顔を出し、すぐに片付けられそうな依頼をこなすしかないか。

そんな事を考えている間に町に近づいてきた。ここまで来ると人とすれ違う事もある。スカート姿で背負われ下着が見られそうだと思うた私は、「恥じらい」設定が発動し、アキヒトの背から降りた。

「肩を貸そうか？」

というアキヒトの申し出を、人前で引っ付くのは「恥ずかしい」ので断り、自分の足で歩く。町に着く頃には足の痛みもずいぶんマシになっていたのじゃ。

町に入ると人通りが多くかなりの賑わいに見えたが、どうやら様子がおかしい。よく見ると賑わいと言うより、みんなどこかに避難しようとしているみたいじゃった。

神であり人見知りや遠慮といったものとは無縁な私は、荷駄をひいている男の腕を捕まえて事情を聞いた。だが男は構っていられるかと言った具合に

「馬鹿やろう！ とつと逃げにゃ皆殺しにされちまうんだよ！」と腕を振り払い去っていく。

「まったく無礼な奴じゃな。私を誰だと思っておる」

「でも、どうしよう？ 何か大変そうだよ？」

憤慨する私にアキヒトは例によって判断を丸投げしてくる。頼り

にならん奴だな。まさにネコ型ロボットに頼りきる、の○太状態。

「他の奴を捕まえても同じであろう。とにかくギルドに向かうぞ」

私とアキヒトは人を掻き分け、おぼろげな記憶を頼りにギルドへと向かう。するとかろうじて記憶はあっていたらしく、果たしてちゃんとギルドにたどり着いた。

次の転生者をこの世界に転生させようと考えた時に、始めにどこに向かわせれば良いかを考えていたのが功をそうして、記憶に残っていたようじゃ。

ギルドは木造3階建てで結構立派な作りだったが、今はみんな逃げ去ってしまい閑散としていた。だが受付に向かうと、これも記憶通りに私ほどではないが結構な美女が受付に座っている。

赤毛と赤い瞳。大きく胸元が開いている赤いワンピース。大きな乳房の大半が覗いているそのはしたない姿に「恥じらい」設定を持つ私は反射的に嫌悪感を抱いた。だが、今はそれどころではない。

「みんな町から逃げようとしている様だがどうしたのじゃ？」

「奴が来るのよ。みんな殺されるわ」

受付の美女は、私の問いかけに気だるそうに答えた。とても受付の態度とは思えんな。じゃが今は事情を聞くのが先じゃ。

「奴とは？」

「ドラゴンよ」

「ドラゴン？」

「ええ。それもただのドラゴンじゃない。五色ゴシキのドラゴン。どこに逃げてても無駄。世界は奴に滅ぼされるの」

「ほう。たいそうなものじゃな。それでその五色とはなんじゃ？」

すると私の問いかけに女は面倒くさそうに首を振った。

「そんな事も知らないの？ ドラゴンはそれぞれ色を持ち、赤のドラゴンは炎を統べ、青のドラゴンは水と氷を統べる。その様にして5種類のドラゴン達はそれぞれその色に見合った能力を持っている。でも数千年に一度、まれにその五色すべての能力を持ったドラゴンが生まれる。それが五色のドラゴン。記録ではそのドラゴンが現れるたびに世界は滅びかけ、ドラゴンに見つかからない様に細々と生き抜いた僅かな人間達によってまた数千年の歳月をかけ世界を復興する。それを繰り返してきたのよ」

そういえばこの世界にはそんな物も居た様な、居なかった様な……。膨大な知識の大半を失っている私には思い出せなかったが、まあ実際現れたのなら居るんじゃないかな。

「なるほど、それが今現れみんな逃げているわけか。お前は どうして逃げない？」

すると女は気だるそうに笑い声を上げた。

「あははあ。逃げてどうするっていうの？ どこに逃げても、どうせ逃げ切れないわ。たとえ逃げ切れたとしても、奴から隠れて惨めに暮らすくらいなら、いっそ奴に殺された方がいいわ」

この女はすでに死を覚悟し逃げないという事か。じゃがまあ早速仕事がありそうで助かった。

「それで、そのドラゴンを退治すると報酬はいくらなのじゃ？」

だが女は無礼にも、私の問いかけに哀れみの目を向けてきた。

「話を聞いていなかったの？ 倒すのは無理なのよ？ 出来ない事の報酬なんてあるわけ無いでしょ？」

「良いから答えよ。お前もギルドの受付のプロなら、今までの依頼と比較すればどれくらいの金額になるかの予測くらいはつけられよう」

「予想もなにも無いわよ。達成出来ない依頼の比較なんて出来ないわ。もし倒せるとしたら、町からの依頼なら町の予算のすべて。国からの依頼なら国の財産すべてでしょうね。倒せなければどうせ世界は滅びるのだから」

「ほう。それは凄いものじゃな」

するとそこに突然ギルドの建物の上を巨大な影が通り過ぎる。なんじゃ？ と思って影が通り過ぎた先を見ると、五色に光り輝き空を覆うような巨大な翼を持つドラゴンが飛び去っていくのが見えた。いや、飛び去ったのではなくドラゴンは旋廻するとまたこっちに戻って来るようじゃ。

「あれが五色のドラゴンよ」

女はドラゴンを見上げ、まるで誇るかの様に言った。目はクスリでもやっているかの様に完全に逝ってトリップしている。

「みなさい。あの爪を。王城の城壁すら剣で布を裂く様に切り裂くでしょう。」

みなさい。あの牙を。すべての人間はあの牙の餌食となるのよ。奴には誰も勝てない。

奴の炎を防げる者は居るかもしれない。

奴の吹雪を防げる者は居るかもしれない。

だけど奴の5つの力が同時に放たれた時、それを防げる者は居ないのよ。

五色のドラゴンは邪神ゼルドガスの化身とも言われているわ。邪神ゼルドガスは――」

うーん。話が長いな。

「アキヒト。構わんあのドラゴンを光神槍破で撃ってしまえ」

ずっと所在無さにぼつんと立っていたアキヒトに声を掛ける。じゃが、アキヒトは喋り続ける女に戸惑った様な視線を向けた。

「でも、まだ喋ってるよ」

「喋り終わるまで待ってられるか。撃ち方は頭に入っているはずじゃ。とっとと全力で討て」

「あ。うん。でも本当に言わないといけないの?」

「仕方あるまい。そういう決まりじゃ」

私の言葉に、アキヒトは五色のドラゴンへと手の平をかざす。

「神から授かりし、聖なる光の槍！　くらえ！！　光神槍破！！」

そしてアキヒトの手が光り輝きドキューン！　と音が鳴り光の槍が放たれた。その発射の衝撃で風が舞い私のスカートがなびく。

「恥じらい」設定のある私は反射的にスカートの裾を抑えた。そしてその光の槍は世界を滅ぼすドラゴンの身体を突き抜ける。そして一瞬の後、ドラゴンの身体は四散し地面にボトボトと落ちた。

それに伴い大量の血と肉塊が雨や雹ヒョウの様に地面に降り注ぐ。うわ……。ドラゴンが真上に居る時に撃たせないで良かったと、心の底から思った。そしてアキヒトに目を向ける。

「よし。よくやった」

「でも、どうしても台詞を言わないと打てないの？」

「無論じゃ」

「でも、『くらえ！！』はいらないんじゃないの？」

「それは勿論観てて……いや、とにかく決まりなのじゃ」

元々、私が観戦する為に異世界に人を送り込んでおるんじゃないからな。少しでも観てて楽しい様に台詞を言わないと撃てない事になっておるんじゃない。じゃが、それは黙っておこう。ちなみに威力は台詞を叫ぶ「気持ち」によって変化し、全力で打つには全力で叫ぶ「気持ち」の必要がある。

どういう事かというと、元々声が大きい奴も小さい奴も、はたまた風邪を引いて声が出ない奴でも、全力で声を出す「気持ち」ならば威力は一緒なのじゃ。そうでないと風邪で声が出ないので撃てません。という事になってしまいうからじゃ。

女に視線を向けると、状況が分かっていないのか思考が停止したのか、先程からの独り言は続いていた。

「邪神ゼルドガスは世界の始まりより闇に存在し、その眷属は16万2547種、253億8521万を数え……」

女の頬をペチペチと叩き目を覚まさせると、女は我に振り返り改めて私を見た。じゃが誰がドラゴンを倒したという事は認識しているのか、すぐにアキヒトに視線を移した。あまりの出来事に状況を信じられなかっただけで、ドラゴンの身体が四散したところは見えていたという事か。

「あなた……強いよね」

アキヒトを見つめるその目は情欲に濡れている。もしかしてこいつ、強い者フェチか？　そういえばさっきもドラゴンの強さを語りながらトリップしていたしな。

ふむ。そうになると、この女をハーレムの一員にするという計画はすんなりと達成出来そうじゃな。じゃが今は取り敢えず金が先決じゃ。

「あのドラゴンを倒せば有り金全部出すのであろう？　さっさと出せ」

じゃが女は私の言葉に答えず、カウンターを回ると受付の外に出てきて、アキヒトに近寄る。赤いワンピースと思っていた女の服は、右足の方こそ足首までの丈があるが、左足の方は太ももまでしかない。布を斜め切ったデザインで片足がむき出しになっている。ワンピースと言うよりセクシードレスといった感じだ。

この女はギルドの受付の仕事にかこつけて、強い男を漁ってるのだと直感した。その淫婦は私に構わずアキヒトの傍に立った。女の背はアキヒトより少し高く見え、女の割りに背が高いな。と思っふとその足元を見ると、かなり高いヒールを履いていた。それを脱げばアキヒトよりちよつと低いくらいか。

「私の名前は、エメルダ。あなたの名前を聞かせて頂けるかしら？」

女、エメルダは妖艶にアキヒトに微笑み掛けた。ハーレム作りを目指しているとはいえ、所詮精神的にはただの高校生のアキヒトは、露出の多い女からのあからさまなモーションに緊張している。しかし緊張しながらも何とか口を開く。

「アキヒトって言います」

「そう。アキヒトって言うの……。とてもいい名前ね」

エメルダはそう言いながらアキヒトの右腕を取り指を這わせる様にして摩る。

「この手からあの魔法を撃って、五色のドラゴンを倒したのね」

アキヒトはエメルダに腕を摩られ、くすぐったいのかビクツと身体を竦ませた。その様子を見たエメルダは獲物を前にした蛇の様に

チロリと舌で唇を舐める。そしてアキヒトの腕を、胸を押し付ける様にして抱えた。アキヒトはされるがままになっている。

ハーレムを作るとか言っておきながら情けない奴じゃな。じゃが向こうから獲物が飛び込んで来てくれそうなので、まあ一安心ではあるか。

「見ない顔だし、今日この町に着いたのよね？ この騒ぎじゃ宿もまだ取れてないでしょ？ 良かったら私の部屋に来ない？」

「それは良いな。世話になろうか」

じゃが、2人の会話に割り込んだ私を、エメルダは露骨に嫌な顔をして睨んだ。

「残念だけど、空いている部屋は一つしかないの。あなたはどこかに別に部屋を取れば良いんじゃないかしら」

この女。神である私をないがしろにするつもりか！ さすがにかなりムカついたぞ。

「ふっ。空いている部屋は一つと言っても、アキヒトは自分のベッドに引き込むつもりであろう。だったら部屋は空くではないか」

鼻で笑った私の言葉に、エメルダも「ふっ」と鼻で笑い、さらに私の事を小娘と見たのか余裕の笑みを浮かべて反論してきた。

「それが分かっているなら遠慮したら？ 私の部屋は壁が薄いのお嬢ちゃんには刺激が強すぎると思うけど？」

童顔で、見た目では私より若く見えるはずのアキヒトに手を出そうとしておるくせに。にもかかわらず私には刺激が強すぎるというエメルダに、さらに言い返そうとすると、意外にもアキヒトが割り込んできた。

「いや、僕、神さ……。彼女と一緒に部屋を取るよ。エメルダさんはまた今度で……」

そしてそう言いながら、エメルダの胸に抱えられていた腕を引き抜く。反射的に勝利の笑みを浮かべた私をエメルダは一瞬睨んだが、すぐにまた媚びた笑みを作りアキヒトへとしな垂れかかる。

「きつとよ。今度は絶対に私の部屋に来てちょうだいね」

「う。うん」

曖昧に返事するアキヒトを連れ、もう一度エメルダと視線を飛ばしあった。そしてその場を後にすべく彼女に背を向けた私だったが、重要な事を思い出し踵を返す。

「金だ！ このギルドの有り金全部出せ！」

第4話：異世界一日目の結果。これも自業自得？

その後、有り金と言うのはあくまで依頼があった場合だと言い張るエメルダと、アキヒトがドラゴンを倒さなければ滅んで居たのだから有り金を出して当然、と主張する私の対決はしばらく続いた。

結局エメルダの、自分の権限でこのギルドの有り金をすべて出せる訳がない。という主張を渋々受け入れた。やむなく当面困らないだけの金を出させ、そして正式な報酬額はギルド本部に問い合わせるという事になった。

ふむ。まあ返答を待たねばならんのは面倒じゃが、結果的には良かったかもしれん。一ギルド支店の有り金全部より、ギルド本部からの報酬の方が多い可能性もある。

エメルダに「ギルド本部は、あのドラゴンを一撃で倒せる男を敵に回す度胸があるか聞いておいてくれ」と一言残し、今度こそ本当にギルドを後にした。

そしてエメルダの姿が見えなくなってからアキヒトに声をかけた。

「確かにあの女は気に食わなかったが、ハーレム要員候補の1人には違いあるまい。良かったのか？」

「うーん。でも、せっかくの初めての夜だし、君と……神様と一緒に居る方が良くなくなって」

ふむ。変な事を気にする奴だな。じゃがまあ、そう言われては悪い気もしないか。

「それは気を使わせてすまん」
と笑いかけると、アキヒトは顔を赤くして俯いた。理想の彼女の姿の私に照れている様じゃ。

私達は歩き続け、ドラゴン襲来とその後の死亡の混乱の中、遅しくも営業をしていた宿屋を探し出しその扉を潜った。

「あ。部屋は僕が取ってくるよ」

宿屋に入るやいなやアキヒトはそう言うと、受付に駆けて行く。
1人残された私は空いていた椅子に座った。今まですべて私任せにしていたくせに殊勝な事ではないか。

まあいくら異世界でも、言葉が通じるのなら部屋を取るぐらい簡単ではあるうがな。そう思って部屋を取っているアキヒトの背中を見ていると、ぐうぐうと腹部から音が鳴る。

なんだ？　とっていると、急激にお腹が苦しいというか切なくなってきた。思わずお腹を抱えて椅子の上で蹲っていると、部屋を取ったアキヒトが返ってきた。

「どうしたの？」

と椅子に蹲る私に心配そうに声を掛けてくるアキヒトに、状況を訴えようとした瞬間、またも私の腹部が、ぐうぐうと鳴った。

「ああ。お腹が空いたんだね。じゃあ、何か食べに行こうか」

笑いながら言うアキヒトに私は赤面した。どうやら女の子がお腹が鳴るのを聞かれるのは「恥じらい」設定に抵触するらしい。しか

しこれが空腹という感覚か。神なので知識としては知ってはいたのじゃが、自分がなってみぬと分からぬものじゃな。

私とアキヒトは一旦宿屋を出て、今度は飯屋を探す。町の混乱はまだ収まりきってはいなかったが、人間は食わねば生きていけぬので、開いている飯屋は簡単に見つかった。

店に入りテーブルに座った私とアキヒトだったが、2人とも言葉は通じるが料理の名前は分からない。全知の私は当然この世界の料理の名前もすべて知っていたはずじゃが、今はすべて忘れてしまっているのじゃ。

「アキヒト。どの客が食べている料理が美味しそうなのだ？」

「うーん。僕もこの世界に来たばかりなんだから分からないよ」

私の問いかけにアキヒトは困った表情になり首を捻った。しかし料理を頼まない訳には行かない。お腹が空いているのじゃ。

「良いから選べ。料理を食べた事がない私が選ぶよりはお前が選んだ方がマシなはずじゃ」

私の言葉に、アキヒトは店内を見渡し、ある男が食べている物を自信なさそうに指差した。私は店員を呼んで、

「あの客が食べている物を2つ」と注文する。そして今後の為にその料理の名前を聞いておいた。

人並の記憶力になってしまったので膨大な知識の大半を失ったが、失う時に無意識に捨てる知識を取捨選択したらしく、生活に必要な知識は優先して残っている様だ。だが感覚というものは良く分から

ない。始めに転んで膝をすりむいた時にその感覚を「痛い」と判断したが、それは地面に膝を打ったら痛いはず、という知識があったからに過ぎないのだ。

しばらくするとテーブルに料理が並べられ、その匂いが鼻腔をくすぐり、口の中に唾が溜まった。アキヒトが「美味しそうな匂いだね」というので、きっとそういう匂いなのだろう。

皿に盛られた動物の肉を焼いた物を一切れ口に入れる。アキヒトも同じ物を口に入れ、そしてちゃんと噛んでいるのか分からないくらいすぐに飲み込んだ。

「美味しいね」

というアキヒトが言うので、私も口の中の物を飲み込み、口を開いた。

「美味しいと言うのはどういう感覚だ？」

美味しい物を食べた方が良いという知識はあるのじゃが、実際の美味しい物を食べた体験がある訳ではない。その為問いかけた私の言葉に、アキヒトは首を捻り少し考えていた。そして首を捻りながら答える。

「うーん。もっと食べたいと思う感じかな？」

なるほど。と言って、またその「美味しい」物を一切れ口に入れた。

その後私とアキヒトは、その「美味しい」物すら口に入れたなくなる感覚。つまり「満腹」になると店を出て、宿に戻った。

宿に着くと早速アキヒトが取った部屋へと向かう。部屋を取った時はその後すぐに飯屋に向かったので、初めて部屋に入る事になる。

アキヒトを先頭に、受付の横の階段を上って最上階である3階に着き、さらに廊下を進むと突き当たりの部屋の前でアキヒトは止まった。

「ここが取った部屋だよ」

だが私は、アキヒトの言葉に首を捻った。

「一部屋なのか？」

「うん。別に一部屋で良いかな〜って、思って」

そう言ったアキヒトの声は少し上ずっていた。

「ふむ。そうか」

アキヒトの事を挙動不審とは思いながらも部屋の扉を抜け、中に入った。その後にアキヒトが続く。部屋の中は結構広く、調度品も中々の物を置いている。結構値が張りそうだ。だが広い部屋にしては問題がある。

「どうしてこんなに部屋が広いのに、ベッドは一つなの？ 余裕でもう一つ置けるだろ」

私の素朴な疑問に、だがアキヒトはあからさまに目をそらす。嫌な予感がした。扉の前にはアキヒトが立っている。窓は……ここは

3階。逃げ道はないか……。

警戒しなければとは思っていたが、まさか初日から来るとは。止むを得まい。あえてアキヒトに近寄りその前に立った。

「いいかアキヒト。確かに今はお前の理想どおりの彼女になっておるが私は神様でな。いくらなんでも——」

と口を開いたが、アキヒトはそれを遮って叫んだ。

「だって。この世界では僕の彼女って、神様も言ったじゃないか！」

ああ、足を怪我して背負って貰う時に確かに言ったな。

大人しいはずのアキヒトの目が血走っている。理想の女の子と部屋に2人きり。しかも私の方からお前の彼女だと宣言してしまったのだ。テンパるのも無理は無いか。しかしあれはあの場をしのぐ為だけの台詞のつもりだったのじゃが……。もしかして失敗したか？

「いや、だからあれはそのつもりで私を守って欲しいと——」

「だから僕は君が彼女のつもりだよ！」

アキヒトはまたも私の言葉を遮り、そして両手で私の両肩を掴む。そしてアキヒトの顔が私の顔に近づいてくる。

くっ！ 避けなければ。じゃが私は動かない。動けないのではない。避けたいと「思えない」のだ。なぜじゃ？ そこに私の脳裏に「設定」が浮かぶ。「彼氏であるアキヒトのする事は拒みつつも最終的には何でも受け入れる」これか！

うわ~~~~!! と思っっている間に、アキヒトの唇が私の唇を塞ぐ。

「ん~~~~!!」

しかも恐ろしい事に、嫌じゃないから余計に困る。「受け入れる」設定により、むしろ嬉しいと思ってしまう自分に泣きそうになった。自分神様なのに。

だが、設定に縛られるなら縛られるで、それを利用してやる。設定から外れない範囲でなら自由に動けるはずじゃ。「恥じらい」設定に賭ける事にした。アキヒトが唇を離れた瞬間、すかさず口を開く。

「初めて会ったその日になんて恥ずかしいから、また別の日にしよう」

その言葉にアキヒトの動きが一瞬止まる。上手くいったか？ よしここが勝負じゃ。一気にたたみ掛けよう。

「こういう事はもっとお互いの事を知ってじゃな。それから少しずつ……」

だが私の淡い期待は裏切られた。アキヒトは

「でも、我慢出来ないよ！ 君は僕の理想の女の子なんだから！」
という言葉と共に私を抱きかかえる。

ひ弱と思っていたら意外に力がある事に驚いた。私が与えたチート能力に腕力強化は付いてないのだ。テンパって火事場の馬鹿力でも出てるのか？ そして設定が邪魔をして抵抗が出来ないまま、べ

ツドの縁まで運ばれてしまう。

だがアキヒトはそこで力尽きたのか、ベッドまで運んだ事に気が緩んだのか、私は乱暴にベッドの上に落とされた。

「危ないではないか！」

抗議の声を上げたが、それと同時に背筋に疼くものが走るのを感じた。乱暴に扱われた事により、最後まで残っていた一番発動して欲しくなかった設定。「むしろ本当はM気質」設定が反応したのだ。

もはや、抵抗したいと「思わなくなった」私に、アキヒトが覆いかぶさってきた。近づいてくるアキヒトの顔を見つめる私の目が「設定」により思わず潤む。「設定」によりがんじがらめとなり、抵抗するすべを失った私は、心の中で絶叫した。

いやだ~~~~~！！

第5話…人類はサルから進化したのだな。

「気持ちのいい朝だよ。朝早くて誰も居ない町並みってなんか不思議な感じだね。ほら小鳥が鳴いている。僕、朝がこんなに気持ちのいいものだって今まで知らなかったよ」

上半身裸のアキヒトが部屋の窓を開け、外を眺めながらさわやかに言う。そしてベッドの上で裸体をシーツで隠した私に視線を向けると微笑んできた。

じゃかましいわ！　なにさわやかに「経験して少し大人になった」感を出しておるんじゃ。だいたい昨夜のお前はさわやかでも何でもなかったわ！

昨日の夜、私に対しアキヒトは、

「ネットでこういう事をやっているのを見た」

「ネットに書いているのを読んだんだけど」

を連呼し、こっちが「拒みつつも最終的には何でも受け入れる」設定が発動して抵抗できないのいい事に、好き放題してくれたのだ。これだからネットばかりやっている奴は危ないのだ。手加減という物を知らん。

しかも「M気質」設定により、私はその好き放題に結構順応してしまったのだ。あんな事を「されてしまった」のは百歩譲って仕方ないとしても、して欲しいと言われ「最終的には何でも受け入れる」設定が発動し、あんな事を「してしまった」とは！　昨夜の自分の痴態を思い出し、頭を抱えた。神様なのに！　自分神様なのに！

頭を抱えている私に、アキヒトは近寄ってきて傍に座った。「恥

じらい」設定により、反射的にシーツを更に引き寄せ身体を隠す。

アキヒトはその私の様子に少し微笑んだ。くっ。の○太のくせに、余裕を見せおって。

「僕この世界でやって行けそうな気がして来たよ。昨日は強そうなドラゴンを簡単に倒せたし、君も居てくれるしね！」

こいつ、何が君も居てくれるじゃ。神様に向かって。これはあれか？ 一度抱いたら彼氏面という奴か？ 昨日の夜まではずっと空気がたたくせに、突然存在をアピールしおって、の○太のくせに生意気な！

しかし気に食わんが、実際迫られれば設定が邪魔して抵抗出来ないのは、昨夜十分過ぎるぐらい分かった。ならばいっその事一緒に居なければ良からう。

「少し出かけてくる」

そう告げる私にアキヒトは首をかしげ問いかけて来た。

「どこに行くの？」

「ちょっと散歩じゃ」

「じゃあ、僕も一緒に行くよ！」

「いや、1人で行きたいからアキヒトはここで待っている」

そう言って立ち上がろうとしたが、今の私は全裸だ。そして「恥

じらい」設定の為にシーツを外せない。

「着替えるから向こうを向いていろ」

とアキヒトに言って顔を背けさせて服を着て部屋を出た。そして「行って来る！」と言葉を残し足早に宿を出る。

ふん！ 二度と帰って来てなどやるものか！ お前は这个世界で1人で暮らすがい！

人通りの無い朝の町を足早に進んだ。だがどこに行く当ても無い。そしてその内にお腹が、ぐうぐう、となった。空腹の合図だ。ご飯を食べなければ……。

しまった。部屋から金を持ってくるのを忘れた。どうにかして金を稼ぐか。しかしどうやって金を稼ぐ。えくと。私の能力、技能は「特になし」……。

踵を返し足取り重く進む。そしてしばらくすると扉を開いた。

「あ。お帰り。早かったね」

やかましいわ！ と、椅子に座り、私に向けるアキヒトの笑顔に内心罵倒すると、無言でベッドの縁に座った。

どうする？ こっそりと金を持ち出してもう一度逃げるか？ いや、その金を使い果たしたら終わりじゃ。じゃあ金が有る間に何とか手に職をつけて働き口を探すか？ 針仕事とか。駄目だ。さすがにいくらなんでも面倒くさい。

まったく！ アキヒトめ。せめて「手先が器用」とか「歌が上手

い」とか、百歩譲って「料理が得意」ぐらいの設定はつけて置けよ。「特になし」じゃ本当に無能者ではないか。まさか全知全能から無能者に転落するとは予想だにしていなかったぞ。

しかも、認めるのが嫌で今まであえて目を背けていたが、頭も以前より悪くなっている気がするし。もっとも言うなれば思考する巨大なエネルギー体だったのが、人間の脳の回転を超えて考える事が出来なくなっているのだから当然かもしれない。しかも天才の頭脳でも何でもなく、普通の女の子の頭だし。アキヒトめ！　もっと頭の良い女を理想にしておけ！

これではまるで、某ネコ型ロボットをばらして組み立てなおしたら、コ○助が出来上がってしまったみたいなものではないか。しかも相方がキテ○ツではなく、の○太とは。

コ○助との○太の組み合わせ……。駄目じゃ、お先真っ暗じゃ。だがまあ、の○太にはチート能力をつけているので、劇場版くらいは活躍するじやろう。

だがそこにお腹が、ぐう~~~~。となる。そうだったお腹が空いていたんだった。飯を食べに行こうとアキヒトに顔を向けると目が合った。そしてアキヒトはにっこりと笑う。今のを聞かれていたと思うと、「恥じらい」設定で赤面する。

「じゃあ、朝ご飯を食べに行こうね」

私が口を開く前にアキヒトはすべてを見透かした様に笑顔でそう言うと、先に立って部屋を出る。私はその後が続く。完全に彼女扱いされている様でムカついた。

宿を出て2人で飯屋に向かう。そして扉を潜ってテーブルに座り、昨日の晩飯の時と同じ様にアキヒトに料理を選ばせ、店員に同じ物と言って料理を頼んだ。

並べられた朝食を見てアキヒトは感心した様に頷いた。

「世界が変わっても元の世界と同じ様に人が暮らしているだけあって、食べ物がいかに違うわけじゃないんだね」

「ほう。じゃあ、どれが何かアキヒトには分かるのか？」

私の問いにアキヒトは、皿の上に置かれた表面が硬く中がふわふわした物を手に取った。

「だいたいなら。多分これはパンみたいな物だね」

そしてナイフでどろどろとしたものを取ってそのパンみたいな物というか面倒くさいので、もうパンと呼ぶ、に塗りつけた。

「多分これはジャムみたいな物だからこれを塗って食べるんだよ」

そう言ってそのパンにジャムを塗った物を一口齧った。そして美味しそうに咀嚼する。なるほど。そうやって食べるのか。

私もアキヒトと同じ様にパンを手に取り、アキヒトとは別の黄色いジャム（どろどろとしたもの）をナイフで取ってパンに塗りつけた。そして頬張る。だが……。

「ひいひい！！」

突然口の中が火の点いた様に熱くなり悲鳴を上げた。

「あ。駄目だよ神様！ これ多分マスターだ！」

アキヒトはそういうと慌てて私の前に置いてあった水の入ったカップを手渡してきた。それを一気に飲み干す。それでも口の中の火は消火し切れず、アキヒトの前に置かれた水も飲み干した。

やっと一息ついた私の背をアキヒトが摩ってくれ、私はゼエゼエと荒い息を吐いた。

「人間はどうしてわざわざこんな物を食べるのじゃ！？ こんなものただの罰ゲームではないか！」

抗議の声を上げる私を、アキヒトはなだめる様に背中を撫でた。

「これを付ける時は、ほんのちょっとだけ付けるんだよ」

まったく！ それならばそうと早く言え。

こうして酷い目に合いながらも朝食を食べ、そして食べ終わると宿に戻る。

改めて部屋に入るとまたベッドの縁に座って、アキヒト対策を練る。とにかく夜の間だけでも別のところに寝るとか出来ないだろうか？ どこかに隠れるとか。ベッドの下とかはどうじゃ？ しかし神様がこそこそと隠れなければならぬとは情けない。

だがするとそこに椅子に座るアキヒトが声を掛けてきた。

「部屋にずっと居るって、退屈じゃない？」

「何を言う。私は何十億年もずっと独りであったのじゃ。退屈で暇つぶしをする事もあるが、その気になれば数万年ぼくとしておくくらい平気じゃ」

勿論その暇つぶしとは、アキヒトの様に人間を異世界に転生させる事なのじゃが、それは黙っておく。

「数万年？ 凄いな。僕には耐えられないよ」

「耐えられないも何も、お前は数万年を生きられんじやろうが。しかしさつき部屋に戻ったところじやろう。いくらなんでも堪え性がなさ過ぎるぞ。今までどんな生活をしてたんじゃ？」

すると私の言葉に、アキヒトは腕を組み首を捻った。

「えーと。とりあえず家に帰ったらテレビを点けて。パソコンの電源を入れて。ゲームをしたり漫画を読んだりかな」

「おいおい。漫画を読んだりゲームをしたりするなら、テレビはいらんじやろう。あとパソコンもじゃ」

「えー。だって部屋に音が無いと寂しいし、パソコンはいつネットで調べないといけない事があるか分からないじやないか」

うーん。エコを考えないやつめ。しかし常に何かしらの刺激を受けている生活をしてた訳か。じゃあ、この娯楽の少ない世界では退屈するかも知れんな。いい気味じゃ。散々私の身体をもて遊んだ報いというものよ。

「まあ、精々この世界の生活に慣れる事じゃな」

私は笑いながらそう言った。じゃが、しばらくすると何を思ったのかアキヒトは私の傍に来ると左隣にちょこんと座った。

「どうした？」

「え〜と。暇だなぁって思ってた」

「ふむ。しかし我慢するしかあるまい」

だがアキヒトは私の言葉を見做すのかの様に身体をにじり寄せてきた。そして右手で私の左手を握る。

「せっかく2人で部屋に居るんだから……ね？」

ね？　じゃねえ〜！！

「馬鹿。お前何言っておるんじゃ。真昼間って言うより、まだ朝だぞ！」

「だって退屈だし……。折角彼女と部屋で2人つきりなんだから、いいよね？」

「退屈とかそういう問題じゃないだろ！　馬鹿！　止めろ！」

だが手を振り解こうとする私に、アキヒトは逆に右手を引き私の身体を引き寄せると、さらに左手で私の右手を掴む。そして私の両手を頭の上でベッドに縫い付ける様にして私を押し倒した。

アキヒトの強引な行動に、「拒みつつも最終的には何でも受け入れられる」「M気質」といった私の設定が総動員される。ぬかった。まさか朝に奇襲を受けるとは！

「いいから。ちょっと落ち着け！ な？」

しかし私の抗議も虚しく、設定に縛られ、またしてもアキヒトにいたされたのだった。

ベッドの上でシーツに包まって全裸で横たわり疲労感に身をゆだねていた。同じく隣でまどろんでいるアキヒトの横顔を眺めながら、この状況について考える。

駄目じゃ。こいつはサルじゃ。退屈をこらえる忍耐もなく、暇だといっては襲ってくる。まったく、私はどの時点で失敗してしまったのか？ きつとサルを進化させて人を作ったところから間違ったに違いない。神としての力が回復したら、ナマケモノか、いつその事雌雄同体のナメクジ辺りを進化させよう。そう強く誓った。

だがそれはともかく問題は今じゃ。こんなサルとは昼間でも一緒にの部屋には居れん。

「アキヒト！ 出かけるぞ！」

「え？ どこに？」

「いいから。とにかく部屋を出るのじゃ！」

怒鳴って、シーツに潜りながらアキヒトに剥ぎ取られた服を身につける。そして状況が分からずモタモタしているアキヒトに服を着させ背を押すようにして部屋を出た。

こうして宿を出て町に繰り出したものの、特に目的が有る訳ではない。単に部屋で2人きりであるという状態に遅まきながら身の危険を感じ、部屋の外に避難したただけなのだ。

「これってデートなのかな〜」

隣を歩くアキヒトは私の心中など思いもよらぬ風に笑いかけてくる。アキヒトは私と仲が良いつもりなのだろう。もっともアキヒトから見ればそれも当然か。

なんだかんだいって一緒に居るし、いたされている時だって、まったく情けない話ではあるが諸々の設定の所為で、アキヒトから見れば私も十分喜んでいる様に見えるのだろう。アキヒトが私の事を彼女の様に思うのも仕方な……。

突然背筋に冷たい物が走った。ふと気付いた。私は、アキヒトに對して物分りが良すぎないか？

さっき逃げようとした時だってそうじゃ。本気で逃げたいなら、面倒くさいとか言わずに逃げればよいのじゃ。私のアキヒトへの態度もそうじゃ。さっき襲われる前の会話だって、嫌いならばもっと冷たい態度をとってもよさそうな物だ。

いや、そもそも昨日の夜、部屋の前で「アキヒトの事を挙動不審とは思いなから」どうして部屋に入った？ 挙動不審なら身の危険を感じて部屋に入らなければ良かったではないか。

襲われる時に設定によって縛られていると思っていたが、もしかしてすでに縛られているのか？ いや、すでにというより「常に」じゃ。そう「アキヒトの彼女」という設定に。

第6話…いよいよハーレム作り開始……だがその前に。

どうやら「アキヒトの彼女」設定が常時効いているらしい事は分かった。しかしそうなる一回逃げようとした時に、金を持つのを忘れた事すら、その設定の所為で無意識にワザと持って行かなかったのかとも思えてくる。何せ私の能力は完璧なのじゃ。

その完璧な能力で「アキヒトの彼女」設定が発動しているとなると、これは諦めるしか無いということか？ まさか自分の能力でここまで縛られるとは予想外だった。

しかしそれでも自分の身を守ろうと思ったら、やっぱりあれだ。アキヒトにハーレムを作らせ、ハーレムの女にアキヒトの相手をさせれば良いのじゃ。そうすれば私がアキヒトに襲われずにすむ。

こうなってはそれしかあるまい。

そうなるを取りあえずあのギルドの受付の女、エメルダがターゲットだな。ふむ。決まりだ。ギルドに足を向けるべくそう告げようと視線をアキヒトに送った。

「アキヒト。昨日は初日という事で見送ったが、今日より本格的にハーレム作りに入ろう。取りあえずエメルダに会いにギルドに向かうぞー！」

と、大声で宣言しようと思ったが、さすがに内容が内容だけあって街中で大声で言うのは「恥じらい」設定に抵触した。なので小声で耳打ちする。

すると私の言葉にアキヒトは戸惑った視線を向け、その視線に相

応しい戸惑った返答をしてきた。

「え？ いいの？ 他の女の人と……したりして」

「何を言う。お前はその為にこの世界に来たのであろう。遠慮する事は無いのじゃ」

「でも……」

「でも、ではない。さっさと行くのじゃ！」

渋るアキヒトを引きずる様にしてギルドに向かうと結構な人だかりが出来ていた。どうしたのじゃ？ と思っていると受付で対応に追われているエメルダと目が合った。エメルダは他の者には分からぬ様に、視線で裏に回るように合図してきたので、その通りギルドの建物の裏に回る。

取りあえず建物の裏口と思われるドアの前まで来ると、アキヒトが首を捻った。

「どうしたんだろう？」

「この騒ぎがこのギルドの普段どおりでないとすれば、当然昨日のドラゴンが関係しているのであろうな」

「ああ。世界が滅ぼされるとか言ってたしね」

「うむ。それがいきなり退治されては、騒ぎにもなろう」

そしてしばらくするとやっと裏口が開きエメルダが顔をだした。

「待たせてごめんなさいね。中に入って」

その言葉に私とアキヒトはドアを潜り中に入る。そして廊下を進みいくつかのドアを通り過ぎある一室に案内された。エメルダは私達に椅子を勧める。そこはこのギルドで働く者達の休憩室らしく大きな長方形のテーブルと椅子が数個あったが、今は私達以外の人影は無かった。

アキヒトが椅子に座りその右隣に私が座った後、エメルダもアキヒトの左隣に座る。すると早速アキヒトに媚びた笑みを向ける。

「あなた凄いわよ。色んなところから問い合わせが来てるわ。一応まだあなたの身元は公表してないけど」

「問い合わせとはなんじゃ？」

だがアキヒト越しに問いかけた私をエメルダは見向きもせず、アキヒトに向かってさらに言葉を続ける。やっぱりこの女ムカつくな。

「誰が倒したのかっていうのは当然だけど、他に先駆けて召抱えたっていう王侯貴族や、中にはさっそく自分の領内の魔物を退治してくれないかっていう話まであるの。五色のドラゴンじゃない普通のドラゴンだってそう簡単に倒せるものじゃないし。強い魔物もゴロゴロしているわ」

そして「もつとも……」と言いながらエメルダはアキヒトに左腕に自分の腕を絡ませ、しな垂れかかる。

「あなたに掛ければみんなイチコロなんでしょうけど……」

お前がすでにイチコロになってるだろうと突っ込もうかとも思ったが、いけしゃあしゃあと「そうよ」と返されるのが目に浮かんだのでぐっと我慢した。

「しかしそういう話が来ているのなら、それに乗るのも良いかも知れんな。召抱えたいという申し出は断るとしても、退治して欲しいという魔物を退治して回るのも良いかもしれん」

どうやらアキヒトは自分から女を口説くのは苦手そうだ。ならばそこかしこで大物狩りをして英雄扱いされれば、このエメルダの様な女が向こうから勝手に寄ってくるじやろう。

すると私の言葉にエメルダはうつとりとし、だがそれでも私には目もくれずアキヒトにさらに身体を密着させた。

「巨大なドラゴン……。凶悪な魔物……。人々が恐れおののく怪物達を、この手は一瞬にして肉塊に変えるのね……」

エメルダは半分トリップしかかり、私がこの場に居るにも拘らず、今にもアキヒトに覆いかぶさりそうになっている。ここまで私の存在を無視するとはいい度胸ではないか。

だがアキヒトに目を向けると、昨日エメルダに迫られた時は戸惑っているばかりだったのに、今は少し余裕があるみたいで顔を赤らめながらも微かに笑みを浮かべている。あれか？ 経験を積んで余裕が出ましたか？

その経験とは私とであろうが！ アキヒトめ！ 私という者がありながら！ いやいや、何を言っておるのだ私は。しかしやっぱ

ムカついて来た。あ。そうか「アキヒトの浮気には多少怒りはするものの寛容で、決定的に嫌いになる事はない」この設定が発動しているのか。

この設定は、逆に言えば浮気されても許しはするが、やっぱり怒りはするという事じゃ。ふむ。では私がムカついて来るのも仕方あるまい。とにかく、どうにかしてアキヒトの浮気を妨害せねば。

いや、駄目だ駄目だ。それでは本末転倒だ。そもそもエメルダをあてがう為に、アキヒトをここに連れてきたのだ。

あゝいやだ！　そもそもどうして私が「浮気」されて怒らねばならん。アキヒトが他の女に手を出すと怒ってしまう自分に、さらに腹が立つてくる。くそ！　このやり場の無い怒りをどうしてくれるのか。

よし！　取りあえずこの問題は先送りにしよう。ハーレムを作るなら最終的には仕方ないが、今のところやっぱりムカつくのだ。椅子に座ったまま身を乗り出しアキヒトを押しつけ、エメルダとアキヒトの間に強引に割って入って話題を変えた。

「それでどんな化け物を倒して欲しいと言って来ておるのじゃ？」

割り込んだ私にエメルダは露骨に嫌な顔をしたが、ここまでされてはさすがに無視する事も出来ず、渋々私に向けて口を開いた。

「どんなって言うっても色々よ。今は手元に資料が無いから詳しくは言えないけど、比較的近場からも来てるし、ここから歩いて行ったら数日掛かるくらい遠いところからも来ているわ」

「昨日の今日で、よくそんなところから来ておるものじゃな」

「どうやら、早馬を乗り継いでやって来たみたい。よっぽど切実で急ぐんでしょね」

ふむ。効率を考えれば近場から片付けるべきだろうが、よっぽど切実というのにも興味が引かれるな。

「アキヒト、どうする？ 取りあえず話を聞いてみるか？」

とアキヒトに顔を向けると、私に押しのけられ仰け反った態勢のアキヒトと至近距離で目が合う。するとアキヒトは少し身動きし身体を引いた。気付くとお互いの身体が結構密着している。

途端に「恥じらい」設定が発動し、慌てて身を離す私をエメルダは鼻で笑った。ムカついたので何かやり返してやろうとも思ったが、それでは話が進まないのでアキヒトに改めて問いかけた。

するとアキヒトは予想通りの返答をした。つまり「うん」と頷いたのだ。ちよつとは積極的になったかと思っただけ、やっぱりこいつ判断力無いな。ともかく早速エメルダから話を聞こうと思って問いかけたが、エメルダは首を振った。

「それが、実は私も詳しい話は知らないの」

「何故じゃ？」

「何か裏があるのかも知れないけど、その依頼を持ってきた騎士は、ある王国から急いで来たって言うだけで、内容はドラゴンを倒した者に直接言いたいからってそれ以上は何も喋らないのよ」

「ふむ。そうになると国の体面に関わる問題か何かかの？」

「そうかも知れないわね。でもやっぱりその騎士の話を聞いてみないとうとも言えないわ」

「それはまあ、そうであろうな」

だがそこに突然アキヒトが大きな声で割って入ってきた。

「じゃあ、その騎士に会って話を聞こうよ」

私とエメルダが思わずアキヒトに視線を向けると、アキヒトは私に、はにかんだ笑みを浮かべて来た。

例によって自分が空気になっているのを察して、彼女の前でちょっと頑張って積極的になってみました。って感じか？ そんな事アピールされても困るが、まあちょうど良い。いつまでも私に判断を任せられても困る。ここはアキヒトに任せるか。

エメルダがその騎士を連れてくると騎士は入り口のところで礼儀正しく一礼した。黒い短髪で年のころは30過ぎぐらい。口元は引き締まり顎は四角く、鍛え上げられ筋肉によってか体格もなんか四角い。いかにも口が堅そうな男だった。

エメルダはまたアキヒトの隣に座りながら騎士にアキヒトの向かいに座るように勧めたが、男はエメルダの勧める椅子に座らず、テーブルを挟んだアキヒトの向かいに近寄っただけで立ったまま口を開いた。

「私はとある王国に使える者です。名は……私の名前から身元が知

られ王国の名も知られては元も子もありませんので、無礼とは思いますがご了承下さい。勿論、依頼をお受けして頂けるならば、私の名は勿論、国も名乗らせて頂きます」

ほ。ずいぶん慎重だな。しかしそれほどまでして隠さなねばならんとは、どんな依頼だ？ まあ詳しく話を聞か。と思っはみたもののこちら側を代表して話をするはずのアキヒトが、騎士に話の続きを促さない。

仕方が無いのでアキヒトの座る椅子の足を軽く蹴り、アキヒトがこっちを見たので目で合図をする。するとアキヒトはやっと気付いて口を開いた。

「あの。それでどんな依頼なんですか？」

やっと話を促したアキヒトに、騎士は少なくとも表面上はまったくじれた様子を見せず話の続きを始める。

「実は我が国の姫をフェンリルから救い出して欲しいのです」

「フェンリル？」

聞き覚えの無い名前にアキヒトが首を傾げると、エメルダが待っていましたとばかりに突然解説を始めた。

「フェンリルとは神話にも出てくる巨大な狼よ。その大きな口は世界を飲み込むほど大きいと言われているわ。神話では多くの神々をかみ殺した。まさに神すら恐れる魔物。さらに……」

相変わらず話が長いやつめ。しかしやけに化け物に詳しい女だな。

さすが強い者フェチと言ったところか？ もっとも神である私は、そんな奴を恐れた覚えは無いがな。知識の大半を失ってはいるが、私が恐れる者等居ないのは間違いないはずじゃ。所詮この世界の間が勝手に作った神話よ。

エメルダの独演に付き合っでは居られないと、またアキヒトの椅子の足を蹴った。アキヒトはエメルダに一瞬視線を向けたが、エメルダがトリップしているのを確認すると騎士に向かって再度問いかけた。

「それでどうしてさらわれてしまったんですか？ そのフェンリルに」

騎士も喋り続けているエメルダに、良いのか？ という視線を一瞬向けた後、問いに答える。

「実はさらわれたと申しますか……我が国は他の国に攻められ戦争となったのですが、敵国は勝算あって攻めて来ただけであり優勢で、我が国は滅亡の危機に瀕しました。そこにフェンリルがやって来て国王陛下にこう申したのです。「姫をくれるなら敵軍を追い払ってやろう」と。国が滅んでしまっっては民は勿論の事姫の命もありません。陛下はその申し出に乗り、フェンリルは陛下との約束どおり敵軍を追い払ったのです」

「でも、その王様が姫をフェンリルに渡すのを嫌がって、さらわれちゃったとかですか？」

「いえ、陛下は約束を違えず姫をフェンリルに与えました」

「え？ じゃあ何が問題なの？」

「それが……」

「それが？」

言い難そうに口をつぐんだ騎士だったが、アキヒトの再度の問いかけに渋々と言った感じで、目を瞑り少し俯きながら口を開く。

「姫が「自分に断りもなしに、勝手にやるな！」とお怒りになられました」

まあ当たり前だわな。

第7話：遂に1人目。とはいえやっぱりムカついた。でも自業自得？

「フェンリルの顎から流れる涎は川となり……」
よだれ

トリップしたエメルダの独演が続く中、騎士から事情を聞き終えた私とアキヒトは、その依頼について考えていた。

つまり、国王によって勝手にフェンリルに献上されてしまった王女が、フェンリルの元から逃げ出したいと言っている訳か。しかも一刻も早くという事で、国王は最強ドラゴンを倒した男の噂を聞きつけ、この騎士を急ぎに急がせ派遣したと。

数日の道のりを馬を乗り換え一夜でやってくるほど急ぐ要件とも思えんが、まあそこは国王にとっては命令するだけの事で、この騎士にとっては国王の命令だから忠実に守ったんじゃないかな。

「それでどうする？」

アキヒトがせっかくやる気になっている様なので、あえて判断を委ねてみた。アキヒトは首を捻った後、騎士に聞かれたくないのか小さい声で私に耳打ちしてくる。

「これで、そのフェンリルっていうのをやつつけちゃったら、フェンリルが可愛そうなんじゃないの？」

私も耳打ちし返す。

「じゃあ、アキヒトは誰かに勝手にやられたら、仕方が無いと諦めるのか？ 娘にとっては納得は出来まいよ。実際悪いのは娘に黙っ

て勝手に約束した国王じゃが、仮に娘の代わりに国王をフェンリルにやっても、フェンリルはむさい男など要りはしまい」

私の万能の力が今使えるのなら、その国王を姫の姿に変えてフェンリルにくれてやるところじゃが、残念ながらその力を失ってしまった。私が力を失っているのは今のところアキヒトにも内緒だしな。

私の言葉に、うーん。と腕を組み考え込み始めたアキヒトを置いて、騎士に問いかけた。もつとも重要な事じゃ。

「それでそのフェンリルから姫を取り戻せば、いくら貰えるんじゃない？」

私のおぼろげな記憶でもハーレムを作るのにも維持するにも、かなりの金が必要なはずじゃ。アキヒトは力づくで金を集めるは嫌みたいなので、合法的に金を集めねばなるまい。国王ならかなりの金を出せるはずじゃ。

「いえ。それが陛下は報酬についてはお金ではなく別のものを差し上げると……」

「別のもの？」

「はい。フェンリルを倒した者には、姫を差し上げると、仰せになつておられます」

うわ！ 懲りない奴。同じ事を繰り返してどうする。いや、だが待てよ？ そういう事か。

最近フェンリルが戦いに介入して勝利した国の噂は近隣諸国に広まっております。フェンリルが戦場に出たとなると目立つからな。それを約束を違えてフェンリルから娘を取り返せば外聞が悪い。国王が約束して戦いに勝利したにもかかわらずその約束を反故しては、たとえば相手が魔物でも国としての信用にも関わる。

だがこのままでは娘がうるさいし、勝手に逃げて来かねない。だがそれでは今度は自分の国がフェンリルに攻撃されてしまう。そして今フェンリルを退治出来そうな男、アキヒトの存在を知ったが、娘が国に帰って来てはやっぱり外聞が悪い。

それでフェンリルを人知れず始末して、さらに娘をどこの馬の骨とも分からん奴にやって、表向きはフェンリルと娘はどこかで静かに暮らしている事にしたいのじゃな。

その王女はフェンリル共々、国王である父親に完全に捨てられたという訳か。哀れなものだが……。にやりと笑い再度アキヒトに耳打ちする。

「受けるぞ。さっそく2人目じゃ」

「え？ 何の？」

「ハーレムのに決まっております」

察しの悪いアキヒトに耳打ちで、私の推測をすべて教えてやるとアキヒトは

「なんか可愛そうだね……」
と眉をひそめた。

「そう思うんならお前が貰ってやれば良からう」

「でも……、国に帰してあげる事は出来ないの？」

「娘を勝手に魔物にやって、それが不味くなるとすべてを隠匿しようとする国王じゃぞ。下手に国に帰したら、証拠隠滅のため娘といえど人知れず殺しかねん。良くて一生監禁じゃ」

「まさかそんな事まで……」

「じゃあ、殺されるか殺されないか、試しに国に帰してみるか？」

「そんな事……試せないよ」

だが決断力のないアキヒトはやっぱりそう言いよどむ。私が付いてないと何にも出来んのか。まったく仕方の無い奴よ。

「まあよい。判断はお前がしろ。お前のハーレムなのだからな」

うじうじ悩むアキヒトに突き放す様に言うと、アキヒトも仕方が無いという風に、

「分かりました。お受けします」

と騎士に答えた。

騎士はその答えに安心した様子で溜息を付き、改めてカスタニエ王国のダンジェと名乗った。そして明日の朝早速王国に受けて出発したいという。それに対しアキヒトは、分かりましたと答え、明日の朝改めてこのギルドで集合する事となった。

騎士、ダンジェが姿を消すと改めてアキヒトが不満を口にした。

「でも、やっぱりなんか納得できないな」

「まあ、世の中納得できる事ばかりではあるまいよ」

そこにやっとフェンリルについての長い独演を終了したエメルダが、初めて気付いた様に声を上げた。

「あら？ あの手士はどこに行ったの？」

「騎士ならさっき帰ったぞ」

テーブルに肘を置いて頬杖を付く私の呆れ顔の答えに、エメルダは肩をすくめた。自分でもトリップしてしまう事は自覚している様じゃな。

「それでフェンリルを倒すっていう依頼は受けたの？」

その問いに頬杖を付いたままアキヒトに視線を送ると、アキヒトは気乗りのしない様子ながらも、うん、と頷いた。

その答えにエメルダは恍惚の表情を浮かべる。そしてアキヒトを恍惚とした目で見つめ両腕で自分を強く抱きしめる。

「ああ……。じゃあ、あなたのあの魔法の一撃で、強大、凶悪なフェンリルが一瞬で肉隗に……」

そう言いながら自分で己の身体をまさぐり身をくねらせるエメルダ。その官能的な姿に、アキヒトは赤面し、「恥じらい」設定が発動した私も当然赤面した。だがエメルダは赤面する私達に構わずさ

らに身をくねらせる。そしてアキヒトに覆いかぶさる様に詰め寄った。

「見たい……。見てみたいわ。フェンリルを倒すあなたの姿を。お願い私と一緒に連れてって……」

飛んで火に入るとはこの事か。だがやっぱり「浮気には怒る」設定が発動し、アキヒトに他の女が近づくとムカついてくる。なので私の口からエメルダに着いて来いとは言いたくない。

仕方が無い、と椅子から立ち上がってアキヒトに耳打ちする。

「私は席を外しているから好きにしろ」

素晴らしい残して部屋を出る。出る時さすがにエメルダが不思議そうに私を見てきたけど無視をした。はたからみればカップルに見える男女なのに、その片割れの女が、男が浮気をするのを助長する行動をしているのだから当然か。まあ好きにしろも何もエメルダから強引に迫ってなし崩しなんじやろうが。

一瞬他の人が部屋に入らない様に部屋の前で見張っていようかとも思ってたけど、さすがに2人の声が聞こえてきたらムカつくどころの話じゃなさそうなので部屋から遠ざかる。

ふん！ 見つかるんなら勝手に見つければよい！ だいたいアキヒトもアキヒトじゃ！ 私の事を彼女と思っていると言うならば、私がハーレムを作れと言っても全力で断るのが筋であろう！

自分でも理不尽と感じるアキヒトへの怒りを燻^{くすぶ}らせたままギルド内の廊下を当てもなく進み、偶然目に入った階段を昇った。

階段は屋上まで続いていた。屋上はこの世界では珍しい事に平らで、その屋上に大の字に寝転がった。目の前に青空が広がり白い雲が通り過ぎていく。

いくら神でもいつも天から地上を見下ろしている訳ではない。時には気分転換に万能の能力を使い、地上から空を見る事もある。だが今見ている空はその時のとは違う気がした。

手を太陽にかざしてみると、血の色が透けて見える。息を大きく吸うと風の匂いがする気がした。胸に手をやるとトクン、トクンと心臓の音が聞こえる。これが実体というもののなのじゃな……。

その鼓動を聞いていると不思議と気分が落ち着いて来たので、そのまま寝転がり聞いていると、落ち着き過ぎたのかそのまま私の意識は途切れた。

目が覚めると青かった空の端の方が微かに朱に染まり、結構な時間経っている。

アキヒトは？ と、辺りを見渡したが当然居ない。慌てて階段を降りて元の部屋に戻ったが、やっぱり居ない。建物内を適当に歩き回って見たがやはりどこにも姿は見えなかった。私が先に宿に帰ったと思って、アキヒトは宿に帰ったのかも知れんな。

仕方無しに宿へと向かって歩き出した。

だが歩き出していくらしめない内に、前からアキヒトが駆けながらやって来た。そして私の姿を見つけると、

「あ！ 神様！」

とさらに駆け、近寄ってきた。

「どこに行ったのかと思って、心配してたんだ。宿に戻ってみても居なかったし」

そういうアキヒトは、ずっと私を探して走り回っていたのか汗だくになっている。

「あ、すまん。ギルドの屋上で寝てた」

「そうなんだ。でも、見つかってよかったよ」

汗だくの顔でそう言って笑うアキヒトに、なぜか赤面した。いや、今は「恥じらい」設定が発動する時でもないと思うのじゃが。

「じゃあ、帰ろうか」

と、いうアキヒトと並んで宿へと向かう。

青い面積より朱色の割合が増していく空の下を、アキヒトと歩きながら、ふむ、赤い空も良いものだなと思っていると、不意にアキヒトが口を開いた。

「あ、そう言えばエメルダさんが明日一緒に来るって」

ふ。アキヒト。せっかく忘れていたものを間の悪い奴め。ぐっすりと眠っていた怒りが猛然とおき出し、治まっていた反動からか一瞬で臨海を超えた。ほとんど反射的に右拳を握り、隣を歩くアキヒトの顔面目掛けて振りぬく。

ガキッ！

「ぬわあ~~~~！！！」

「だっ。大丈夫！？」

あまりの痛みに、右手を抱えた打ち回る私に、アキヒトが心配そうに掛けてきた。

アキヒトを守っている、絶対防御結界の事を忘れてた……。

第8話：思いの外油断ならぬ女だった。

> i 3 2 9 1 0 — 3 5 9 7 <

「ところであなた、今更だけど名前はなんていうの？」

カスタニエ王国の騎士ダンジェが用意した馬車に私とアキヒト、それにエメルダの3人で乗り込んだ。馬車に揺られていると向かいに座るエメルダが、アキヒトの隣に座る私に問いかけてきた。

確かに今更だが、名乗るタイミングも無かったし、アキヒトも人前で私の事を、神様と呼ぶのはひかえている様じゃ。だが何をはばかる事があるう。

「神様じゃ」

と平然と名乗った。変な偽名などを名乗るつもりはない。これは私のアイデンティティに関わる問題なのじゃ。

じゃが無礼にも、エメルダは怪訝な顔で再度問いかけてきた。

「たいそうなあだ名ね。まあいいわ。あだ名は親しくなったら呼ばせて貰うとして、本名はなんて言うの？」

「だから神様じゃ」

すました顔の私と、危ない奴を見るかの様な少し強張った顔のエメルダとの睨みあいはいしばらく続いたが、エメルダは視線を逸らしアキヒトへと向けた。その視線による問いかけに、アキヒトは小さ

く頷く。

エメルダはまた私に視線を向けると、理解しがたいものに遭遇した心境なのか、困っている様な怒っている様な複雑な表情をして、無礼な一言を発した。

「あなたのご両親のネーミングセンス、絶対におかしいわ」

やかましいわ！ 相変わらずムカつく女じゃな。まあ私が本当に神様である事は、いずれゆっくりと言い聞かせてやるとしよう。

だが今はまだ早い。今回は付いてきてはいるが、何せまだアキヒトのハーレムに入る事も確定したとはいいがたい。もっとも今後魔物退治巡りをする予定なので、昨日のエメルダの様子では、同行したいと言うのは間違いないであろうがの。

こうして、時に他愛も無い事を喋りながら日中ずっと馬車に揺られたが、当然カスタニエ王国には一日では着かない。ダンジェは町まで一日で来たが、それは夜も駆け、馬を乗り換えての強行軍なのだ。

日が暮れると、先行していたダンジェの従者が取った宿へ入った。だが夜になると、サル、もといアキヒトが襲ってくる可能性がある。

昨日の夜は、アキヒトが迫ってきて私の各種「設定」が発動して、こっちもさっちも行かなくなる前に先手を打って、

「いくら私がハーレムを作れと言ったとはいえ、他の女を抱いたその日に私を抱くつもりはないじゃろ？」

と冷たく言い放って事なきを得たが、今日はそうは行くまい。

アキヒトが迫ってきたらどうやって防ごうか。いや、もしかしたらアキヒトはエメルダの方に行くかもしれない。……うーん。それはそれでムカつくな。

神として人間であるアキヒトにいいようにされ痴態をさらす事への抵抗と、アキヒトの彼女として他の女にアキヒトを盗られる事への抵抗との板ばさみに悩んだ私だったが、思わぬ救いの手が現れた。

先行していた従者からなにやら耳打ちされたダンジェは、その従者に対して

「馬鹿者！　すぐに用意しろ！」

と怒鳴ると私達へと申し訳なさそうに顔を向けた。

「申し訳御座いけません。実は……エメルダ殿が同行するとは思っていなかったと申し、部屋の手配が一つ足りません。すぐに用意させていただきますのでしばらくお待ち下さい」

一瞬で状況を把握した私は、尽かさずダンジェに向かって笑顔で言葉を発した。

「いや、構わん。突然同行者を増やしたのはこっちの都合じゃ、私とエメルダは同室でよい」

エメルダと同室ならばアキヒトは部屋に来て何も出来ないだろうし、エメルダがアキヒトの部屋に行こうとするのも監視出来るからな。

アキヒトは、え？　という表情で私を見、エメルダは舌打ちしそうな表情で私を一瞥する。ダンジェはほっと安堵の溜息を付き、表情を和らげた。

「そうですか。大変申し訳ありません。ありがとうございます」

「いやいや、あまり無理を言う訳にも行くまい。この後の宿もずっと私とエメルダは同室で良いぞ。なにせ1人増やしたのはこっちの都合なのでな」

見る見る残念そうな顔になるアキヒトと、さらに険しい表情になるエメルダを無視してダンジェにさらにそう述べると、ダンジェは和らいだ表情のまま、うんうん、と頷いた。

「それは助かります。なに王国までは後2日です。それまではご不便かと思いますがよろしくお願いします」

こうして自分の身を守る事とエメルダへの妨害に成功したと喜び、その後出された晚餐に舌鼓をうって料理を楽しんだ。そして風呂に入って湯船に浸かる。

風呂というものに入ったのはこの世界に来て初めてで、当然生まれてからも初めてなのじゃが、中々良いものではないか。実体というのもやっぱり良いものじゃなく。

だが、エメルダを妨害できたからと言って喜んでばかりは入られない。妨害ばかりしてはハーレムに入って貰えんかもしれん。ハーレムに入っても何も無いのでは話にならんからな。うーん。ジレンマじゃ。

だがそれもまだ先の事よ。とにかく今日は素直に喜んでおこう。

ご飯も食べ風呂にも入った後、あてがわれた部屋のベッドに寝転

がり、ゆったりとした時間を過ごしていた。

退屈に耐性の無いアキヒトは、きつと暇で死にそうになっているに違いあるまい。まあそういう世界に来てしまったのだから、諦めて暇なのにも慣れる事じゃな。そうすれば私も昼間に襲われる事は無くなるかも知れん。

こうして退屈に耐性のある私はずっとまったりしていると、不意にエメルダが部屋に入ってきた。エメルダも風呂に入って来た様で髪が濡れている。そしてベッドの上に横たわる私の横に座った。そして寝そべる私を見下ろす。

「ちょっといい？」

「なにがじゃ？」

「聞きたい事があるのよ」

ふむ。なんじゃろうな。

「まあ構わん」

「アキヒトとあなたの関係ってなんなの？ 始めは普通に彼氏と彼女なのかと思ったけど、あなた昨日ワザとアキヒトに私を抱かせたわよね？ まさかそういう趣味なの？」

見下ろすエメルダを、寝そべったまま見上げて答える。

「趣味って？」

「世の中には、自分の相手を他人に抱かせたり、他人を抱かせたりして喜ぶ人が居るじゃない？　あなた達そうなの？」

「ほう。世の中にはそんな者達がおるのか。じゃが私はそうではないな」

するとエメルダは屈んで私に顔を近づけてきた。そして探る様な目で私の目を覗き込む。

「そうよね。今日は私の邪魔をしようとしているみたいだし。昨日は良くて今日は駄目な理由はなんなのよ？」

昨日と今日の違いは、はっきり言って気分の問題というか、昨日は止むを得なかったが今日は我慢できないというか、それだけの事なのだが、エメルダにしてみれば分かん話か。

「とりあえず納得できる様に説明して貰えるかしら？　けしかけられる様なマネをされたと思ったら今度は邪魔してくるなんて、気分が悪いわ」

うーん。結構目がマジじゃな。もう少し様子を見てから話すつもりじゃったが、止むを得んか。

「お前は私の親のネーミングセンスが悪いといったが、神様という名は親からつけられたものではない。言うなれば私という存在の名じゃ」

「存在の？」

「そう。私は神様という名前の人間ではなく、事実神なのじゃ」

私の言葉にからかわれたと思ったのか、エメルダの顔が険しくなり、口を開こうとしたが、手を上げてそれを制した。

「とりあえず黙って最後まで聞け」

眉をひそめさらに険しい顔になったものの、口を噤んだエメルダに話を続けた。

「アキヒトはこの世界の人間ではない。別の世界の人間じゃ。それを私がこの世界に連れてきた。そしてその時に3つの願いを叶えてやった」

「3つの願い」

「そうじゃ、そしてその一つがお前も見た、あのドラゴンを一撃で倒した力じゃ。それ以外にもあわせて色々と与えてはおるがな。まあ、そのおかげでアキヒトは、この世界では無敵のはずじゃ」

「まさか……でも……それなら……」

真っ向から否定されて、説明には苦勞すると思っていたら、意外にもエメルダは考え込み頭の中で私の言葉を反芻している様子じゃ。

「どうした？ 何か思い当たる事があるのか？」

「私は魔物には詳しいの。世の中には強い魔物は幾らでも居る。五色のドラゴン以外にも今の世には倒せる者が居ないといわれている魔物は沢山居るわ。でも、それでもやっぱり五色のドラゴンは別格。比べ物にならない。アキヒトはそれを一撃で倒した。でも私はアキ

ヒトの名前を一度も聞いた事が無い」

「まあ、そうであろうな」

「私は魔物だけじゃなくて、強い戦士や勇者、魔法使いにも詳しい。でもアキヒトの名前は知らなかった。今までまったく無名なのに突然現れたの。それも単に他の者と比べて強いってものじゃない。「居るはずの無い」五色のドラゴンを倒せる者なのよ。しかも一撃でそれが現れた。まるでどこから突然現れたかの様。それに……」

「それに？」

「怒らないで聞いてちょうだい。昨日アキヒトに抱かれた時、不思議に思った事があるの。とても鍛えている人間の身体じゃないって。戦士や勇者は勿論、魔法使いだってある程度鍛えるし、精神鍛錬の為に修行するわ。でも、アキヒトの身体は精々普通の男の子。いえむしろ貧弱だったわ。それで、どうやってあの強力な魔法を習得できたの？」

「それは、アキヒトが修行で身につけたものじゃなくて、私が与えたものだからじゃな」

寝そべる私と座って覗き込むエメルダは見つめ合う。それはしばらく続いたが不意にエメルダは口を開いた。

「それで、後2つの願いは？」

ぐっ。やっぱりこの話は避けられないか。いや、むしろこっちの話が本題とも言えるので避けようは無いのじゃが。だが、やっぱり話すのはちょっと恥ずかしかったので、寝返りをうってエメルダに

背を向けた。

「とりあえず、1つ目は私に理想の彼女になって欲しいと……」

「は？」

「そして、最後の願いは、この世界に私も付いてきて欲しいと……それがアキヒトの願いじゃった」

「はぁ……」

どうやら、もっと壮大というか、世界をどうにかするとか、さらなる強大な力とかを願ったのだと想像していたらしいエメルダが、気の抜けた声を漏らした。

「えーと、それでどうしてアキヒトに私をあてがおうとするの？」

生々しい話となり、「恥じらい」設定が発動し始め、顔を赤らめながら言った。

「アキヒトは私の事を彼女だと思って求めてくるが、私は神様だ。人間にそう素晴らしい様にされる訳にはいかん。だが私は外見だけではなく、心も「アキヒトの彼女」という願いを叶えている。アキヒトに迫られては拒めん……」

「それで、代わりに私の事を抱けっという事？」

私の背から機嫌を損ねたらしいエメルダの声が聞こえてくる。思わず言い訳っぽく口を開いた。

「別にそれだけではない……。始めにアキヒトにこの世界で何をしたら良いか聞かれた時に、戦って勇者になるのも、国を建てるのも、ハーレムを作るのも好きにしろと言ったら、アキヒトはじゃあハーレムが良いって言うから、そうしているのじゃ」

「確かにアキヒトは、好戦的じゃないし権力者を目指すガラでもなさそうだから、その3択ならハーレムを選ぶでしょうね」

エメルダの声から機嫌を損ねていた感じのものは消えたが、その代わりちよつと呆れている風に聞こえた。

「それで、邪魔するのはどうして？」

「私の心はアキヒトの彼女じゃ。アキヒトが他の女を抱くのはムカつく……」

ハーレム作りを勧めておきながら、他の女に手を出せばムカつくという、私自身支離滅裂と考える言葉に、思わず身を縮ませベッドの上で身体を丸めた。

そしてエメルダも私の言葉に呆れが頂点に達したのか、ふくふくと声を出しながら大きく息を吐くとベッドの上に仰向けに倒れた。

「神様の考える事は分からないわ……」

うるさい！ 私だってこんな状況訳分からんわ！ だがそうとは言えず私が黙り込んでいると、不意にエメルダがベッドから降りて立ち上がった。そして廊下へと通じる扉へと向かう。

「どこに行くのじゃ？」

と、問いかける私に、

「ちょっと」

とはぐらかす様に答えて部屋から姿を消す。だが部屋を出る時、私の方を見て微かに笑った気がした。

お手洗いか？　とも思ったが、なかなか部屋に帰ってこない。もしや？

慌ててベッドから降りて、部屋も出て廊下を走った。そしてアキヒトの部屋の扉を乱暴に開いた。

「アキヒト！　何をやっておるのじゃ！」

と、部屋に飛び込んだが、部屋に居るのは私の怒声に驚いているアキヒト1人。あれ？

「神様来てくれたんだね！」

私の突然の訪問に驚いていたアキヒトだったが、我に返るとそう言って満面の笑顔で近づいてくる。

「あ、いや。その、なんていうか……」

エメルダはアキヒトの部屋に行ったのだろうという当てがはずれた私が戸惑っている内に、アキヒトは目の前に立つ。そして私を抱き寄せた。

ええ〜〜！？

「まさか神様の方から来てくれるとは思ってなかったら、僕嬉しいよ！」

しまった！　これはまさかエメルダの罠にひっかかったか！？
慌てて身をよじりアキヒトから離れようとする。

だが、思わぬ私の訪問にテンションが最高潮となったアキヒトの
勢いに抵抗できる訳も無い。顎を摘まれ顔を少し上に向けられると、
アキヒトは私の唇を塞ぐ。

「んっっ！！」

そして私を抱きしめたまま、私の背にベッドが来る様に身体の向
きを変え、そのまま私を押し倒す。アキヒトの目を見ると欲望に潤
んでいる。例によって「設定」が総動員し身動きが取れない私は、
私の服を脱がすアキヒトの指を、アキヒトに負けないほど潤んだ目
で眺めていた。

第9話：すべてはこいつが悪い事に決定した。

貧弱なくせしてどこからその体力が沸いてくるのか、朝方になってやっとアキヒトが眠りに着くと、静かにベッドを降りた。普段はの○太のくせして、この黒の○太が！　そしてアキヒトを起こさない様に音を立てずに衣服を身につける。

神様がこそそしなければならいのは気に食わないが、起こしたらまた襲われかねんからな。何せサルだし。

そして扉をゆっくりと開けると廊下に出て自分の部屋に向かう。そして部屋の扉を開け中に入ったところで声を掛けられた。

「おはよう。神様」

「……おはよう」

見ると、ベッドの上で横たわるエメルダが笑みを湛え私を見つめている。

「どういうつもりじゃ？」

私を引っ掛けアキヒトの部屋へと向かわせた事について、睨んで問いかける私に、エメルダは平然と答える。

「どういうつもりって何の事かしら？　私の方こそ、ちょっと夜風に当たって部屋に帰って来たら神様が居ないからびっくりしたんだけど。アキヒトに抱かれるのを嫌がってたのに」

ちっ！ いけしゃあしゃあと、ワザとらしい。だが何を言っても
どうせはぐらかされるだけであろうと、口を噤んだ。

「いつまでそんなところに立っているの？ お疲れでしょうからベ
ッドに横になったら？」

エメルダの言葉にはムカついたが、実際クタクタだったので大人
しくエメルダの隣で、エメルダに背を向けベッドに横になる。そし
てさっさと朝食の時間までもう一度寝てしまおうと目を瞑った。

だがその私の背にエメルダが囁いた。

「昨日はあなたが抱かれたんだから、今夜は私よ。邪魔しないでね」

はっ！ つとして振り返ると、エメルダはすでに私に背を向けて
いた。そうか。わざわざ私をアキヒトに抱かせたのは、私に口を出
させない為か。せめて王国に着くまでは大人しくさせようと思っ
たのに。

だがとにかく疲れていたのも、エメルダへのムカつきも睡魔に勝
てず、瞬く間に眠りに着いた。

とはいえずぐに朝食の時間となり、エメルダに起こされる。そし
てみなが集まる食堂に向かって席に着く。しばらくするとアキヒト
もやってきて、私に微笑みかける。昨夜の痴態を思い出し、思わず
顔を赤くする私の様子を見てエメルダがクスリと笑った。

その瞬間カツとなり、椅子から立ち上がりエメルダを睨み付けた。
だがエメルダは私が睨んでいるにも関わらずすました顔で平然と答
える。

「え？　なあに神様？」

私の脳裏に反射的にエメルダへの罵詈雑言が浮かんだが、何も言えずまた椅子に座った。私の脳裏に浮かんだ怒声は、2人きりならともかく他にも大勢居るところでは「恥じらい」設定が邪魔して怒鳴れる内容ではなかったのだ。

改めて椅子に座り黙々と朝食を食べる。朝は先日食べたのと同じ様にパンとジャムが有った。この世界の朝食の定番なのかもしれん。そしてその他に野菜や肉が少し。そして食べ終わったら早速馬車に乗る。

馬車の中は、よっぽど険悪な雰囲気になるかと思っただけ、やはり寝不足で私もアキヒトも、ついでに釣られてエメルダもずっと寝ていた為平穩にすんだ。

そして次の宿についてまた食事をし、お風呂に入った後またもエメルダと同じ部屋に入った。

「今夜は私の番だからね」

エメルダはそう言うのと鏡台の前に座り、お風呂に入った後にも拘らず軽く化粧をし、首筋と手首に香水を振りかけた。そして露出度の高い黒いドレスを身に纏う。

私の前で平然とアキヒトに抱かれる為の準備を進めるエメルダの姿を、ベッドに横たわりながら眺めていたが、途中で見ているのが嫌になり背を向けた。

エメルダの立ち上がる音がするので、部屋から出て行くのかと思っ
たら私に近寄ってきた。何のつもりだ？　とっていると、エメ
ルダが私の耳元で囁く。

「これに耐えられないのなら、ハーレムを作るのなんてお止めな
さい」

思わず振り向くと、人の悪い笑みを浮かべたエメルダと目が合っ
た。

「私は強い人に抱かれるのが好きだからアキヒトに抱かれたいけど、
独占したいとまでは思わない。だからハーレムの一員になるのは構
わないわ。でも、ごたごたに巻き込まれるのは真っ平よ」

エメルダはそう言うのと私から離れ、背を向けた。そして右手を「
じゃあね」とでもいう風に肩のところでヒラヒラと振ると、部屋か
ら出て行く。

ちっ！　ハーレムを作るならアキヒトが他の女を抱くのにグダグ
ダ言うなという事か。人間の癖に生意気な。そんな事くらい分かっ
ておるわ！　だが設定が発動してどうしてもムカつくのだからある
まい！

しかし……確かにそのムカつきを女達にぶつけていては、ハーレ
ムを作るものにもないか……。やはりムカつきはアキヒトに向ける
べきだな。

とりあえず殴るか？　いや、アキヒトは絶対防衛結界で守られて
いるから、殴ったらこっちの手が痛い。確認済みじゃ。さてどうし
たものか？

アキヒトに外部からのダメージを与える事は出来ない。では、内部にダメージを与えるしかない。毒を盛るか？ いや、チート能力のオプシオンで毒に対しての免疫を与えてある。しまった。毒に対する免疫は、オプシオンから外すべきだった。

あ。そうじゃ！ 良い方法を思いつた。これならばアキヒトにダメージを与えられるぞ。アキヒトめ。見ておれ。

アキヒトへの制裁の方法を思いついた私は、エメルダが居ないのでベッドを1人で占領し、やがて寝息を立てた。

朝目が覚め辺りを見渡してもエメルダの姿は無かった。ちっ！ まだアキヒトの部屋か。一瞬エメルダへの怒りがわいたが、すぐにその怒りはアキヒトに向けるべきだと考え直す。

ハーレムを作れとけしかけているのは私なので、アキヒトが悪い訳ではないと考えるいでもないが、「浮気には怒る」設定が発動してしまうのだから仕方が無い。

いやちよつと待てよ？ 私の設定はアキヒトの願望で成り立っている。では私が「浮気には怒る」のはアキヒトの願望なのだ。なのでアキヒトは、私が「浮気には怒る」事について責任を取るのは当然なのじゃ！

つまり、私がアキヒトに腹を立てるのはアキヒトの所為であり、アキヒトには私の怒りを受け止める責任がある。うむ。完璧な理論武装じゃ。よし！ すっきりした。これで容赦は入らん。

それからしばらくすると、ドレスを少し着崩したエメルダが部屋に帰ってきた。

「おはよう」

「おはよう。神様」

私とエメルダはそう挨拶を交わし、その後エメルダは探る様な目で、私の顔を覗き込んだ。

「なにか、吹っ切れたみたいね」

「どうしてそう思う？」

「私を睨んでないからよ」

エメルダはそう言ってドレスを脱ぐ、そして地味な服を手にとった。とはいえ「彼女にしては地味」なのであって、「恥じらい」設定のある私にはとてもではないが着れない代物なのだ。

「ムカつきはすべてアキヒトに向ける事にしたからの」

「でも、ハーレムを作れって言ってるのは神様なんですよ？ それで他の女を抱いてアキヒトを怒るのはお門違いなんじゃないの？」

「それはそうじゃが、アキヒトが望んだから私はアキヒトの彼女になったのじゃ。ならば私が彼女としてムカつくのは、どんな事であろうとアキヒトの所為であろう」

すると私の言葉にエメルダは、クスリと笑った。

「確かに、そういう考え方もあるわね」

その後朝食の時間になったので、エメルダと並んで朝食が用意されている部屋に向かう。エメルダの身長は私とアキヒトとの中間くらい、背丈なのだが、履いているヒールの高い靴の所為で、アキヒトより少し高いくらいになっている。

「その靴、歩き難くは無いか？」

「普通に歩く分にはなれたわ。さすがにこの靴で走ろうとは思わないけど。神様も履いてみる？」

「いや。止めておく。見るからに足が痛そうじゃ」

部屋につくとアキヒトの姿は見えなかった。まだ来ていないようじゃな。もし先に来ていたらエメルダにアキヒトの注意をひきつけておいて貰おうと思っていたのじゃが、好都合じゃ。

おもむろに、アキヒトへの報復の準備を進める。その様子を見ていた隣に座るエメルダはぎょっとした目で私を見、私は無言でやりと笑い返した。

準備を終え、改めてテーブルの上を見渡すと、透明の液体が入ったビンが目についた。

「これはなんじゃ？」

とエメルダに聞くと彼女はビネガー《酢》と答えた。ほうほう、と少し飲んで見ようとコップに注ぎ、コップを口に近づけた。

だがエメルダが、

「駄目よ！ それは飲み物じゃないの」と慌てて止めた。

「飲めんのか？」

「ええ、それを飲んで美味しいという人は滅多に居ないでしょうね」

「ほうほう」

私はそう言いながら、改めてそのビネガーをコップに注いだ。その様子をエメルダは怪訝そうな顔で見ている。

「もしかして神様って味覚がおかしいの？」

「いや、アキヒトが彼女に特殊な味覚を望んでいない限り、味覚は普通のはずじゃが？」

エメルダは私の言葉にさらに怪訝そうな顔になり首を傾げた。

しばらくするとアキヒトがやって来た。アキヒトは私の姿を見つけると、昨夜エメルダの訪問を受けた事に気まずそうな顔をしたが、私がにっこりと微笑んでやると、とたんに表情を明るくし、のこと近づいてきて私の前の席に座った。

そして私に視線を向けた後、エメルダにも顔を向ける。アキヒトに微笑むエメルダに、アキヒトもはにかんだ様に笑った。ふっ。だが笑ってられるのも今のうちよ。

「アキヒト、お前の分の食事は用意してやっておいた。ありがたく食え」

そう言って、野菜や肉を挟んだパンが乗った皿をアキヒトの前に滑らせた。

「ほんとう！ わぁ神様が僕の分を用意してくれるなんて嬉しいな」

アキヒトは嬉しそうにパンを手にとると、エメルダが

「あ！」と声を上げるのにも構わず大きく口を開けて被りついた。

そして笑顔でパンを咀嚼していたが、突然声を上げ、そして椅子からも転げ落ちた。

「ひいひいひいひい！！」

とのた打ち回るアキヒトに、私は心配そうに駆け寄る。

「すまん、アキヒト。ちょっとマスタードが多かったか？ さあこれを飲め」

とコップをアキヒトに差し出した。アキヒトはコップを手にとると、コップを一気に傾ける。

だが今度は半分以上中身を飲んだところで、ぶっ！と噴出す。そしてゴホゴホと激しく咳き込んだ。ふむふむ。ビネガーとやらを飲むところなるのか。飲まなくて良かった。

そしてこの様子にエメルダが呟いた。

「……鬼だわ」

第10話..やっと王国に到着。

朝食の後、私達はまた馬車に揺られていた。

「すまん。まさかビネガーという物が飲めないとは知らなかったのじゃ」

私は、エメルダからの、嘘だ。という視線を受けながらアキヒトを宥めた。

「仕方が無いよ。神様は人間の世界の事をあまり知らないんだから」

アキヒトはそう言って、まだ青い顔で無理をして笑顔を作って私に微笑む。

アキヒト……。この分ならもう2、3回は同じ手で騙せそうじゃ。他愛も無いやつよ。そう思って笑みを浮かべながらアキヒトの背中を撫でる。

アキヒトが落ち着いてくると、やっぱり昨夜の寝不足がたたりアキヒトとエメルダが眠りにつき、1人残された私も退屈に耐性があるはずだったが、馬車に揺られる気持ちよさに2人に続いてすぐに眠りについた。

そして宿につくと例によって食事をして風呂に入る。エメルダと2人で部屋のベッドの上でたむろしていると、エメルダが今夜の事について相談してきた。

「今夜の事ってなんじゃ？」

「もちろん、私と神様のどっちがアキヒトの部屋に行くかよ」

うーん。そうは言われても、私はアキヒトに抱かれるのを回避する為にハーレムを作るつもりなんじゃから、私が行くと言う訳が無い。

じゃが、そうは言っても、エメルダがアキヒトに抱かれる事にエメルダを攻める気は無くなったとはいえ、エメルダに抱かれて来いとは、アキヒトの彼女としては言いたくない。

「おぬしの好きにするが良い」

結局私には、そう言っただけでエメルダから背を向けるしかなかった。

エメルダはクスリと小さく笑うと、私の後ろから近寄り肩に手をかけてきた。そして私の耳に顔を近づけてくる。

「まあ、明日は依頼主の王様に会うんだから、今日はアキヒトには我慢して貰いましょう。寝不足になって王様の前で欠伸でもしたら大変だから。アキヒトしつこいし」

「ああ。あいつはサルじゃからな」

「若いから仕方ないわよ。しかも私達みたいな美女と美少女が相手なんだから」

エメルダはそう言うときまたクスリと笑った。そしておもむろにベッドから降りた。

「アキヒトの部屋に行く訳じゃないから安心して」

エメルダはそう言って、部屋から出て行った。またエメルダがアキヒトの部屋に行ったと思って、私がアキヒトの部屋に突撃してしまわない様に言ったらしい。

そしてしばらくすると、お盆に水差しと琥珀色した液体が入ったビンを乗せて帰って来た。

「それはなんじゃ？」

「お酒よ。男が居ない時は飲まないと夜眠れないの」

ベッドに寝そべりながら問いかけた私に、エメルダはそう言いながらテーブルの上にそのお盆を置いた。そして椅子に座る。

「美味しいのか？」

「美味しくないわよ」

「じゃあ、どうして飲む？」

「だから、飲まないと眠れないからよ」

「そうか。美味しくない物を飲まないと眠れないとは大変だな」

「まあね」

エメルダはそう言って微笑んだ。その微笑にちよつと引っかかる。

「お前まさか私に飲ませまいとして、本当は美味しいのに美味しく

ないと言ってるんじゃないかな？」

「さあどうでしょう。でも、飲んだ事が無いなら少なくとも今日は飲まない方が良いと思うわ。お酒を飲むと翌日に頭が痛くなる人もいるから。明日は王様に会うんだから、そんな事になったら大変よ」

コップにお酒と水を注ぎながらのエメルダの言葉に、また引かなかった。これは見過ごせん。と、上半身を起こし、エメルダに問いただした。

「お前、王などより神様の方が遥かに偉いのを忘れてないか？」

するとエメルダは、目を見開いて一瞬呆けた様な顔なり、私の顔を見つめた。そして不意に大声で笑い出した。

「あはは。すっかり忘れてたわ。だって神様、生意気で喋り方のちよっとおかしい女の子にしか見えないんだもの。可愛いし」

これは舐められているんじゃないか？ 褒められているんじゃないか？ 7…3ぐらいで舐められている気がする。いや8…2か。

とにかく、王様に会うから飲まない方が良いという言葉が気に食わなかったので、ベッドから這い出し、エメルダの手から酒の入ったコップを奪い取り一口飲んだ。

「にがっ。確かに美味しくないな」

「だから言ったでしょ」

エメルダはそう言って私からコップを奪い返し、一口啜る。その

様子は美味しい物を飲んで顔に見えるのは気のせいかな？　もしかしたら味覚異常なのかも知れん。可愛そうに。

「しばらく飲んでから先に寝ておいて」

私が哀れみの目を向けていると、エメルダがそう言ったので先に眠る事にした。

朝になって目が覚めると、エメルダは私の横に寝ており、テーブルの上にあった酒の入ったビンが空となっていた。よくあんな美味しくない物を空になるまで飲めるものじゃ。

朝食の時間になったのでエメルダを起こして、食事が用意されている部屋へと向かう。椅子に座っていると、しばらくしてアキヒトもやって来た。だが椅子に座るといきなり欠伸をする。

「どうした寝不足かな？」

私の何気ない問いかけに、アキヒトは慌てた様に、

「あ、いや、別に……」

と言葉を濁した。

まさかこいつ、私かエメルダのどちらかが部屋に来るかと思って、ずっと寝ずに待っていたんじゃないかな？　私がそう思ってエメルダに視線を向けると、エメルダも同じ事を考えたらしく目が合った。エメルダはにやっと笑い、私も釣られて笑った。

また馬車に乗り夕刻近くになる頃ダンジェというカスタニエ王国とやらの城が見えてきた。城は赤色のレンガを積み上げて建てられ、外観の壮麗さに凝っているとは言いがたいが、中々の規模で城下町

も栄えていそうだった。

城下町の外門を潜った私達の馬車は城の裏手に回り止った。私達はそこで降りてこっそりと城内に入る。

「申し訳御座いません。何分公に出来ない事ですのでご了承下さい」

そう言うダンジェに案内されて廊下を歩く。他の従者などは城外で待機だ。

「ここでしばらくお待ち下さい」

まったく他の人間と会わぬまま廊下を進んで通された一室に入ると、ダンジェはそう言っ姿を消す。

部屋は私とアキヒト、そしてエメルダの3人の待合室にしてはやけに広く、20人くらいいたむろ出来そうだった。

10人以上が囲えそうな大きなテーブルにそえられた椅子に座り、テーブルに右肘を付きアキヒトに向かって口を開いた。

「やはり、この事を知っているのは城でも極一部と言った感じの様な」

「フェンリルとの約束を破ろうとしているから？」

アキヒトもそう言いながら私の左横の椅子に座る。

「そうじゃ、思ったとおりフェンリルを人知れず始末したいようじやの。となるとそのフェンリルにやったという姫の事を取り返して

も公には出来ぬはず。アキヒト。やはりその姫はお前が貰っておけ」

「え？ なに？ そういう話になっているの？」

今まで壁に寄りかかって立っていたエメルダは、驚きの声を上げるとテーブルのアキヒトの左前の当たりに座って足を組む。太ももまでスリットの入った露出の多いドレスの為足の付け根まで見えてしまいそうな格好だった。

「何を言っておるダンジェとその話をしている時、お前も居った……けど、トリップしてたんじゃない？」

後半呆れた様な口調になった私の言葉に、エメルダは肩を竦めた。

「まあね」

「それじゃあ、やっぱりフェンリルに捕まっているお姫様は僕が貰わないと殺されちゃうの？」

心配そうに言うアキヒトの言葉に私は肩をすくめた。

「ああ、それが良くて一生監禁じゃな」

「そんな話になってるの？ 酷い話ね。でも、お姫様をハーレムの一員にしようなんて凄いいけど、大丈夫なの？ そんな事をして？」

凄いと言いながらもエメルダの表情は若干硬い。うーん。この世界の感覚では王族は庶民とは同じ人間じゃないくらい別格扱いらしいな。

とはいえ神様である私にとっては王族だろうが庶民だろうが人間は人間だし、この世界の住人でないアキヒトにしても、王族って偉いんだらうな。程度じゃらう。

「なあに、アキヒトは世界最強の男じゃぞ？　王族だろうが所詮ハーレム要員よ。だいたいその王様から捨てられようというんじゃ問題あるまい」

じゃが私の言葉にエメルダは半信半疑の様だ。探る様な目を向けてきた。

「でも、王様にそのお姫様が捨てられるって言うのは本当なの？」

「間違いないと思うが、これから王様本人に会うんじゃ、そこで確認するでしょう」

どうやら私の知能は普通の女の子の頭と言っても、一応はその限界までは使えている様じゃ。いうなれば天才ではないが、普通の女の子が努力して到達できる限界の知能と言ったところじゃらう。普通の頭で特に努力もしていないアキヒトとは比べ物にならん。

エメルダと比べてもこの手の洞察力なら私の方が上らしい。もつとも経験や人間関係の機微では遅れを取るようじゃ。まあ神様である私には人間関係の機微など、今まで考える必要も無かったのだな。

しばらく待っていると、ダンジェが1人の男を連れてきた。そして一旦先に扉を潜ったダンジェはすぐさま入り口の横でうやうやしく頭を下げ、その男を室内に通した。

金髪は綺麗に整えられ蒼い瞳には優しげな笑みと落ち着きが浮か

んでいる。体軀も優れ背が高く適度に鍛えられてもいる様じゃ。姿勢もいい。上等な絹の服を着、さらに暑苦しそうな外套を纏う。どうやらこの男がこの国の王じゃな。

第11話：王様との対決とサルとの戦い。そして……。

王の出現にエメルダが座っていた椅子から立ち上がるとアキヒトも続けて立ち上がった。私は当然座ったままじゃ。どうして神様が王程度の者を立ってで迎えねばならん。王はアキヒトに視線を向け、泰然と名乗る。

「私はカスタニエ王国国王、デルブランドです」

「あ、アキヒトと言います」

「おお、あなたがアキヒト殿。あなたはあの五色のドラゴンを倒す勇者だとか。凶悪なフェンリルから我が娘フランティヌを救い出し、そして娶っては下さるまいか。娘も稀代の勇者であらせられるアキヒト殿と共に歩むを喜びましょう」

デルブランド王は、一国の王にもかかわらず丁寧な言葉でアキヒトに話しかけ、持ち上げ、娘をどこの馬の骨とも分からぬ奴に押し付けるのを、それが娘のためと巧みに話を持っていく。中々の曲者だな。私が前もってアキヒトに注意しておかなければアキヒトもコロリと騙され……。

「分かりました！ 僕やります！」

おい、アキヒト……。素直に騙されすぎだろう。後ろからアキヒトの足を蹴るとアキヒトは振り返って、あ！ という顔をした。まったく！ 一瞬私の言った事を忘れてしまっていたらしい。

しかしそれはそうと、開口一番「やる」と返事をしてしまったの

は失敗じゃな。娘だけを押し付けられても金にならん。娘以外に金も出させる予定だったのに。止むを得ん。ちよつと駆け引きっぽくなるが、無理やり引き出さすか。

「王よ。ちよつと良いか？」

国王に対しての私の言葉遣いにダンジェの手が腰の剣に伸びたが、デルブランド王はそれを手で制した。そして気にしたふうも無くにこやかに私に答える。どうやら立場をよく分かっているようじゃ。

「これはお美しい。我が娘も国一番の美貌と謳われておりますが、その娘すらあなたの前ではかすみましよう。ぜひお名前をお聞かせ願えませんか」

「神様じゃ」

「は？」

「だから名前は、神様じゃ」

「それはそれは……。それでどの様なお話ですかな？」

ふむ。どうやら私の名前についてはスルーする事にしたようじゃな。賢明な奴よ。私も名前の事で一々引っかかれても面倒じゃからな。

「姫を貰うのは良いとして、実は路銀が尽きてな。しばらくこの国に滞在したい。城下に我々が住む為の適当な家を見繕っておいて貰えんか？」

フェンリルから姫を取り返す事が秘密ならば、とてもではないが我々が城下に住むなど了承できないはず。とっとと出て行って欲しいならと路銀を用意するはず。たっぷりとな。

しかし私の思惑ははずれ、

「それはそれは、分かりました。屋敷を用意させましょう。勿論お金の心配は不要です」

と王はにこやかに返答した。

ほう。そう来るか。という事は……。

「アキヒト喜べ。しばらくこの城下に家まで用意してくれて、姫と一緒に住んで良いそうじゃ。ここまで便宜してくれるのじゃ、王を安心させる為にお前の力の片鱗を披露してやろうではないか」

私がアキヒトに視線を向けてそう言うと、アキヒトはキョトンとした表情となり、首を傾げた。

「力の片鱗ってたとえば？」

「そうじゃな。お前の不死身ぶりを見せてやるというのはどうじゃ？　もしお前を、後ろから剣でさしたり、寝首をかいて殺そうとしても無駄であるという事を見せてやろうではないか」

そして王に視線を戻す。

「おぬしも見てみたいであろう。何せフェンリルを退治しに行った挙句討伐に失敗しては大変だからの」

「え、ええ。是非」

というものの、王の顔色が少し変わった。城下に住む事を簡単に許可すると思ったら、やはりアキヒトがフェンリルを倒した後は、隙を見て後ろから刺すなり、寝込みを襲うなりしてアキヒトも始末するつもりじゃったか。

今度は騎士ダンジエへと視線を向ける。

「では、おぬしアキヒトを斬って見よ。背中から突き刺しても、首筋を狙っても良いぞ。もしアキヒトを殺せれば、あの女をやろう」とエメルダを指差した。

「ちょっと、勝手に人をモノ扱いしないでよ」

私の言葉に抗議の声を上げたエメルダに、私は首を傾げた。

「なんじゃおぬし？ 強い男が好きなのであろう？ アキヒトを倒せる男は自動的に世界最強の男じゃぞ？」

「それでも、自分で選ぶわよ」

とエメルダは腕を組んで私を睨んでいる。うーん。どうやら怒らせたか。しかし強い男が好きならば問題なさそうなのに、分からないものだな。

「そうか。まあどちらにしろありえん事だから気にするな」

そして改めてダンジエに顔を向けると、さすがにダンジエも戸惑い、王にどういたしますか？ と目で問いかけている。王はその視線に小さく頷いた。

「アキヒト」

と呼ぶ私の声にアキヒトがこちらに目を向ける。その瞬間ダンジ

エは腰の剣を抜き放ち、アキヒトの喉元を狙った。だが絶対防御結界に守られている為、ガッキン！と金属音が鳴りその首筋で剣は止まる。ダンジェの動きにまったく反応出来なかったアキヒトは、その音によってやっと自分の首元に剣がある事に気付く始末だった。エメルダと言えば、口元に手をやり目を見開いて驚いておる。

ほう。かなりの衝撃が手にかかっているはずじゃが、それでも剣を取り落とさぬとは。このダンジェという男中々のものじゃ。と関心していたが、当のダンジェといえば啞然とアキヒトの喉元で止まっている剣先を見つめていた。

「どうした？ 隙を突いて切りかかっても無駄と言ったのは、避ける事とでも思っていたのか？ じゃがそうではないぞ。ご覧の通りアキヒトには避ける必要が無いのじゃ。勿論寝込みを襲っても同じじゃぞ？」

私の言葉にダンジェは隠し切れぬ動揺の視線を王へと向けた。アキヒトを亡き者に出来ないのなら、姫を連れ城下に住まれてしまう。それではフェンリルとの約束を違えたのが周囲にばれる。そしてそれは国としての信用を失う事になるのだ。

「まあ我々も本当なら先を急ぎたいところなので、フェンリルを倒し姫を救出すれば、そのままこの国には戻らずに旅を続けたいところなのじゃが、肝心の路銀が無くてな。しばらく厄介になるがよろしく頼む」

そう言いながら、分かっているじゃろ？ と王に視線を向けた。王は笑みを湛えた目でそれに答えて白々しくも口を開く。

「おお、そういう事でしたら旅費ぐらいご都合いたしましょう。我

が娘を救出して下さるのならそれくらいお安い御用です」

ふむ。これでとりあえず旅費は十分確保できるな。じゃが、もう少し無心しようか。

「それはありがたい。まあ、姫もたまには里帰りしたかろう。その時はよろしく頼む」

口止め料の上乗せを要求する私の言葉に、王は一瞬目を細めたがすぐに笑みを浮かばせた目に戻る。

「いや、あれはずっと城内で暮らしていた為か、実は昔から遠くに旅をするのを夢見ておりました。旅費は十分用意いたしますので、是非娘の夢をかなえてやって下さい」

まっここまでか。これでかなりの額を引き出せるだろう。もし少なかったらもう一度脅す事になるが、この王ならばそれくらい心得ていよう。無駄な手間をかけるくらいなら、初めから気前よく払うじやろう。

私と王とのお互い言葉の裏を分かった上での表面上は穏やかな会話を、アキヒトは、ふんふん、と聞いている。多分こいつは何も分かってなくて、表向きの会話を素直に信じているに違いない。

しかしこの男も王としては有能なのじゃろうな。今回のフェンリルに娘を差し出した事も、内外には、国の為に私情を捨て、泣く泣く大事な娘を魔物に捧げた国民思いな賢明な国王。とても宣伝してそうじゃ。

その後私達はまたも人目を避けて移動し、今晚泊まる部屋へと通

された。部屋と言っても廊下から中に入ると、その室内はさらに数部屋に分かれていて寝室も複数ある。調度品や寝具も最高級の物を置いているようじゃ。どうやら他国の貴族や王族を招いた時に使用する部屋らしい。

「へー。凄い部屋だね」

アキヒトは部屋中を見渡し、さらにそこかしこの扉を開きながら言った。

「まあ事情を知るお前を殺すのは無理と分かったようじゃし、精々機嫌を取るつもりなのじゃろう。王自身は命令するだけで、自分は指一つ動かすわけでもないしな」

「え？ 僕を殺す？ どうしてそんな話になってるの？」

「お前、本当に気付いてなかったんじゃな……」

アキヒトに呆れた視線を向けていると、そこに不機嫌そうなエメルダの声が掛かった。

「ちょっといい？ 神様」

「ん？ 構わんがどうした？」

私がそう言ってエメルダへと向き直ると、エメルダは腕を組み声の通り不機嫌そうな表情をしていた。

「さっきのだけど、勝手に人を誰かにやるとか言わないでくれる？」

「あ。あれか。しかしお前は強い男が好きなんじゃろう？ だから構わんと思ったのじゃ」

「それでも相手は自分で選ぶわよ。今度から気を付けてね」

そして私から背を向けて廊下に通じる扉へと向かう。ん？ 一緒に部屋に居たくないほど怒っているのか？

「エメルダ待て。そんなに怒る事は無かろう。今度から気をつける」
だが意外にも私の声に振り返ったエメルダは笑顔だった。

「いいえ。もう怒っていないわよ。それよりお城なんだったら良いお酒がありそうでしょ？ それをちよつと貰ってくるだけ。しばらく戻らないと思うけど。後はよろしくね」

そして私とアキヒトにヒラヒラと手を振って扉の外へと姿を消した。

うむ。もう怒っていないと言うなら安心した。エメルダは怒らせたら怖い気がするからな。神様を怖がらせるとは対した奴じゃ。

だがそう思って油断していると背後に人の気配がする。その気配に振り向く前に、後ろから私の腹部と胸のところに腕が回された。サル！ っていうかアキヒト！ そうだ部屋で2人きりになるとこいつが襲ってくるんだった。サルだから。

「2人つきりだね。神様」

そう言って、後ろから首を突き出し私の顔を覗き込もうとするア

キヒトの視線を避け、顔を背けながら、微かに震える声で答える。

「エ……エメルダが帰ってくるんじゃないか？」

「大丈夫だよ。しばらく戻らないって言ってたし」

「……ん」

アキヒトはそう言いながら、私の首筋に顔を近づける。くそつ。設定が邪魔をして私が抵抗出来ないのいい事に……。いやもしかしたら、いつも抵抗しないから、アキヒトは私が嫌がっていないと思っているのかも。

それどころか、下手をすれば私が喜んでいるとされている可能性すらある。前は私の方からアキヒトの部屋に突撃した事になっているし。

でも設定の所為で、お前に要求されたら抵抗出来ないんだと伝えたら、それならと、もつとんでもない事を要求される事も考えられる。抵抗できない事は黙って置いた方が良いか……。

しかしエメルダめ。やっぱりまだ怒ってて、ワザと私とアキヒトを2人つきりにしたな。

だがどうする？ 抵抗するか？ いや設定が働くから多分無駄じゃ。止むを得ん。ここで無駄に抵抗して長引いてその間にエメルダが帰って来てしまつては恥ずかしい。素直に抱かれるしかないか……。

じゃがこの部屋は明るすぎて「恥じらい」設定が働いて、かなり

恥ずかしい。

「分かったからベッドに行こう。それに明かりは消すのじゃ」

私がそう言うと、アキヒトは「うん。分かった」とロウソクやランプといった部屋の明かりを数個残して消した。だがその残っている数個はベッドに近い位置にある為結局は明るい。

「まだ明るいんじゃないか？」

と、抗議したが、アキヒトは

「十分暗いよ」

と聞く耳を持たない。これ以上は言っても時間の無駄か。

結局ベッドの回りは明るく、その明かりの所為で目が暗闇に慣れなれず、逆にベッド以外のところが暗くてまったく見えない。明かりを消したのがまったく意味の無い状況だった。

こうして結局結構明るいところでされたしまった私は、例によって色々な設定の為にアキヒトの無茶な要求にも応えてしまい、声を上げながら結構すごい事をしてしまった。だが、それでもエメルダが帰ってくる前に終わったと安心した。

アキヒトは昨日の寝不足がたたったのかすぐに寝息を立て寝入った。私は、さてと、と散らばった衣服をかき集める。

しかしこの身体どこおかしくないか？ 神の力があつた時に興味本位で人間の行為を覗いた事もあつたが、自分ほど派手じゃなかったというか……もっと大人しかったというか……。アキヒトの望んだ設定に、身体が敏感な、などという項目は無かつたはずなのじゃが。そう考えていると、暗闇からカチンというガラス同士がぶつ

かる様な音が聞こえた。

音の鳴る方を目を凝らしてみたが、やっぱり暗闇に目がなれずま
ったく見えない。だがまたカチリと音が鳴る。

「誰か居るのか？」

すると問いかけに答えて「え？ 居るけど？」と紛れも無いエメ
ルダの声が聞こえてきた。どうやらベッドの周りの暗闇と私自身の
声の所為で、エメルダが部屋に帰ってきていたのに気付かなかった
様じゃ。

「い……いつからじゃ？」

「ん……。いつからだろう？ とりあえずこれで3杯目だけど」

暗闇の中からまたカチリと音が鳴った。

うわぁ~~~~ん!!

第12話…生意気な王女との対決

「神様そんなに怒らないでよ。先に神様が私を怒らせるような事したんじゃない。もう！ ごめんなさいって。何度も謝ってるでしょ？」

フェンリルの居る山の麓まで連れて行ってもらう為に馬車に揺られながらエメルダがなだめる様に声をかけてくる。

あの後「はじらい」設定が全開となり、絶叫してのた打ち回った私は、部屋の隅で毛布に包まり枕を抱え、えぐっえぐっと、涙で枕を濡らし朝を迎えた。

そして今もまだ、恥ずかしさのあまり頭を抱え顔を上げられない状態だったのじゃ。

「神様。そんなに気にしないで」

とアキヒトも言うが、そもそもこいつがところ構わずサカるから行けないんじゃない。肩にかけてきたアキヒトの手を、パシッと弾いた。

結局馬車に乗っている間、私は一言も喋らず目的地に着いた。道案内と馬車の御者を兼ねるダンジェも、私達の様子がおかしいのに気付いているのか必要最低限の事しか喋らない。

馬車は城を出た後森に入り、その木々が生い茂る森を抜け、岩肌が露出しているところが多くなって来た頃、

「では、ここからは歩きます」

とだけ言ってダンジェは馬車を降り先頭に立って歩き出す。

そして私はその後を無言でさっさと追いかけて、その後ろに自分の荷物を背負ったエメルダと、自分のと私の荷物を背負ったアキヒトが慌てて追いかける。

黙々と歩きながらも私の頭の中は、昨日の痴態をエメルダに見られてしまった事について頭が一杯だった。あんな事をしたり、あんなところをあしたり、あんな事を言ったのを、全部見られていたのだ。しゃれにならなさ過ぎる。

いや落ち着け。何とか平常心になるんじゃない。神様としての能力があった時は、自分だって暇つぶしにと結構人を見ていたじゃないか。勿論その時は自分は人間の姿ではなかったし、単に生物の生殖行為としか見ていなかったのじゃが。まあそれは反省して今後は他の人間の行為は見ない事にするとして、とりあえず今どうするかじや。

自分でもいつまでもこう言う状態を続ける訳には行かないと分かっているが、「はじらい」設定が働き、とてもではないが今はまともにエメルダと目を合わせる事が出来ない。

私がそんな事を考えていると、エメルダが小走りに追いついてきた。そしてまた私になだめる様に声を掛けてくる。

「本当にごめんなさいって。まさか神様が泣くとは思ってなかったのよ。いつも偉そうで神経太そうだから、あれくらい大丈夫かなって」

何気に失礼な事を言われている気がする。しかしこっちは「恥じらい」設定の所為で人一倍恥ずかしいところに、人一倍恥ずかしい事をしてたんじゃ。あんなところ見られたら泣くわ！

じゃが、確かに「本来の私の性格」と「アキヒトの彼女」としての感情と「恥じらい」設定の発動がごちゃ混ぜになって、自分でも予測できない反応になってしまっているのは自覚しているが……。

しかしあれか？ 恥ずかしいが先に立って気付かなかったが、これは「神様なのに人間に苛められて泣いた」事になるのか？ そう思うと余計に情けなくなってくる。これもみんなアキヒトが悪い。あんな時に襲ってくるから。

「とにかくいい加減機嫌を直して私の話を聞いてちょうだい。フェンリルを倒す時について言っておきたい事があるの」

エメルダが真剣な声で言ってきたので、無視し続ける訳にも行かないとエメルダと目を合わせず無表情のまま

「なんじゃ？」

と短く答えた。

「フェンリルを倒す時は、フェンリルが姿を見せた瞬間話を聞かずに倒した方が良いと思うの」

「どうしてじゃ？」

とまた目を合わさずに答える。

「それは、フェンリルの話を聞いちゃったらアキヒトが――」

とそこにアキヒトが追いついてきて、

「え？ 僕の話？」

と割り込んできた。

「エメルダが言うには、フェンリルが姿を見せたら話を聞く前に、有無を言わず倒してしまえじゃと」

とアキヒトとも目を合わせず答えた。

「ああ、そう言えば王様と約束をしたっていう事は、フェンリルって言葉を喋れるんだね。でもどうしてフェンリルの話を聞いちゃ行けないの？」

「えーとそれは……。当然、フェンリルを倒すところを早く見たいからよ」

「うん。じゃあなるべく早く倒すようにするね」

「ええ。お願いね」

ん？ なんじゃそれは？ まったくエメルダの強い者フェチには困ったものじゃな。そんなにアキヒトが強いところを早く見たいのか。まあ好きにするが良いわ。真剣な顔をして話があるとか言うから何かと思ったらくだらん。

その後は、なんとなく無言のまま私達は固まって歩き続けた。時折エメルダが何か言いたそうだったが、まあどうせまたくだらん事じゃろう。

フェンリルのねぐらを目指していた私達が、完全に岩肌ばかりの場所に差し掛かると、先頭を進んでいたダンジェはおもむろに振り返った。

「もうそろそろフェンリルがねぐらとしている洞窟です。慎重に進みましょう」

そして辺りを警戒しながらさらに進むと、前方に大きな岩山が見えてくる。

「あの岩山の麓にフェンリルの洞窟があります。ここからはさらに慎重に」

ダンジェの言葉に、私達は岩陰に隠れながら少しずつ前に進む。ダンジェはフェンリルに見つかっては危険と考えている様じゃ。まあ実際アキヒトに掛ければフェンリルといえど赤子の手を捻る様なものなんじゃがな。

こうして進んでいるうちに、巨大な狼というフェンリルのねぐらに相応しい大きな洞窟の入り口が見えてくると、その入り口を出たところに人が居るのが見えた。

ダンジェもその姿を見つけたらしく、振り返り小さな声で言った。

「姫様です」

目を凝らしてみると、あの王の娘だけあって同じく金髪碧眼らしい。髪の毛の長さは私と同じくらいじゃが、私の様に真っ直ぐではなくウェーブしている。目は私より少し丸い感じか。身体は全体的に細いみたいじゃな。そしてこんな岩山にはそぐわない金糸をあしらった純白のドレスを身につけている。身長は……ここからでは比較する者が居ないので良く分からんの。どうやら私よりは高そうなのじゃが。

しかし……。あの王め。私の美貌の前では娘もかすむ、などと言っておったがお世辞だったか？

アキヒトの理想の彼女を再現している私は、アキヒトのもっともタイプなはず。だから「アキヒトの彼女」設定が働いていても、たとえ私以上の美人でもその事自体で嫉妬する事はない。客観的な美醜より本人の好みかどうかの方が重要じゃからな。

そして嫉妬心を介入させず冷静な目で見れば、あの王女は私に匹敵する美貌を有していた。

エメルダからも王女の顔が見えたのか、アキヒトに微笑みながら耳打ちする。

「ずいぶん綺麗な娘じゃない。早くフェンリルを倒して連れて帰りましょう」

なんじゃ？ エメルダもずいぶんハーレムに積極的じゃの。いや、早くフェンリルを倒すところを見たいだけか？

するとアキヒトは私に顔を向け、

「本当に良いの？」

と聞いてきた。ちっ！ 何度もハーレムに入れると言っておろうが、優柔不断な奴め。私に迫ってくる時は、異常に積極的なくせに。

「構わんから、とっととフェンリルを倒して貰って行くぞ」

私達はダンジェを先頭にさらに王女に近寄っていく。そしてかなり接近したところで、ダンジェが王女の足元に小石を投げ、それに気付いた王女がこちらを向いた。

ダンジェと王女は顔見知りらしくダンジェの姿を見つけた瞬間、

救援に來たと察したのか笑顔となり小走りに近寄ってきた。近づいてみると確かに背は高いの。アキヒトと同じくらいはありそうじゃ。まあこの世界の人間は言うなれば、アキヒトの世界で言うところの白人じゃし、アキヒトは日本人じゃからな。元の体格が違うのじゃろう。

「ダンジェよく来てくれました。あまりにも救援が遅いので、見捨てられたのかと心配しておったのです」

いや、すでに見捨てられてるんじゃないかな。と頭の中で突っ込んだが、まあ今はまだ黙っておいてやった方が良からう。ダンジェもしたたかなものでその様な事を尾首にも出さず、うやうやしく一礼しおる。

「姫様のお父上であらせられる国王陛下が、姫様を見捨てる訳は御座いません。ご安心を」

「しかし、どの様にしてフェンリルの元から逃げ出しましょう。フェンリルは万の軍勢を一匹で蹴散らす化け物。それに私の服には奴の匂いが染み付けられており、フェンリルには私の居場所が分かるのです。今は洞窟の近くの捨て置かれています。あまり遠くに行くとフェンリルが連れ戻しに來ます」

ダンジェは王女の懸念を晴らす為、再度一礼した後王女を安心させる様に微笑を浮かべた。はたから見えていれば、本心からの忠義者に見える。本当は見捨てていくくせに。

「姫様ご安心下さい。フェンリルの元より逃げ出すのでは御座いません。フェンリルを倒せる勇者を連れてまいりました」

だが王女は辺りを見渡した後、何が気に食わないのか喜ぶどころか眉を潜め不満そうな顔になっている。

「どこにその勇者が居るといいます。ここには貴方と貴方の従者と婢女はしため（下女）だけではないですか」

アキヒトを従者と間違えるのは仕方ないとしても、私を婢女と間違えるとは無礼な奴。やっぱり助けるのを止めてここに置いていてやろうか。

しかし私が口を開く前にダンジェが慌てて取り繕った。

「姫様。そうでは御座いません。こちらのアキヒト殿がそのフェンリルを倒せる勇者なので御座います」

だがそうは言われても、やはりアキヒトが勇者には見えないらしく、疑わしげな目をダンジェに向けている。まあ無理も無いんじゃない。フェンリルどころかそこらへんにいる犬にも負けそうだし。

「この者がフェンリルを？ 分かっているのですか？ もし逃げようとしてフェンリルに見つかり倒せなければ、わらわは連れ戻されるだけです、そなた達の命は無いのですよ？」

ほう。一応私達の身を案じてはくれているのか。思ったよりはまともそうな王女じゃな。だがさすがにここで問答を続けるのも飽きてきた。

「もう良いじやろう。お前がどう思おうと、私達がここまで来たのは勝てると考えてのうえじゃ。失敗してもお前の命は保障されるというなら、こっちの好きにさせて貰うぞ。取りあえずお前がここか

ら離ればフェンリルが追って来るのであろう。そしたら倒してやるから、さっさと行くぞ」

「お前……。そなた誰に向かって口を利いていると思っているのです！ わらわはカスタニエ王国第一王女フランティーヌなのですよ！ それをお前とは……。この無礼者！」

ちっ！　せっかくまともかと思直してやっていたのに、お前こそ誰に向かって口を利いていると思ってる！

「無礼なのはお前じゃ。私を誰と思っておる。神様じゃぞ！」

「神様……？　そなたは何を言っているのです。ダンジェ！　この者は気が違っています！」

王女はそう言って私を指差している。神様に向かって気が違っていると言った上に、指差すとは無礼にも程があるぞ！　神に対してそれこそ気が違った様な振る舞いじゃ。

「お前こそ気が違っておるぞ！　口を慎め！」
と王女を指差した。

「わらわを指差すとは、何たる事！　ダンジェこの者を黙らせなさい！」

だがそのダンジェもフェンリルを倒せる勇者であるアキヒトならともかく、私の立場がアキヒトにとってどういうものか計りかねているらしい。有能そうな男じゃが、王女をたしなめるか、それとも私を黙らせるか、さすがに態度を決めかねている。

不意に私達の周囲が突然雲でかげった様に暗くなった。見上げる
とそこには、体長50メートルはあろうかという巨大な灰色狼。フ
エンリルが私達を見下ろしていた。

さすがは狼。この巨体で足音すら立てずにここまで近寄ってきた
とは。そして頭上からひび割れた鐘の様な声がする。

「お前らうるさい」

まあ結果オーライとしておこう。

第13話：相手の言い分の方が正しい場合はどうしよう？

さあ、アキヒトよ！　今まで空気だったのを取り返すため、劇場版の○太のごとく、とうとうに大活躍するのじゃ！

じゃがアキヒトが動く前に、また頭上からひび割れた鐘の音がする。

「王女を取り返しに来たか？　恐れを知らぬ事だが、それ以上に信義を知らぬ者よ」

敵軍を追い払う代わりに王女を貰うと約束したのだから、その王女を取り返そうとするのは信義に反すると言いたいのか。

フェンリルのいう事も一理あるが、王とはそう約束したとはいえ、肝心の王女が納得してしまい。言い負かしてやろうかと私が口を開こうとすると、エメルダが先にアキヒトをけしかけた。

「いいから、早くフェンリルを倒してしまって」

「え？　でもいいの？」

「いいから、早く！」

まったくエメルダの強い者フェチぶりにも困ったものじゃな。そんなに早くフェンリルが肉隗になるのが見たいのか。じゃがエメルダの声を遮り、またもフェンリルが口を開いた。

「どうせ王女の承諾を得ていないと言いたいのだろ？　だが、我^{われ}が

敵国の軍勢を追い払っていなければ、王女の命もなかった。敵軍を追い払った事で我は王女の命の恩人でもある。その王女を貰うのに何の問題があるのか」

ちっ！ 気に食わん。こっちの言いたい事を先回りして反論しおつて。

「じゃが、それでも本人が承諾していないなら、余計なお世話であろう」

「では王女に聞こう。おぬし死んでも良かったのか？ 死にたくないのに我に助けられた恩を感じぬ、などという事は許さん。死んでも良かったというのなら、今ここで死ね」

フェンリルの言葉にみな視線が王女に集中した。

「わ…わらわは……。そ……それは……」

王女とはいえ所詮小娘。いきなり死ねだのという決断を迫られても答えられる訳も無い。だがそこにまたもエメルダがアキヒトの耳元で囁いた。

「王女様が困ってるでしょ？ 早くフェンリルを倒して」

だがアキヒトはフェンリルを倒すのに戸惑いを感じているみたいで、

「え……でも……」

と歯切れ悪く答えるだけで、いっこうにフェンリルを倒そうとしない。王女もそうじゃが、まったく決断力のない奴らばかりじゃ。

エメルダはアキヒトの反応に苛立った様に、親指の爪を噛んでいる。そんなにフェンリルを倒すところを早く見たいのか？

狼だけあって耳が良いらしく、エメルダの囁きはフェンリルにも聞こえたらしい。そして王女やアキヒトの反応をじれったいと思っただけではなく、フェンリルも同じ様じゃ。矛先をアキヒトへと向けてきた。

「まあよい。王女を取り返そうにも、我を倒そうというのがその様な者では話にならない」

そして私と王女へと向けていた顔をアキヒトへと向けた。

やっと戦いが始まるのか？ とアキヒトの傍から離れ岩陰に隠れる。エメルダもアキヒトへと視線を向けながらも続いて岩陰に隠れた。そして心配そうに口を開く。

「不味いわね……」

「どうしたのじゃ？」

「フェンリルの言い分は一理あるわ。アキヒトの性格じゃあ、それを聞いてしまっただけではフェンリルを倒すのをためらってしまうと思うの。一応前もって話は聞いていても、直接フェンリルの口から聞くのとはまた違うから」

「え？　もしかして、それでさっきから早くフェンリルを倒してしまえと言いつづけていたのか？」

「そうよ。なんだと思ってたのよ」

「いや、単にアキヒトがフェンリルを倒すところを早く見たいのか
と思ってたんじゃ。でも、それならそうと早く言ってくれたら良か
ったのに」

「アキヒトが居る前で、フェンリルの言い分を聞いたらアキヒトが
戦えなくなる。なんて言える訳無いでしょ」

「まあ、それもそうじゃな」

そして岩陰からアキヒトとフェンリルの様子をうかがうと、エメ
ルダもそれにならう。フェンリルは、その巨大な頭部をアキヒトの
眼前に差し出し睨んでいる。王女とダンジェも安全なところに避難
したように姿が見えない。

じゃが、あんな巨大な狼と対峙して逃げないとはアキヒトも意外
に肝が据わっている……。と思ってよく見るとアキヒトの足が震え
ている。なんじゃ？ たんに足がすくんで動けないだけか。まあ、
絶対防御結界があるから大丈夫じゃろう。

しかしエメルダにそんな事が分かる訳もなく、アキヒトに心配そ
うな視線を投げかけている。アキヒトがダンジェの剣を弾いたのは
見ていても、フェンリルの攻撃は防げないと思っているんじゃない。

フェンリルはアキヒトの眼前から顔を引くと、頭上からまたひび
割れた鐘の声を発した。

「小僧。恨むなら身の程知らずなわが身を恨め」

そして大きく口を開け、足がすくみ動けず光神槍破すら打つ事を
忘れたアキヒトに噛み付いた。

「アキヒト！」

と、その光景にエメルダが叫んだ。

じゃが、私以外の誰もが噛み砕かれるアキヒトの姿を予測したじやろうが、ガキッ！　と大きく音が鳴り、フェンリルの牙はアキヒトの身体にわずかばかりも食い込まず防がれる。

フェンリルは、ならばとアキヒトを岩にぶつけるためアキヒトを啞えて持ち上げようとしたが、ビクともしない。

無駄よ。絶対防御結界は攻撃を通さないだけの物ではない。どんな物理現象も無効化する。敵の攻撃を防いだ挙句、振り回されて頭に血が上りすぎて死んだりしては馬鹿馬鹿しいのでちゃんと対策も考えておる。ちなみに海に落ちても絶対防御結界は水から酸素を取り出し呼吸が出来る。

この世界で老衰以外の理由でアキヒトが死ぬとしたら、餓死くらいなものじゃな。そして光神槍破を撃てるアキヒトをどこかに閉じ込める事は出来ないのじゃ。

フェンリルはどんなに力を込めようともアキヒトがビクともしないこの結果に驚き、後方に跳びすさって、アキヒトと距離を置いた。

「小僧……。きさまなに者だ」

「ぼっ僕は、神様から凄い力を授かっている。だから誰にも負けないんだ！」

アキヒトは、フェンリルの攻撃を防ぎきった事に安心したのか、まだ少し震えてはいるが、フェンリルの問いに答えた。

しかしもつとかつこ良い台詞が言えんのか？　我は神より使わされし勇者！　とか。まあ後で練習させよう。

じゃが。とにかく今はフェンリルじゃ。とつと勝負を付けようではないか。

「アキヒト！　そんな大きいだけの狼など、早く倒してしまえ！」

「え？　でも……フェンリルが悪い訳じゃないんじゃない？」

「何を言っておる。結果的に無事だっただけで、そいつはお前を殺そうとしたんじゃないぞ！　もはや王女の事は関係ない。自分を殺そうとした奴を倒すのに何をためらう事がある！」

「でも、大丈夫だったし……」

「え……い。じれったい！　早く殺れと言っておろうに！」

だがそこに私達のやり取りにフェンリルが怒りの咆哮をあげた。

「きさまら！　黙って聞いておれば我を舐めおって！」

そしてまたもやアキヒトに跳びかかった。じゃが噛み付いても無駄と悟ったのか、踏み潰そうと前足をアキヒトに叩き付けた。じゃがやはり、アキヒトには何の衝撃も無い。衝撃をすべて無効化している為、アキヒトの足元の地面すらわずかばかりもめり込まず。何事も無かったように平らなままだ。

「お……い。だから無駄なんじゃって。アキヒトの身体を守る絶対

防御結界は、外部ダメージをすべて無効化する。弾くんじゃない。無効にするんじゃない。頑張っただうにかなる代物ではないぞ」

大声でフェンリルに向かって叫ぶと、自身の攻撃の結果もあってフェンリルは半信半疑、つまり半分信じた様子で、アキヒトから距離をとってその周囲を回り始めた。

だがやはりアキヒトから攻撃しなくては、ラチがあかない。

「アキヒト！ 何をやっておる！ 光神槍破を早く打て。それで勝負は決まるんじゃない！」

だがやはりアキヒトは

「でも……」

と躊躇し攻撃しない。えゝゝい。まどろっこしい！ 今のお前に必要なのは、漫画版の○太の優しさではなく、劇場版の○太の活躍というのに！

するとエメルダが耳打ちをしてきた。

「やっぱり、アキヒトにはフェンリルを殺すのは無理なのよ。どうにかしてフェンリルを倒さずに解決する事は出来ないの？」

フェンリルを倒さずにか……。単に王女を取り返すだけなら簡単なんじゃが、フェンリルが王女を取り返そうと王国に攻め込めば、王が約束を違えたのがばれる。

まあフェンリルに、王女と一緒に暮らしているとか、王女は病気で亡くなったとか口裏を合わせて貰えれば問題ないじゃろう。そして王からの報酬については、王女が生きているという事を秘密にす

る口止め料として貰って置けばよいし。

問題は、フェンリルが大人しくこっちのいう事を聞いてくれるかじゃな。あの手の魔物のくせに口が達者な奴は、口が達者なだけに言い負かすのは難しい。大人しくさせるには力を見せるのが手っ取り早かろう。

「アキヒト！ 分かった。フェンリルは倒さなくて良い。じゃが大人しくさせる必要がある。光神槍破を手加減して撃て！」

「うん。ありがとう。でも手加減ってどれくらいなの？」

「うーん。そうじゃな。フェンリルの大きさから見て、全力の10分の1くらいの威力で撃ってみよ。それだったら多分死なん」

じゃが私の言葉に、アキヒトより先にエメルダが驚いて声を上げた。

「え？ 10分の1？ フェンリルを？」

「ああ、あれだったらそんなもんじゃろう。それ以上で撃ったら多分死ぬ」

「フェンリルを10分の1の威力で……」

あ、なんかトリップしかかっているな。絶対今夜アキヒトのところに忍び込みそうじゃ。まったくこいつは。このままでは前言撤回して、やっぱりフェンリルを倒すところが見たいとか言い出しかねんな。

じゃが私達の会話は耳の良いフェンリルに、またも聞こえていた

らしい。

「我をその者の10分の1の力で倒すだど？ 見くびるなよ小僧！」
と、怒りをあらわにしてアキヒトに襲い掛かる気配を見せている。

とはいえ自分の攻撃が通用しない事に、アキヒトを只者ではないと認識を改めてもいるらしい。やはりすぐには跳びかからず、アキヒトの周りを回っている。

「アキヒト。とつとと撃て」

「でも、10分の1って難しいよ。どれくらいの声の大きさだろう？」

声の大きさが威力が決まる光神槍破の設定に、その声の大きさを計りかねているようじゃ。細かい事を気にする奴じゃな。それくらいフィーリングでどうにかしろよ。

「大丈夫じゃ。お前が10分の1ぐらいの声と思いながら叫べば、実際の大きさに関係なく10分の1の威力になるようになっておる」

「あ、うん。分かった」

アキヒトはそう言って右手をフェンリルにかざした。その様子をエメルダは岩陰から身を乗り出して見入る。両手で自分の身体を強く抱きしめ、かなりの興奮状態のようじゃ。意外とまともな奴かと思ひ直しておったが、やっぱりこいつもおかしいな。

そしてアキヒトは、私達に微かに聞こえる程度の声で、
「神から授かりし、聖なる光の槍。くらえ。光神槍破」

と呟いた。しかし、私が自分で考えたとはいえ、大声で言わないと逆に恥ずかしい台詞じゃな。

その呟きと共にアキヒトの手から、声の小ささにそぐわないまぶしい光の槍が放たれる。だがその光の槍をフェンリルは、

「甘いわ！」

と叫ぶと紙一重でかわした。光神槍破をかわせるとは、さすがは万の軍勢を一匹で蹴散らしただけの事はある。

「ふははっ！　どれほど威力が強かろうと、よけれ——ぐはっ！」

一旦はかわされた光の槍は、弧を描いて舞い戻り、油断しきったフェンリルの脇腹に直撃した。

「すまん。光神槍破は絶対に当たるんじゃ」

じゃが私の声は肝心のフェンリルに届かず、血反吐を吐き意識を失っている。どうやら見積もりを間違ったようじゃ。10分の1でも強かったか。本当にすまん。

第14話..さすがにこれは自業自得ではないと思う

フェンリルが気を失うと、今まで岩陰に隠れていたダンジェと王女が姿を現した。そして今のうちにと、フェンリルに止めを刺そうとするダンジェを押し止める。

しばらくすると一命を取り留めたフェンリルが目を覚まし、息も絶え絶えに口を開いた。

「こ……こんな貧弱な子供が……まさかあの様な強力な魔法を放つとは……」

「言っておくが、お前も聞いていた通り、あれでも10分の1の威力じゃ。アキヒトには夢にも勝てぬと認識しろ」

「ぐう……」

私の言葉にフェンリルはくぐもった声を漏らすと押し黙った。認めたくは無いが認めざる得ないといったところじゃろうな。

「そこで提案がある。我らは王女を連れて行くが、お前は王女と今でも一緒に暮らしているなり、王女が病で死んでしまったなりと口裏を合わせて欲しいのじゃ」

「……なに？　口裏を合わせろだど？」

「そうじゃ。お前は命が助かり、ついでに言えばこの様な少年に手も足も出ず負けた事も秘密に出来る。言っておくがこれはお前の為を思っただけの提案じゃ。お前を殺す事など簡単じゃが、その少年がどうしてもお前を殺すのはしのびないと言うのでな。そうじゃなアキ

ヒト？」

「あ、うっうん。フェンリルは王様と約束してその通りしているだけだし……」

控えめなアキヒトの言葉に、フェンリルは目を瞑りしばらく考え込んだ。そして再度目を開きアキヒトを見つめて口を開いた。

「分かった……。王女は死んだ事にしよう。王女が生きている事になれば、万一事情を知らぬものが王女を救出しにくるかも知れんかな。そうすれば王女がここに居ない事が露見する事もありえる。しかし我が、この様な子供に情けをかけられるとは……」

フェンリルの口ぶりでは、こやつも事情を察したようじゃな。頭の良い狼じゃ。じゃがこの結末にダンジェが意義を唱えてきた。

「アキヒト殿。それに神様……殿。それでは国王陛下との約束と違います。陛下はフェンリルを倒し王女を救出して欲しいと御依頼したはずです」

「それは分かっているが、本当の目的は、フェンリルとの約束を違える事を周囲に隠し通す事じゃろう。それはかなえられるのじゃ文句は無かろう」

「ですが……」

「ですが何も無かろう。王女は死んだ事にして王国に戻らなければ、もはやばれる心配は無い。たとえば他国で王女を見知った者が王女を見かけようと、それは他人の空似じゃ」

「それはそうですが……」

私の言葉にダンジェはそう言うのと押し黙った。じゃが、そこに今まで無言で控えていたフランティーヌ王女の震える声が聞こえた。

「そなた達……。さっきから何を申しとおるのです？ ……わらわを死んだ事にするとか……。王国に戻らないとか……。いったい何を……」

その声にみな視線が王女に集まる。王女の視線は地面を向いていたが、その目の焦点は定まっていないう様に、瞳に光を感じさせなかった。

「姫様。それは……。陛下もよくよく考えた上での事なのです」

「ですから！ 何をよくよく考えたのか。それを申ししてみよと言ってるのです！」

王女は顔を上げ鋭い視線をダンジェに向けた。返答に困ったダンジェは私にすぎる様な視線を向けてきた。自分の口からは言い難いので、私に説明をして欲しいらしいな。

「甘えるな。お前の国のお前が使える王が決めた事じゃろう。そしてお前はその任に預かったはずじゃ。お前が説明するのじゃ」

私が冷ややかな視線を向けて突き放すと、ダンジェはがっくりとうな垂れた。じゃがしばらくすると諦めた様に、そのまま顔を上げずにぼそぼそと、その「よくよく考えた事」を語り始めた。

「先の戦いで我が軍はフェンリルの活躍により勝利致しました。そ

して戦場にフェンリルがいた事。近隣諸国で知らぬ者はおりません。当然、フェンリルとの契約についてもです。それを違えてしまつては、我が国の信用は失墜します。また……現在我が国はフェンリルと友好関係にあると、諸国から一目置かれてもおります」

ほう……。他国は、フェンリルをカスタニエ王国の戦力と見ているという事か。そこまでは私も気付かなかったな。

「ですがそれだけにフェンリルとの契約を破つたとなれば、国の信用が失墜する事もあいつて四方から攻め込まれかねません。それに一旦は追ひ払った前回我が国に攻め寄せたジェグロフ王国もフェンリルが参戦しないならと、再度攻めてくる可能性もあります」

まあそういう事もあるかも知れんな。そしてダンジェの説明に王女が悲鳴の様な声を上げる。

「だ……だからわらわに国に帰ってくるなと……。そんな馬鹿な話がありますか！ わらわが何をしようのです！ 勝手に魔物にやると約束され。こんな所に連れてこられ。そして今度は帰ってくるなど……」

「姫様……。申し訳御座いません……。ですがそうしなければ王国が滅ぶのです……」

ダンジェはそう言うのと、さらにうな垂れそして押し黙った。じやが王女はそのダンジェに再度問いかける。

「それで……王国に帰れぬわらわはどうすれば良いのです……。どこかでのたれ死ねば良いのですか……」

「そっそれは……。陛下は、姫様の事はアキヒト殿に託されると……」

託すか……。ものは言いようじゃの。今度は我々に姫を差し出したんじやろうが。もつとも我々が王女を引き受けねば、王に殺されかねないのじゃがな。

そして王女もダンジェの欺瞞には騙されなかった。岩肌に持たれかかり、そして力なく崩れ落ち地面に座り込んだ。

「わらわは……。また、貢物にされてしまったのですね……。物の様に……。2度も……」

虚空を見つめ涙すら流さず呆然とする王女にみな視線が集まる。じゃが、みな掛ける言葉もなく、押し黙っている。

不意にフェンリルが立ち上がった。

「我にもう用は無かろう……。いなせてもらうぞ」

フェンリルはそう言うと、アキヒトの光神槍破による傷の痛みにくぐもった声を漏らしながら立ち上がった。そして背を向け、ねぐらである洞窟へと姿を消した。

そう言えばあやつ、どうして王女なんて欲しがったんじゃ？ 今の様子じゃと王女の美貌に心を奪われてとかでもなさそうじゃ。もしかして単なる愛玩動物の積もりかなんかじゃったのかもしれない。そして自分のした事の結果に居たたまれなくなって逃げたか。

まあ魔物の考える事じゃ、本当のところは分からん。単にわずらわしくなっただけなのかもしれん。

さてと、フェンリルが去ったとなると、後はこっちの問題じゃない。
この放心した王女を貰って行かなくてはならん。

私は地面に座る王女の前に屈みこんだ。

「さあいつまでこんな所に座っておるのじゃ？ さっさと立たんか」

パンッ！ 顔の左側でいきなり乾いた音が鳴った。あれ？ と思
っている間に、頭がくらくとし、その場に尻餅を付いた。

目の前を見ると、王女が鋭い目で私を睨んでいる。そしてその右
手は身体の左側に真っ直ぐ伸びていた。

なんじゃ？ と思っている間に左頬がひりひりし、次第に熱くな
っていく。

なに？ なに？ と周囲を見渡すと、アキヒトと目が合い、その
瞬間、アキヒトは慌てて近寄ってきて後ろから私の肩を抱いた。エ
メルダはなぜか王女の後ろに立って、王女の両腕を捕まえている。

「大丈夫、神様！？」

「え？ 大丈夫ってなにがじゃ？」

「なにがって……今、打たれたじゃないか」

打たれた？ 今私は打たれたのか？ 人間に？ 人間が神である
私の顔を打ったというのか？

打たれた衝撃からか、あまりにも予想外の事だったからか、アキヒトの言葉にやっと状況を理解した。

「きさま！ 誰に手を上げたと思っておる！ 私は神様じゃぞ！」

じゃが王女は反省するどころか、エメルダに押さえられながらも私に怒鳴り返してくる。

「何が神様ですか！ 馬鹿馬鹿しい。それとも、そなたが私の次の「飼い主」で、自分を神と思えとでも言うのですか！？ わらわに命令する事など許しません！」

「誰も命令などしてはおらん！ こんな所にいつまでも座っていてもうしょうが無かろうと言うておるのじゃ！」

私と王女は、共に相手に跳びかからんばかりの形相でにらみ合ったが、私はアキヒトに、王女はエメルダに抑えられている。そしてこの状況にダンジェといえば、ずっと押し黙り俯いている。もはや王女に対してどういう態度を取ってよいのか分からないらしい。

「殿下。これは命令じゃないわ。お願いよ。私達もずっとここに居る訳には行かないの。取りあえず向こうに馬車があるからそこまで歩いてちょうだい」

エメルダはそう言うと、王女に言葉がしみこむのをしばらく待った後、王女の両手を掴んでいた手を放した。王女は私から目を逸らしのろのろと立ち上がる。そして俯くダンジェの傍を無言で通り過ぎた。

「アキヒト。もう良い。手を放せ」

私の肩を押さえていたアキヒトにそう言っただけで放させると、私も立ち上がる。

左頬からジンジンと痛みを感じる。まったく無礼な奴じゃ。あの様子ではアキヒトのハーレム要員とするのは止めておいた方がよさそうじゃな。あんな奴と一緒に居るなど、私が耐えられんわ。

先頭をエメルダ、その後ろに王女、私、アキヒトと進み。最後にダンジェがトボトボと着いてくる。みな無言で歩き続け、そしてまもなく繋いであった馬車に到着した。

馬車の元にみなが集まると、今まで押し黙っていたダンジェが目線を地面に向けたまま口を開いた。

「アキヒト殿達は、このまま王国に戻らず旅をするという事でしたので、報酬と当面の食料はすべて馬車に積んでおります。旅にはこの馬車をお使い下さい。私は王国まで歩いて帰ります」

そしてそれだけ言うと、居たたまれないのかそのまま背を向けて歩き去る。王女はそのダンジェの背に、一瞬すぎる様な目を向けた。もしかしたら今までの事はすべて嘘で、本当は王国に戻るのではないか。僅かながらそう希望を持っていたらしい。

しかしそれも夢と消えると、王女はさっさと馬車に乗り込んだ。そしてあらぬ方向を向きながら、私達に言った。

「さあ、わらわをどことなりと連れてお行きなさい」

ふー。やれやれじゃ。って言うか。左頬がまだ痛い。いつか仕返ししてやる。そう思いながら、私も馬車に乗り込んだ。

馬車は、エメルダを御者にゆつくりと走りだした。

第15話：ハーレム大臣の暗躍

> i 3 2 9 1 1 — 3 5 9 7 <

カスタニエ王国王女フランティーヌを加えた私達は、数日馬車を走らせ旅を続けていた。途中立ち寄れそうな町や村もあったが、エメルダがフランティーヌが落ち着くまで、馬車で移動を続けた方が良いと提案したのじゃ。

「もし人通りが多い場所で、取り乱してカスタニエ王国の王女だなんて名乗られても面倒だし」

「しかし、今更じゃが、あんな奴ハーレムの一員に入れられんじやろう。とても我々とずっと一緒に旅を続けられるとは思えんぞ」

王女だったフランティーヌは、当初食事を器によそう事すら自分ではしようとしなかった。そして私と衝突していた。

「王女たるわらわに、自分で食事を用意しろというのですか！」

「神様が自分でよそつとるんじゃ。王女だからって関係あるか！」

万事この調子で、私とフランティーヌとの関係は日に日に悪化していたのじゃ。

「それはしばらくは我慢するしかないわね。とにかく連れてきてしまった以上、放り出す訳にはいかないわ。今まで王女として暮らし

てきて、その王女としての身分を失っては一人じゃ生きていけない。どこかの町に置いてけぼりにしたら、すぐに騙されるか、さらわれるかして売り飛ばされるでしょうね」

「それはそうかもしれんが……」

「まあ。とにかく私に任せてちょうだい。他の男に騙される前に、私が騙して見せるから。世間知らずの小娘を騙すくらい簡単なものよ」

エメルダはそう言ってにやっと笑った。怖い奴じゃな。

「しかしお前、以前は王族に対して結構恐れ入ってなかったか？もう王女じゃなくなったから平気なのか？」

「あんなドタバタを見せられたら、王族に対しての敬意なんてどこに行っちゃったわよ」

「まあそれもそうじゃろうな」

こうして、フランティヌをハーレムの一員に加える事には決定了したが、いっこうにその話は進まないまま旅が続けている状態じゃった。

そしてそのハーレムというか、アキヒトの相手をするのにエメルダは、勝手にローテーションを組みやがったのじゃ。

アキヒトは、私が夜一人で居ると私に迫ってくる。私のところに来る前にエメルダがアキヒトのところに行き、彼女の方から誘うとエメルダを抱く。そして私がエメルダと一緒に居ると大人しくして

いる。まさにサルにも劣るワンパターンな行動を取る。

エメルダはそのサルの習性を利用して、姿を消したり現したりして計画的に、エメルダ、私、休み、という順番を作り上げていた。

そして今夜は私の番だった。いや、私の番と認めている訳ではないが、エメルダが姿を隠してしまい、だからと言ってフランティーヌと一緒に居るのも躊躇われる。エメルダを探しに森をさまよえば余計1人きりになってしまう。

もはや避け切れないと、ほとんど諦めの境地でアキヒトを迎えてしまっていたのじゃ。じゃがそれはそうとして、アキヒトに抗議の声をあげた。

「さすがに毎回新しい事に挑戦しなくても良いのではないか？」

「でも、色々した方がきつと楽しいよ」

くそ。毎日ネットやなんかで新鮮な情報やゲームや音楽を得る事になれている所為か、無駄に好奇心旺盛になりおって。昼間は大人しいくせに、この黒の○太が。

「しかしだな……。さすがにこれは駄目な方向に向かってないか？」

「大丈夫だよ。ネットで見たらみんなやっているみたいだったし」

「そっそうか？」

あ、いかん。設定が発動し押し切られそうじゃ。やはり抵抗は無理か。

「うん。大丈夫だよ。痛いふうにはしないから。でも、痛かったらすぐに言ってね」

「うゝん。……絶対じゃぞ」

結局「最終的には何でも受け入れる」設定が発動し、抵抗を諦めた。いや……「M気質」設定の方か……。と脳裏で微かに思いながら、両手を揃えおずおずとアキヒトの前に差し出した。

朝になり、寝ているアキヒトの横から這い出し小川で顔を洗った私は、設定の呪縛からも開放され、昨夜の自分の所業に自己嫌悪に陥っていた。

駄目じゃ！ さすがに昨夜のはしやれにならん！ 神様なのに順調に堕ちていつている気がする。このまま堕ち続けると、下手をすると神としての力を取り戻した後にも影響しそうじゃ。神様というより魔神とか邪神とかになりかねん。そうになると、私が創造した全宇宙にも無関係ではあるまい。

今までは、神様として人間に良い様にされてはと考えておったが、全宇宙の為にもどうにかなくては。そもそも私がアキヒトの元から去れば解決するのじゃが、それは「アキヒトの彼女」設定がある為不可能じゃ。

やはり、もっとハーレム要員を増やして私の身を守るしかあるまい。よし、全宇宙の平和の為、ハーレム作りに勤しもう。

そうなると取り敢えずはフランティーンじゃな。エメルダは騙す

とか言ってたがいっこうにその気配が無い。ちょっと聞いてみよう。

私がエメルダを探すと、昨夜は私とアキヒトを2人きりにするため身を隠していたくせに、ちゃっかりと馬車の傍にいた。そして朝食の用意をしている。もっともエメルダは料理が下手らしく、ダンジエが馬車に用意していた調理不要で暖めるだけの簡易料理に火を入れるだけなのじゃが。

「エメルダ。フランティーンの事はどうなっておるのじゃ？ 騙すとか言っておったが」

エメルダは火にかけたなべをかき回しながら、こっちを見ずに答える。神様相手に失礼な奴じゃ。

「あんまり大きな声で騙すとか言わないで。本人に聞かれたら大変よ」

「あ。そうかすまん」

そう言いながらさらにエメルダに近づき、並んでなべの前に座った。するとエメルダが小声で話しかけてきた。

「でも、そろそろ頃合かもね」

「頃合？」

「ええ。フランティーンも結構落ち着いてきたし、私達とアキヒトの関係ももう理解しているでしょう」

「私達とアキヒトの関係って？」

「もちろん、毎晩変わりばんこにアキヒトに抱かれている関係」

うっ。実際そうなのじゃが、面と向かって言われると「恥じらい」設定が働いて恥ずかしいな。思わず私の顔が赤くなる。

「じゃあ、朝食の時に仕掛けるから、神様は黙ってみておいて。口を出しちゃ駄目よ」

「仕掛ける？」

「ええ」

エメルダはそう言うのと不敵に笑った。悪い顔じゃな。悪人の顔じゃ。

そして朝食となり、みなでなべを囲う様に座って自分で器によそって食べている。フランチーヌも不貞腐れながらも自分でよそって、そして無言で咀嚼していた。そこにエメルダが口を開いた。

「いつまでもお客様扱いする訳には行かないから、明日からは、フランチーヌが朝食の用意をしてちょうだい」

その声にフランチーヌが目を見開いて驚き顔を上げた。エメルダのいう事もっともじゃが、フランチーヌにしてみれば思いもよらぬ言葉か。ちなみに私も食事の用意はしてないが、それはまあ私は神様だし。

「わらわを誰だと思っておるのです。カスタニエ王国第一王女なのですよ！」

しかしその言葉をエメルダはせせら笑った。

「その人って死んだらしいじゃない。そんな人もうこの世に居ないのよ。あなたは王女じゃなくてただのフランティーヌなの。いい加減現実を見たら？」

「な……。ぶっ無礼でしょう！ わらわに向かって……」

「そのわらわ様が何様なのって言っているのよ。あなたに何が出来るって言うの？ 料理？ 洗濯？ それとも馬車を走らせられる？」

「わらわにそんな事出来るはずが……」

「王侯貴族でもなくて、いい年の娘がそんな事も出来ないって、世間では役立たずって言うのよ？ 分かってるの？」

「でっですが、わらわは今までそんな事、した事が……」

「今までは今まで！ 役立たずなら役立たずらしく、偉そうにしないでちょうだい！」

エメルダの容赦の無い言葉に、遂にフランティーヌは口を開く事すら出来ず、顔色も真っ青となり目に涙を浮かべ始めた。しかしエメルダの追求は終わらない様で、さらに追い込もうと口を開きかける。しかしその時――。

「酷いじゃないかエメルダ！ フランティーヌだって好きでお姫様で無くなった訳じゃないじゃないか！ フランティーヌは全然悪くないんだ！ それをそんなふうに言うなんて！」

アキヒトはそう言うのとフランティーンを庇う様に、エメルダとの間に立ち塞がった。そして今だ座ったままのエメルダを普段の優しい目からは想像出来ない鋭い視線で射抜いた。

「ふんっ。馬鹿馬鹿しい」

エメルダはそう言って立ち上がると、アキヒトから背を向け歩き出し、私に

「神様。行きましょう」

と声を掛けた。

私も立ち上がって慌ててエメルダを追いかける。そして追いついてから振り返ってみると、顔を覆って泣くフランティーンの肩を抱いてなだめるアキヒトの姿が目映った。

「まあこれで多少はフランティーンもアキヒトに好意を持つでしょう。ずっと町にも村にも寄らずに私達しか居ない世界での、唯一の味方なんだから」

2人から十分離れてから、エメルダはそう話しかけてきた。怖い女じゃ。

「しかし、作為的過ぎないか？ さすがに私もちょっと引くぞ」

「まあね。でも、騙すと言ったけど、私はあくまで状況を作っただけ。アキヒトと打ち合わせた訳じゃないわ。あそこでアキヒトが自分の意思でフランティーンを庇わなかったら、どうしようもなかった。でもアキヒトは庇った。それでフランティーンがアキヒトを好きになるのなら、それは嘘じゃないわ」

「そういうもんかの。そういえば、私達とアキヒトの関係を理解させるって言うのはなんじゃったんじゃ？」

するとエメルダは肩をすくめて苦笑した。

「好きになった男が女をとつかえひっかえしていると知ったらどう思う？」

「うーん。幻滅するかの」

「じゃあ、女をとつかえひっかえしている男を好きになったら？」

「分かった上でって事か？」

「そう。知ってたら平気って訳じゃないけど、後から知るより全然マシ。順番は大事よ。神様」

「なるほどの」

私が、ふむふむ、と頷いていると、エメルダが思いだした様に私の肩を叩いた。

「そう言えば、アキヒトには忘れないでフォローしておいてよ」

「フォローって？」

と意味が分からず首を傾げた。

「私がフランティヌに酷い事を言ったのは、フランティヌの気持ちのアキヒトに向ける為だったって、後でアキヒトに言っておい

てって、言っているの」

「そんな事、自分で言えば良いじゃろう」

だが私の言葉にエメルダは大きく溜息を付いた。

「自分で言っちゃ、ただの言い訳と思われるでしょ。神様から言つて貰う必要があるのよ」

「なるほどの」

しかしこの女。人生経験豊富なのか、こういう事に関しては巧みのようにやる。私には人間関係の機微など分からんし、頼もしい限りじゃ。

「よし。お前をハーレム大臣に任じよう。ハーレムの管理は任せた」

「全然嬉しくない役職ね」

せっかく任命してやってのに、エメルダは不満そうじゃ。私に向かつて呆れたような目を向けてきよる。

「しかしお前、ああいう事が得意そうではないか。フランティーヌなど赤子の手を捻るようじゃ」

「あの子にはこうした方が良いの。父親に捨てられてここに居るんだって思うより、アキヒトの事が好きだからここに居るって思う方が、あの子にとってずっと幸せだわ」

そう言ったエメルダは、哀れむ様な、そして悲しむ様な目をして

いた。

第16話：神様の危機とアキヒトの活躍。しかし……。

朝食の用意は結局フランティーンがする事になった。とはいいきなり1人で出来る訳が無い。当然誰かに教えて貰わなくてはならないが、現在エメルダとフランティーンの関係は最悪じゃ。

よってエメルダがアキヒトに教えて、アキヒトがフランティーンに教える事になった。まあエメルダにとってはこれも想定済みで、初めからこうしようと考えていたらしい。

そして馬車は、今日も町や村を避けて進んでいた。フランティーンとの感情がはつきりとアキヒトに向くまで外界と隔離する。エメルダがそう提案したからじゃ。

もっともアキヒトには、近くに村や町は無いと言ってある。フランティーンとの好意をアキヒトに向ける為隔離する、とアキヒトに言っっては上手く行くものも上手く行なくなるから。とこれもエメルダの提案じゃ。

その為馬車は、大きな街道を避け、人通りの少ない道を選んで無駄に遠回りしたり、実は同じところをぐるぐる回ったりしていた。

「しかし、いずれはどこかの町に向かうんじゃろ？ どこか当てるのか？ それに当面必要な金があるので先延ばしにしておったが、五色のドラゴンを倒した報酬の件も宙に浮いたままじゃ」

フランティーンがアキヒトに教えてもらいながら朝食の用意をしている間、邪魔をしてはいけないと、席を外しエメルダと2人きりになるとそう聞いてみた。

「そうね。報酬は元の町を出る時に、ギルド本部で預かっておいて貰う様に連絡したから、受け取りたかったらギルド本部に行く事になるわね。本部は商業都市アナトリーにあるわ。場所はトルステイ王国にあるんだけど、有り余る財力で傭兵を雇って独自の軍隊も持っていて自治を確立しているの」

「ほう。たいそうなもんじゃな。それで金額は？」

「神様。お金の話好きよね」

「何を言っておる。お金は大事じゃろうが」

「はいはい」

エメルダはそう言って肩をすくめた。

「それで金額なんだけど、私もすぐに町を出たから正確な金額は分からないわ。でも、ギルド本部から各国政府にも連絡して、沢山の国からも出資して貰うらしい事は聞いたから、相当な金額になるはずよ」

「それは凄い話じゃな」

「神様が「あのドラゴンを一撃で倒せる男を敵に回す度胸があるか聞いておいてくれ」なんて言うからでしょ。お金を出さないと攻撃されるかもって、怯えている国も有るらしいわよ」

あゝ。そう言えばそんな事も言ったな。忘れておった。じゃが、これでハーレムを建設する金はまだ十分かも知れん。ならば後は肝

心の女達を集める事に集中すべきじゃな。

「それでどこの町に行くかだけど、それは状況によるわね。出来ればフランティーヌが一度でもアキヒトと関係を持つか、せめてはつきりと好意を表すくらいしてくれたら、その時に近くの町に寄ろうかと思ってるの」

「ずいぶん気の長い話になりそうじゃの。アキヒトが自分からフランティーヌにせまるとも思えんし、フランティーヌから誘う事も無かろう」

「そうね。最終的には私からフランティーヌに話して、ハーレムに入るように言うわ。難しいとは思うけど、私達とアキヒトの関係は分かっているはずだし、また入らないと役立たずと言えば大丈夫と思うわ」

「ハーレムに入らないと役立たずって言うのは、さすがに言いすぎではないか？」

さすがの私も思わず渋い顔でエメルダに突っ込んだ。そんな言い方をしたらさすがに反発するじゃろう。

「大丈夫。私達の間係を知ってもアキヒトを好きになっっているなら、心のどこかでその一員になる可能性あると考えているはずよ。後はこっちで、彼女自身への言い訳を作ってあげれば良いだけ」

「言い訳？」

「そう。さすがに自分からハーレムの一員になりたいとは言えない。でも、入らないと役立たずと言われたから仕方なく入る。ならフラ

ンティーンは自分に言い訳が出来るわ」

「ふむ。なるほどな。さすがはハーレム大臣じゃ」

「その呼び方やめてくれない？」

エメルダはそう言って不愉快そうな顔をした。せっかく適任なのに残念じゃ。

その後アキヒトが朝食の用意が出来たと呼びに来たので、その朝食が用意されている馬車の傍に戻った。

みながなべの周りに座ると、フランティーンはアキヒトの朝食をよそってやり、そして自分の分をよそった。そして食べ始める。：おい。そこまで来たら私とエメルダの分もよそえよ。と思ったが、エメルダにはしばらくそっとしておけと言われているので我慢する。

って言うか、フランティーン。お前アキヒトの横に座るのは良いが、近すぎないか？ 本来そこは私のポジションじゃろうが。フランティーンが正式にハーレムに入ったら、ちゃんと序列というものを叩き込んでやる。

勿論、私がハーレムで1番と言う訳ではない。彼女なのだから別格じゃ。拳闘でランキング一位の上にチャンピオンがいる様に、彼女は格が違うのじゃ。

駄目じゃ。最近なるべく意識しないようにしておったが、意識しだすとやっぱり彼女として、アキヒトに他の女が近づくのはムカついてくる。アキヒトに寄り添うフランティーンを見ていられん。

自分の分の食事をかき込む様にして胃に流し込むと、

「ちよつとそこらへんを歩いてくる」

と、みなを残してその場を後にした。

ふゝゝ。まったくアキヒトめ。私の前で他の女といちゃつきおつて。久々に食事にマスタードかビネガーを投入してやろうか。と考へながらさらに道を当ても無く進む。

しかし本当に人通りの無いところじゃな。人の居なさそうなところを選んで進んでいるのじゃから、当たり前と言えば当たり前じゃが。と思っていると意外にも前方から2人の男が歩いて来た。

なんじゃ？　と思っていると向こうもこっちに気付いたらしい。こっちに向かつてにこやかに手を振ってきた。地図ではこの近くに村は無いはずじゃが、地図が間違っているか、もしかして道を間違えておるのか？

まあ良い。とその男達とすれ違おうと進み、男達が私の右真横に来た瞬間。にこやかだった男達は急に私の右腕を掴んだ。はっとしてその顔を見ると、にこやかと言うより、下卑た笑みを浮かべていた。

「馬鹿者！　放すのじゃ！」

必死で男の手から逃れようともがいたが、私の腕を掴んだ男の手はビクともしない。むしろ捕まれたこっちの右腕が痛いくらいじゃった。

「放せと言うところが！」

と左拳を振り上げて男の横っ面を殴った。だがしかし……。

「おいおい。ずいぶん元気なお嬢ちゃんだな」
と男は笑い。まったくものともしない。

「こんなところに、こんなべっぴんなお嬢ちゃんが1人で歩いているとはついてるぜ」

「ああ。まったく。早速頂いて。その後はねぐらに持って帰ろう」

頂く？ 神様である私を、この様な者達が？ 馬鹿な！

「お前達！ 自分が何をしようとしておるか分かっておるのか！」

空いている左拳を必死で振り続けたが、もう1人の男に左腕も捕まれた。

「何って。何にきまつてるじゃねえか」

男達はゲヘゲへと下品な笑いを漏らす。

嫌だ！ こんなのは嫌だ！ 両腕を左右の男達に捕まれたまま身体をよじったが、男達はその私の様子をむしろ楽しげに笑いながらはやし立てた。

「いいぞお嬢ちゃん。もっと腰を振んな。乳も揺れてるぜ！」

くやしい！ 私の必死の抵抗すら男達にとっては見世物でしかない。神の力さえ使えば、この様な者達、何ほどの事もないというのに！

私は神様じゃぞ！ それがこんなところでこんな奴らに……。こんな事、あってはならんじゃろ！

助けて……。

「アキヒト……!!」

思わずアキヒトの名を叫ぶと、初めて男達は慌て始めた。

「ちっ！ こんな所に女が1人でいると思ったら、やっぱり連れが居るのか」

「仕方あんめえ。ここで頂くのは諦めて、早くねぐらに連れ込んで、そこで頂こう」

そして私を左右から引っ張り、ずるずると引きずり始めた。必死で足を踏ん張ったが、男達の歩みをいかほども遅れさす事が出来ない。

私神様なのに！ 神様がこんな。こんな奴らに！

「早く！ アキヒト！ アキヒト……!!」

その間もアキヒトの名前を呼び続けた。じゃがどんどん引きずられて行く。駄目じゃ……。まさかこんな事になるとは……。だがそこに後ろから――

「神様をどうする積もりだ！」
とアキヒトの怒鳴り声がする。

「アキヒト！」

助かった……。こやつらなどアキヒトの敵ではない。じゃが男達

は私の連れがひ弱そうな少年なのに気付くと、慌てて逃げ出そうと
していた足を止め向き直った。

「なんだよ。びびらせやがって。子供じゃねえか」

「ああ、逃げる事無かったぜ」

とせせら笑っている。

「いいからその手を放せ！」

アキヒトは男達に再度怒鳴ったが、男達は顔を見合わせてさらに
せせら笑う。

「こんなガキが俺達に向かって、手を放せだってよ」

「ほっておいて、俺達が頂くの見せ付けてやろうぜ」

そして1人の男の手が私の服の襟の辺りに伸びた。そして力いっ
ぱい引っ張られる。服はビリビリと破れ、私の胸はあらわになった。

「いや!!」

とたん「恥じらい」設定が発動し、羞恥に包まれたが、両腕を押
さえられている為隠す事すら出来ない。あまりの出来事に、私の目
に涙が滲む。

「きさまら!!」

温厚なアキヒトの髪が怒りに逆立った。

「神から授かりし、聖なる光の槍!　くらえ!!　光神槍破!!」
アキヒトの手から、全力も全力な2筋の光の槍が放たれた。

その直撃を食らった男達は一瞬で肉隗となり、左右から私に血の雨を浴びせた。うわっ！ 気持ちわる！

そして開放された手で胸を隠した。しかし、私の腕はまだ男達の手に乗まっていた。飛び散った男達の身体の手だけがまだ残っていたのじゃ。胸を隠したまま手をゆすると男達の手がボトボトと地面に落ちる。

ふっふ。助かった。

「ありがとう！ アキヒト！」

そう言って片手で胸を隠し空いた血まみれの手を振り、血まみれの笑顔をアキヒトに向けた。

「うっ！ うわあああ~~~~~！！！」

辺り一面にアキヒトの絶叫が響く。

せっかく神様が礼を言っているのに失礼な奴じゃ。

第17話：アキヒトのトラウマ？　　コ○助拒絶症

その後エメルダもやってきて状況を説明した。そしてエメルダはアキヒトを落ち着かせる為馬車の座席に横たわらせ、私達は馬車の外で待っていた。

その後血を綺麗に洗い流し服も着替えた。近くに川が無かったので貴重な飲み水を使ってじゃ。

「水が勿体無くは無いか？」

「何を言ってるの。いつまでもあんたが血まみれじゃアキヒトが落ち着かないでしょ」

こうして綺麗になりエメルダと話合っていた。そして話には加わらないがフランティーヌも傍に居る。

「アキヒトって人と戦った経験無かったのね……。あんなに強い魔物をあっさり倒せるのに……」

エメルダは意外そうに呟いた。そう言えばこの世界では兵役とかあって、アキヒト程度の年齢の男でも、結構戦に出たりしてるんじゃないかな。

「アキヒトはどんな様子じゃった？」

血まみれだった私は、アキヒトを馬車に乗せる時傍に居なかった為、エメルダに様子を聞いてみた。

「震えていたわ……。よっぽどショックだったみたい」

うーん。軟弱な奴め。じゃが、まあ戦などない平和な国からやって来たのじゃ。ショックを受けるのも仕方が無いのかもしれない。

「よし！ 私が言い聞かせて立ち直らせてやろうではないか！」

「本当！？ じゃあ頼むわね。やっぱりこういう事は彼女の役目だから」

「おう。任せるのじゃ！」

私はドンッ！ と胸を叩いた。まああの程度の事たいした事ないと分からせれば良いんじゃないろう。簡単な事よ。

私の後にエメルダとフランティーヌが続き、馬車へと向かう。

「アキヒト良いか？ 開けるぞ？」

と声を掛けて、馬車の扉を開ける。

中を覗きこむと、アキヒトは毛布に包まり、まだガタガタと震えていた。まったくしょうがないの。

「よいかアキヒト。お前こっちの世界に来てすぐに五色のドラゴンとかいう奴を殺したじゃろうが。それに今までも虫やらなんやら殺しておろう。今更、人の1人や2人殺したところで――」

バチンッ！ とエメルダに後頭部を思いっきり叩かれた私は、さらに後ろから襟首を捕まれ、後ろに強く引っ張られた。

私と入れ替わる様にエメルダが前に出る。

「アキヒト。ごめんなさい。今のは忘れて！」

そして馬車の扉を閉じる。

エメルダは私の襟首を再度掴み、引きずる様にして私を馬車から遠ざける。背後からアキヒトの

「うわあああ~~~~~!!」

という絶叫が聞こえてきた。

エメルダは私を引きずり続け馬車から離れたところに立っている大木の幹に私を押し付けた。そして鬼の形相で今度は両手で私の襟を掴む。

「あんた何を考えているの！ あれじゃ逆効果じゃない！」

あ、なんかむちゃくちゃ怖い。頭を強く叩かれた事もある、叩かれた所を手で押さえながら涙目で答えた。

「じゃっじゃが、神様的には生きとし生けるもの、すべての命は平等でな……」

しかしエメルダは私の言葉に感銘を受けず、襟をさらに強く締め上げてくる。

「今はそんな話どうでもいいのよ！」

そして私の襟を投げ捨てる様に放すと木の幹に左手を付いて身体を支え、空いている右手で額を押さえた。

「もう。どうするのよ……」

あの人間の機微に敏感そうなエメルダが、手も無く頭を抱えている。そんなに不味い事をしたのかの？

そこに突然背後から

「あの……」

と控えめな声が聞こえ、私とエメルダは振り返った。見ると、フランティーヌは両手で白いドレスの裾を強く握り締め、そして顔を赤くして俯いている。

「わらわが……。アキヒトが慰めを……。わらわ……。その……。わらわだったら……。アキヒトに……。だから……。別に……。わらわ……。だったら」

何を言っ取るのじゃこいつは？　じゃがエメルダにはフランティーヌの宇宙人語が理解できたらしく、フランティーヌを抱きしめた。お前ら前回の事でかなり陰悪なんじゃなかったのか？　いきなり、何を分かり合っている感を出しておるのじゃ。

「お願いするわ」

とエメルダは言い、その言葉にフランティーヌも

「はい」

と頷いた。そしてフランティーヌが馬車へと向かう。

あ。また行くのか？　とその後が続こうとすると、エメルダに肩を捕まれた。

「2人つきりにさせて上げなさい」

「え？」

あ、ああ。そういう事か。やっと理解した。まあこれでアキヒトが元に戻って、しかもフランティーンがハーレムに入るなら一石二鳥と言うものじゃな。私がそう樂觀していると、エメルダが私の耳元で囁いた。

「あなた。油断していると危ないわよ」

「危ないって何がじゃ？」

「アキヒトをフランティーンに盗られるって事よ」

ふっ。何を言うておるのか。私はアキヒトの「理想の彼女」を体現しておるのじゃぞ。それなのにアキヒトが他の女に心を奪われるわけ無かろうが。

私がそう高をくくっていると、エメルダは私の表情から私の心を察したらしく言葉を続けた。

「良い事を教えてあげる。男性の女の好みなんて、簡単に変わるものよ」

「なに？ そうなのか？ しっ、しかし理想なんじゃぞ？ 理想。それをそんな簡単に……」

慌ててエメルダに問いかけた。愛されないコ○助に存在価値は無いじやろう。それこそただの無駄飯食いになってしまう。

「あばたもえくぼって言うでしょ？ 好きになったらその相手が理

想になるのよ」

「しかし、理想の相手じゃなければそもそも好きにならんじやろう」
するとエメルダは腰に手を当て、まったく。と言う風に大きく
溜息を付いた。

「みんな、そう簡単に理想の相手なんかに出会えないわ。そして理想じゃない相手を好きになるの。だいたい今フランティーヌはアキヒトに好意を持っているけど、アキヒトがフランティーヌの理想の男と思う？」

いや、の○太を好きになる奴など、し○かちゃんかジ○イ子ぐらいなもんじやろう。うゝむ。まさか理想の彼女である私の地位が脅かされる事になるとは、まったくの予想外じゃ。

「とにかく、今はフランティーヌに任せるしかないからそつとしておいて。でも、落ち着いたら神様も頑張らないとね」

「頑張るって何をじゃ？」

「だから、アキヒトを盗られないようによ。じゃあ、私はこの後の事をちよつと考えるから、一人にしてちょうだい」

エメルダはそういうと私から背を向け、ヒラヒラと手を振った。

それを見送ると木陰に寝転がった。まったくだから盗られない為には、何をどう頑張れというのか聞いておるのじゃ。私にそんな事分かるわけないじゃろ。

なにエメルダは私の力を見くびっておるのじゃ。理想の相手じゃなくても好きになるとか言っておったが、それは理想の相手に出会わなかった為の妥協じゃろう。

私はアキヒトの脳内から理想を読み取って再現しておるのじゃ。ものが違う。大丈夫じゃ。そう考えて安心し、しばらくすると意識がフェードアウトし寢息を立てた。

眩しさに目を覚ますと、木陰だったはずの場所に日が照っていた。時間が経ち太陽の位置が変わった為らしい。まだ日が沈むには早い、それでも結構な時間が経っているようじゃ。

どうなったのじゃ？ と馬車の元に近寄ると、ちょうどフランテイーヌが馬車から降りてきた。すると向こうも私に気付いたようじゃ。顔を赤くすると、慌てて襟元を手で隠した。

なんじゃ？ と思ってよく見ると、襟元のボタンが締め切られておらず、ちよつと肌蹴ているみたいじゃった。表に人が居ない思つて油断しておったというところか。

しかし、襟がはだけているという事は……。ちっ！ 落ち込んだとか言いながらやる事はやっておるのではないか。じゃが今フランテイーヌに腹を立てても仕方あるまい。アキヒトもそつとしておくべきじゃ。憂さ晴らしは後からじっくりさせて貰おう。

「アキヒトの様子はどうじゃ？」

「はい。少し落ち着いていると思います」

フランティーヌはそう言いながら襟にやった手をもぞもぞと動かしている。どうやらばれなのに気付かず、片手でこっそりと襟を止め様としているようじゃ。まあいっこうに襟は止まらず無駄な努力みたいじゃが。

仕方が無いので気付かない振りをしてやり、さらに声を掛けた。

「それで、どうしたのじゃ？」

「アキヒトが喉が渴いたというので、お水を汲みに……」

「ああ、なるほどな」

そしてそこで会話は途切れなんとなく見詰め合ったが、しばらくするとフランティーヌが

「では、水を持っていかないといけないので……」

と私から背を向け、私も馬車の元から立ち去った。

夕食になってもアキヒトは馬車から降りてこず、フランティーヌがアキヒトの分をよそって馬車の中に持って行った。

その時エメルダからアキヒトの様子を聞かれたフランティーヌは、私にも言った様に

「落ち着いてきています」
と返答した。

そして夜になると、馬車の外で毛布で包まり1人で横になる。エメルダは相変わらず考え事を続け散るらしく、少し離れたところに横になった。

最近ずっと、エメルダがアキヒトの元へ行ったとき以外は1人で寝る事がなかった為、今日はエメルダではなくフランティーヌがアキヒトの元に居る事に違和感を感じながらも眠りに付いた。

朝、目が覚めるとすでにエメルダが朝食の用意を始めていた。本来ならアキヒトに教わりながらフランティーヌが用意するはずだが、さすがに今日はそうは行かなかったようじゃ。

そして準備が出来る、アキヒトも馬車から降りてきた。なんじや大げさに落ち込んでおったと思ったら、たった1日で回復しとるじゃないか。

じゃがそのアキヒトの横にはフランティーヌが寄り添っている。そしてアキヒトに向かって微笑む。不意に私の脳裏に昨日のエメルダの、男性の女性の理想など簡単に変わるもの、という言葉が過ぎった。

ふっ。まあそんな事はあるまい。じゃがまあたまにはアキヒトに少しくらいサービスしてやるのも良いじゃろう。

「アキヒト。気持ち良い朝じゃな。もう大丈夫なのか？」
ととびっきりの笑顔で声を掛けた。そしてアキヒトは、
「うっ！ うわあああ~~~~~！！！」
と絶叫した。

あれ？

第18話：神様は要らない子？

「あなたの顔を見ると、あの時の光景が頭の中に浮かんでしまうそうですね」

再度馬車に籠ったアキヒトの様子を見に行っていたフランティーヌが帰ってきてそう言った。どうやら、私の事を「神様」と呼ぶのは嫌らしいな。

それにしても、私の顔を見るとじゃと？ 私は何をしたというんじゃない？ 確かに私を助ける為にあの男共をやったんじゃないが、それにしても酷いじゃろう。

私が不満げに腕を組むと、例によって心の機微に敏感なエメルダが、私の様子から私の心情を読み取ったのか解説を始めた。

「あの時神様、男達からの返り血で血まみれだったから、それでだと思っわ。まあ血まみれで笑いかけては、インパクト強かったんでしょね……」

なんじゃと？ まったく失礼な。せっかく感謝の気持ちを全力で表した笑顔じゃったのに。

「しかし、そんなものすぐに治るんじゃない？」

じゃが、エメルダとフランティーヌは顔を見合わせるだけで、口を噤んだ。

「え？ ……治らんのか？ それはさすがに困るぞ」

「いえ、そうは言わないけど……。すぐに治るかどうかは正直分からないわ。かなり繊細な問題だから」

すぐには治らんか……。トラウマという奴じゃな。じゃがまあいずれ治るのなら問題あるまい。問題は移動をどうするかじゃな。

「私とアキヒトが同じ馬車に乗るのも不味いのかの？」

「ええ、多分。でもとりあえず後2、3日はここで様子を見ましよう。その後は、神様、馬車の中じゃなくて、御者台の私の隣に座って貰う事になると思うわ」

うーん。そうなると馬車の中でアキヒトとフランティーンが2人きりになる訳か。とはいえ、さすがにあのサルも、密室で2人きりになるとはいえ馬車の中ではフランティーンを襲うまいな。

じゃが、しばらく過ごしていると、かなりムカつく状況なのに気付いた。

何がムカつくかというと、アキヒトが馬車の外に出るといって、アキヒトの目に映らないようにと、どこかに行っておくとエメルダに言われるのじゃ。どうして私がこそとしなければならんのだや。

結局3日たってもアキヒトの症状は完全されず、馬車の御者台のエメルダの横に座る事となった。

「不機嫌そうね？」

ぶつちよう面で座っているとエメルダが声を掛けてきた。

「当たり前じゃ、人を病原菌みたいに隔離しおって。これはいつまで続くんじゃない？」

「しょうがないでしょ。もうちょっと我慢してちょうだい。繊細な問題だから、試しにアキヒトに神様の顔を見せてみるって訳にも行かないのよ」

「じゃあ、どうやって治ったと判断するとうんじゃ。ずっと隔離されたままか？」

「だから難しいのよ。どうやって治ったと判断したらいいのか……。それでも今すぐは駄目なのは間違いないと思うし……。悪いけど、しばらくは我慢してちょうだい」

「ふー。まったく！」

私は両手で頬杖を付いてさらに不機嫌な顔をした。

元々アキヒトとフランティーヌがくつつくの待つ為に村や町に近寄らなかつた私達なので、アキヒトとフランティーヌがくつついた今、村なり町なりに向かつてもういはずじゃったが、事情が変わった。

今度は、アキヒトが落ち着くまでと、村や町を回避し人通りを避け馬車を走らせていたのじゃった。

そしてかなり大きな川を見つけその川辺で馬車を止めた。

「ちょうど良かったわ。飲み水も残り少なくなってきたし」

エメルダはそう言いながら馬車から降りて私に顔を向けた。

「神様は薪になる木の枝を拾って来てちょうだい」

生水をそのまま飲む訳にも行かないので一旦水を沸かす。その為の薪じゃが、神様をこき使うとは、とんでもない女じゃな。そのうちバチが当たるぞ。とは思ったものの逆らうと怖いので、素直に森の中に分け入った。

エメルダも一応は私には仕事をあまり振らないのじゃが、それだけに振って来る時は手が足りないときじゃ。止む得まい。

森に入ると背後から、フランティーヌへ向けたエメルダの声が聞こえた。

「私は神様が持ってきた枝で火をつけてお湯を沸かすから、その番をされていて。火が消えない様に時々薪を足せば良いだけだから出来るでしょ？ それとアキヒトの様子も見ておいてね」

ちっ！ フランティーヌはすっかりアキヒト係か。

ぶちぶちと愚痴をもらしながら枝を拾い集め、抱えられるだけ抱えると馬車のところまで戻った。

「ありがとう神様。じゃあアキヒトを外に出すから、神様はどこかに行って置いて」

ズキッ！ と胸が痛くなった。どこかに行っておけじゃと？

じゃがエメルダは私の事など眼中が無いように、なべに汲んできた水を居れ沸かし始め、フランティーヌはアキヒトの様子を見に行く為か馬車の中に入った。

私はみなから背を向け、川へと向かった。そして頭にのぼった血を冷まそうと、服を脱いで川に浸かる。

水に浸かるとひんやりと気持ち良く、いらいらも治まってきたが、不意にあるものが目に入った。他でもない私自身の顔が水面に映ったのじゃ。

私はその顔をマジマジと見つめた。そして手を目の前にかざし指の一本一本を見た。そして身体を見下ろして、身体の隅々まで見る。

そして私は一気にしゃがんで、頭まで水に浸かった。

夜。さすがにフランティーヌも毎夜ずっとアキヒトと一緒に寝ている訳ではなく、今日は馬車の外で毛布に包まって寝ている。女が外に寝て、男のアキヒトが馬車の中で寝るのもどうかという気がするが、まあ今は場合が場合じゃ。

みなが寝静まると、私は自分の毛布から起き出し馬車に近寄った。そして音を立てない様にゆっくりと扉を開け、アキヒトの身体をゆすった。

そしてアキヒトが目を覚ましそうになると、アキヒトの目を手で塞ぐ。

「どうしたの？ え？ 誰？」

目を塞がれたアキヒトは戸惑った声を上げた。

「私じゃ。私の顔は見ないで良いから、ちょっと来い」

「神様？ どうしたのまだ夜だね？」

「夜なのは分かっておる。黙ってついて来い」

私はそう言って馬車から降りてスタスタと歩き始めた。アキヒトの性格からすれば、返事を待たずとも追いかけてくるのは分かっている。

月明かりの中進み続け、あの川辺へとたどり着く。私の後ろにはアキヒトが居るが、この位置ならば、私は月明かりの逆光になっているはずだった。

逆光ならば向き合っても陰になるから、アキヒトは私の顔が見えないはず。と振り返る。

「どうじゃ、私が見えるか？」

「え？ う、うん。顔は良く見えないけど……」

「そうか」

そして私は服を脱ぎ始める。アキヒトは、
「え？」

と声を上げたがそれでも脱ぎ続ける。「恥じらい」設定が発動す

るが、それでも我慢してすべてを脱ぎ捨て全裸となる。月明かりの中、アキヒトにすべてを見せる様に両手を広げる。

「……どうしたの？ 神様……」

アキヒトの言葉を見無視して、手をかざして見せた。

「どうじゃこの手は？ 綺麗じゃろ？」

そして足を少し差し出す。

「足はどうじゃ？」

じゃが戸惑って状況がつかめないアキヒトから返答は無い。しかし私はさらに見せ付ける様に、クルリと一回転した。

「これが、お前の理想どおりの女の子の身体なんじゃろ？ 見れて嬉しくないか？ 私がどうしてこんな身体になっているとおもってるんじゃ？ お前が望んだからじゃろが？ それを……。それを姿も見たくないなんて、ひどいじゃろうが！」

アキヒトのトラウマの事などお構いなしに、アキヒトの傍に歩み寄った。そうは言っても逆光なので顔はちゃんと見えていないはずなのじゃが。

「姿だけじゃ無いんじゃぞ？ お前、理想の彼女に神様の能力がある様に望んだか？ 普通の女の子と望んだじゃろ？ 今の私はなんの能力も無い普通の女の子なんじゃぞ？ どうしてくれる積りじゃ？」

「え？　そ……うなの？」

今までその事に思い至らなかったアキヒトは、私の言葉に呆然とし立ち尽くす。私はそのアキヒトにさらに詰め寄る。

「今更何を言っておる。神の能力があったらあんな男共にいい様にされてはおらん。それよりもじゃ。どうしてくれるんじゃないこの状況を？　お前の望みでこんな姿になって力も失ったんじゃないぞ？」

気付くと頬を冷たい物が流れている。いや、泣く積もりなどはなかったのじゃが……。じゃが頬を伝う雫は止まる事を知らず私の胸へと落ち、さらに身体を伝って行く。

「ごめん。神様……」

アキヒトはそういうと私を胸に抱きしめる。そしてしばらくすると私の背に回されていたアキヒトの手は離れ、その代わり両手で私の頬を優しく包み込んだ。そのまま私の身体を中心にしてアキヒトは回り、身体的位置を入れ替えていく。

逆光だった月明かりが次第に私の横顔を照らし、そして遂には正面から私の顔をはっきりとうつす。私の顔を正面から、しかも間近から見てもアキヒトは絶叫せず、それどころか優しげに微笑んだ。

「見えるよ。神様の顔」

そしてその顔が近づいて来た。私は目を瞑り微動だにせず受け入れる。そういえば、今微動だにせず受け入れているのは、どの「設定」が発動している所為なんじゃろう？

朝になり2人で馬車の元へと戻ると、すでにエメルダやフランティーヌが起きていて朝食の用意を始めていた。

フランティーヌから微かに鋭い視線を投げつけられ、エメルダからはにやついた目を向けられた。

気恥ずかしくなったので、アキヒトとは離れて何気なくぶらぶらと別の方向に歩く。そしてエメルダの傍を通り過ぎると背後から声が掛かった。

「良かったじゃない。上手く行って安心したわ」

その言葉にギクリとした。まさか、私をけしかける為にワザと「どこかに行って置いて」と、冷たい事を言ったのか？

思わず振り返るとエメルダが人の悪い笑みを、例の悪人の顔で笑っていた。神を意のままに操るとは、とんでもない女じゃな。

第19話：子供なのか。大人なのか。

今まで村や町を避けていた私達じゃったが、フランティーンの事に続いてアキヒトの問題も解決したので、やっと近くの町に入る事ができた。

計画ではそこかしこで有名な魔物を退治してアキヒトの名前を売り、寄って来る女をハーレムに入れる予定じゃ。

五色のドラゴンを倒しているので、名を売るならそれを公表すれば簡単なはずじゃが、それにはエメルダが反対した。

「五色のドラゴンを倒したとなるともう世界の救世主よ。注目を集め過ぎて逆にハーレムを持つなんて出来なくなるわ。アキヒトが図太い性格なら大丈夫でしょうけど、そうじゃないし」と言うのがその理由じゃった。

この町でも名を売れそうな魔物が居ないかギルドに問い合わせる事になっておるが、みな馬車での長旅で疲れておる。その疲れを癒す為、今日、明日くらいは宿でゆっくりと休む事にした。

部屋は2つ取り、取りあえずその1部屋に全員が集まった。

「ベッドで寝るのも久しぶりじゃの」とベッドに飛び込む。

こうして改めてベッドに横たわると、もう馬車の荷台で寝るのも地面で毛布に包まって寝るのもうんざりじゃ。とはいえ、馬車で移動しない訳にもいくまい。

「フランティーヌの父親の国王からたんまり金はせしめておろう。もっとマシな馬車に買い換えんか？」

じゃが私とその言葉を発した瞬間、部屋の空気が凍りついた気がした。気付くとエメルダは私を怖い目で睨み、フランティーヌは暗い顔で俯いていた。

「神様。無神経過ぎよ」

とエメルダに怒られた。

「あ、すまん。悪気があった訳ではないのじゃ」

と私も素直に謝る。そうか。フランティーヌの前ではあの国王の話はしない方が良いのじゃな。

「いえ……。御気になさらない様に。わらわももう父の事は忘れる事とします」

顔を上げたフランティーヌは気丈にそう言ったが、やはり顔色は微かに青い。無理をしている感じじゃな。もはや済んだ事と思っただんじゃが、まだ引きずっておったか。

やはり私には人間の心の機微というものはよく分からんの。

うむ。理屈で判断できる事なら分かるんじゃが……。やられたらやり返したいと思うだろうとか、こうしないと都合が悪いだろうから、こうしようとするに違いないとか。

「それで、どんな馬車が良いの？」

話題を変えようとしたのか、女3人に囲まれ居心地悪そうにしていたアキヒトがぎこちなく口を開いた。まあの○太なりにフランティヌに気を使ったのか。

そう言えばフランティヌはポジシヨンのなんになるんじゃない？　もしかして、し○かちゃんか？　あ、そう考えるとムカついてくるな。神様の私がコ○助のポジシヨンになりかけて居るのに。

何気にそう考えていると、この中で一番生活力のあるエメルダが、腕を組んで口を開いた。

「理想を言えば、もっと大きくて大勢乗れて、荷物も乗せられるのが良いんだけど、そうになると馬車を引く馬の数も多くなるわ。言っておくけど、私そんなに馬の数が多い馬車は御せないわよ？」

「じゃあ、精々今よりもちょっと大きな馬車しか駄目って事かの？」

「そういう事になるわね。専用の御者を雇えば別だけど……。そうになると男性って事になるし、それは避けたいわ。女ばかり集めるところに男が居ると面倒になると思うの。勿論アキヒトは別としてね」

エメルダはそう言う「男が居ると面倒」という言葉に居心地悪そうにしたアキヒトに向かって片目を瞑って見せた。まあハーレムなんじゃから、アキヒトが居なくては元も子もないんじゃないし、アキヒトももっとシャンとすればよいものを。

「しかし、じゃあどうするんじゃない？」

「そうね……。一旦私が御せる程度のに買い換えて……。それで必要になったらまた馬車を1台買って数を増やそうと思うの」

「ほう、数をの……」

「ええ。今回、神様が男達……多分あの辺りに住み着いていた盗賊だったんでしょけど。ああいう男達からみんなを守る為に護衛も欲しいし。勿論女性で。そうなる馬車は1台じゃ足りないわ」

「え？ 女の人達は僕が守るよ。僕だって、それくらいはしないと……」

「ありがとう。でも、アキヒトだって、いつもみんなと一緒に居る訳じゃないでしょ？ 誰か1人と2人つきりになる事も多いし……。ね？」

とエメルダは、アキヒトに向かってまた片目を瞑る。アキヒトは赤面するが、ついでに私とフランティーヌも赤面した。

「しかし女戦士となると……。やっぱりハーレムに入れるのか？」

「ええ、出来ればそうしたいわね」

「うーん。護衛を引き受けてくれてハーレムにまで入ってくれる女戦士など、そんな都合の良い者が簡単に見つかるかの？」

「それは、ちょっと心当たりがあるの。任せてちょうだい」

心当たりか。エメルダの事だから、強い者フェチ仲間の女戦士の知り合いでも居るんじゃないか？

「あの……」

「なんじゃフランティーヌ？」

「やはり……。人数を増やすとおっしゃるのですか？」

しかし、フランティーヌは人数を増やすのには反対のようじゃな。まあアキヒトを好きでハーレムに入っているフランティーヌにしてみれば、他の女などこれ以上増えて欲しくないのは当たり前か。

もっとも私としても、アキヒトが他の女に手を出すのを喜んでいく訳ではないが、ハーレムを作ると決めた以上、それは言っても仕方がない。それにこのまま堕ちていくと神様の不味いので、アキヒトが他の女に行つて貰わないとそれはそれで困る。

だったら、エメルダなりフランティーヌになりに頑張つて貰つて私の出番を減らす事も考えたが、エメルダの「男性の女の好みなんて簡単に変わる」という言葉が気にかかった。

アキヒトの気が他の女に行つてしまつては、「アキヒトの彼女」となっている私の存在意義にかかわってしまう。ならば人数を増やし、アキヒトには女達と浅く広く付き合つて貰えば良いのじゃ。

「無論じゃ。100人を目指す！」

じゃが、猛々しく宣言した私に、みなぎ避難の声を上げる。

「それは……さすがにアキヒトが死ぬんじゃないかしら」

「いっくらなんでも、ふしだら過ぎます！」

「神様は僕をなんだと思ってるんだよ……」

ちっ！ まさかアキヒトまで反対するとは、の○太の癖に。だいたいお前はサルのように私に迫ってくるじゃろうが。なんだと思ってるって聞かれたら、サルと思つとるに決まつとるじゃろ。それをさも常識人の様な態度をとりおつてずうずうしい。

しかしまあみんなに反対されては止む得ん。それに一気に100人に増やせる訳も無いから、徐々に増やして行つて、最終的に崩しに100人してくれるわ！

「まあとにかく、馬車を買ひ換えるのは決まりね。明日町でよさそうな物を探しましょう。後、それにみんなの服も。フランティーン、いつまでも白のドレスじゃ、旅に不都合でしょう」

「そうですね……。フェンリルが住んでいた洞窟には当然着替えも有ったのですが、着の身着のまま出てきてしまいましたし。ですが服を採寸するとなると、かなりの日数が――」

「そんな暇ある訳ないでしょ。出来合ひを買つてちょうだい」

「出来合ひ……」

「文句でもあるの？」

エメルダに睨まれると、フランティーンは慌てて首を振る。一国の王女もさすがにエメルダには頭が上がりゃんようじゃな。なにせ今まで怖い者など居らんかった神様である私を、びびらせるほどの者じゃからな。

その後夜になると我々は食事をしに外に出た。そしていつもアキヒトと行っていた様なこじんまりした店の前にさしかかる。

「ここで良いのではないか？」

じゃが、エメルダは気に食わないように首を振った。

「ずっと馬車で旅をしてろくな物を食べてなかったんだから、せっかくだし、もっと豪勢に行きましようよ」

なるほど、こっちの世界に来てから食べたのは、アキヒトと行った店と、エメルダ曰くろくでない物だけなのでな。金はたんまりあるんじゃ、それも良いかもしれんな。

「よし！ それではその豪勢な食事とやらに行こうではないか」

こうして意気込んで、その豪勢という料理が出る店に来たものの、並べられた料理の半分ほどは私の口に合わなかった。

分厚い肉を焼いたものや鳥の丸焼き。さらに魚や珍しいきのこなどの料理を目の前に私は不満をぶつけた。

「なんじゃ？ すっぱすぎたり、苦すぎたりでほとんど食えんじやないか」

「なに言っているのよ。美味しいじゃない。ねえ？ アキヒト」

「うん。僕も美味しいと思うよ」

「はい。わらわも美味しいと思います」

ちっ！ みんな私とは反対意見か。

「お前ら味覚がおかしいのではないのか？」

「3対1の状況で、どうしてもそこまで自信満々に言いきれるのよ」

エメルダは呆れた様に言うが、いやいや、こんな物を美味しいと言う方がおかしいじやろう。

じゃが、その後に出てきたデザートとやらは気に入った。ふむ。こういう甘い物の方が食べやすくて良いではないか。

甘いふわふわした物を口に入れ、にこにこ食べていると、その様子を見てアキヒトが微笑みながら口を開いた。

「神様って、子供舌だよね」

「子供舌？ なんじゃ、その意味は良く分からんが、馬鹿にされている事だけは良く分かるぞ」

私の言葉にアキヒトは慌てて弁解を始めた。

「べっ別に、馬鹿にしている訳じゃないよ！ ただ子供って、すっぱいのや苦いのが苦手で、甘い物好きだから、神様も同じだねってだけだよ」

「十分馬鹿にされている気がするんじゃないが」

「そんな事無いって！」

私の言葉にアキヒトは強く否定する。そこにエメルダが会話に参加してきた。

「でも、確かに神様の味覚って子供みたいよね」

ちっ！ エメルダまで！

「何度も子供、子供と言うでない！ 私を何歳と思っとるんじゃ？」

「何歳なのよ？」

と私とエメルダが話していると、その隙に、フランティーンがアキヒトに何やら耳打ちをしておる。

「どうしたのじゃ？ 何をこそこそ話しておる」

すると、耳打ちする為にアキヒトの耳に顔を近づけていたフランティーンが慌てて離れた。

「いえ……。そのあなたって本当に神様……。なのかと伺っていたのです」

「心配するな。正真正銘神様じゃ」

しかしフランティーンは納得していない様子で口を噤んでおる。神様のいう事を信用しないとは失礼な奴じゃな。

「私が神様で、何が不満なんじゃ？」

「それはちよつと、ここでは……」

「なにがここではじゃ。はっきりせん奴じゃな。いいから申せ」

「神様なのに、アキヒトとあの様な事をして良いのかと……」

「あの様な事？ 良く分からんな。はっきり申せ」

「ですから……。あの様な……事です」

フランティーヌはなにやら顔を赤くしとるが、どうも要領の得ん奴じゃな。また宇宙人語か？ じゃが例によってエメルダにはフランティーヌの宇宙人語が通じるらしい。エメルダが代弁して口を開いた。

「ああ、神様なのにアキヒトに抱かれたりして良いのかって事？」

あからさまなエメルダの言葉に、フランティーヌは顔を赤くして俯き、私も赤面する。

「お前には、恥じらいと言うものが無いのか？ こんな所で何を言つとるんじゃ」

じゃが、エメルダはデザートを口にしたフォークを咥えたまま平然としている。

「だって、神様が聞いたんじゃない」

ちっ！ ああ言えばこう言う奴じゃな。

「もう！　もう良い！　とにかく私は間違はなく神様なのじゃ。フ
ランティーン。これで良からう！」

有無を言わず断言し話題を打ち切ると、改めてデザートを頬張
る。食事は全部これで良いのに、どうしてわざわざあんなすっぱか
ったり辛い物を食べねばならんのじゃ。

その後宿に帰った私達はアキヒトを一つの部屋に居れ、女3人で
残りの部屋に入った。

「ベッドが2つしかないの」

とはいえ、3人ともベッドで寝たければ一人はアキヒトと同室と
いう事になる。馬車の旅の疲れを癒す為、今日はハーレムは休みの
予定じゃ。

「そうね。じゃあ、私が床で寝るからあなた達はベッドで寝なさい。
まだ子供なんだし」

エメルダの言葉に引かかった。よりによって子供とは。いや、
私だけではなくフランティーンも不満の顔を隠さない。気を悪くし
相手がエメルダとはいえ突っかった。

「わらわは子供ではありません！　撤回して下さい」

そして当然私も反論した。

「食事の時も言ったが、私を何歳とおもっとるんじゃ？　私が最年
長なのじゃぞ！　年長者が床に寝るといふなら、私が床に寝るわ！」

じゃが、エメルダは私達の抗議を平然とした顔で受け止め、口を開いた。

「分かったわ。じゃあ、神様、床に寝てちょうだい」

そしてベッドの一つに潜り込み「おやすみなさい」と毛布を被った。

残された私とフランティーヌは顔を見合わせる。そしてフランティーヌもそそくさとベッドに上がり、

「皆さん。お休みなさい」

と毛布を頭まで被った。

しまった……。こんな手に引つかかるとは……。私は余った毛布で全身を包み床に横になった。グスグス。

第20話：第一回ローション会議

翌日朝食を食べ終わった後、エメルダが女達だけで話があるというので、アキヒトをハブって一つの部屋に集まった。

そしてベッドの縁に座る私とフランティーヌを前に、エメルダが腰に手をやり口を開く。

「色々問題も解決して、これからは宿に泊まる事も多くなります。今までは神様を1人つきりにさせてアキヒトをけしかけたり、フランティーヌに声を掛けて行かせたりしていましたが、これからはもうそんな事やってられません！　まずフランティーヌ！」

「あ。はい！」

突然名指しされたフランティーヌが思わず大きな声で返事をする。それに対しエメルダは「いい。これからは」と前置きすると身体をくねらせた。

「傷付いたアキヒトには慰めが必要なの。わらわも本当は望んでいる訳ではないのですけど、アキヒトを慰める事が出来るのは、わらわだけだから……。なんて言うのはもういいのよ！」

と、ビシッ！　とフランティーヌを指差した。

指差されたフランティーヌは、うぐ。つと言葉を飲んだ。

ふっ。そうじゃアキヒトは立ち直ったのじゃから、もうフランティーヌの慰めなど必要あるまい。これからは純粹にハーレム要員として励むのじゃ！　じゃが、そう考えているとエメルダの矛先が「

次、神様！」と私に向いてきた。え？ 私？

エメルダは、顔を背け恥らった様な仕草をする。

「本当は嫌なんじゃけど、私はアキヒトの彼女じゃし……。アキヒトがサルのようにさかってくるから断りきれず仕方ないんじゃない……。っていうのも、もう終わりにして！」

と私をビシッ！ 指差す。

くっ！ 様式美を理解せぬ奴め。お約束というものを知らんのか。無駄に芸達者なところを見せおって。

「いい？ 森の中じゃあるまいし、一々1人つきりにさせる為に姿を隠したりなんて面倒くさい事やってられません。順番を決めたので、この順番通りにアキヒトの部屋に行って下さい」

エメルダはそう言って、一枚の紙を私達に見せた。

まったく横暴な奴じゃ。お前はジャ○ヤンか。もっとも一応は仲間を思う気持ちはあるみたいじゃから、横暴なだけのテレビ版じゃなく、仲間思いの劇場ば……。と、私はエメルダが決めた順番に我が目を疑った。

「なんじゃこのオーダーは！ 先発がフランティヌに、中継ぎはエメルダ。私が抑えとはどう言う事じゃ！ 先発は不動のエースの私じゃろうが！」

「なんなのよ。先発とか中継ぎとかって。だいたいあなたアキヒトに抱かれるの嫌だったんじゃないの？ だったら最後で良いじゃない。とにかくこの順番が一番良いんだから、この通りにしてちょう

だい」

エメルダは腕を組んで私を睨むが、お前が今、抱かれるのを嫌と言うのをやめろと言うたんじゃろうが。とにかくここは彼女としての沽券にかかわるのじゃ。怯んではいられん。

「どうしてフランティーヌが一番初めなんじゃ！ 理由を言ってみよ！」

「だって、フランティーヌはまだあんまりなれていないんだから最初が良いでしょ？ アキヒトだって初めの方が余裕あるだろうし」

エメルダの言葉にフランティーヌは、うんうん、と頷いておる。ちっ！ しかし、そう言われては仕方がないんじゃないだろうか……。じやがちよつとまてよ？

「その理屈なら、2番手は私じゃろうが。どうして私が最後なんじゃ？」

「だって、前に神様の見た時、なんか凄かったし、だったら最後で良いかなって」

うっ。そう言えばこいつにはしている所を見られたんじゃった。しかし私のってそんなに凄いのか？ いや、エメルダの方が経験豊富じゃし、絶対エメルダの方が凄いはずじゃ。

「お前より私の方が凄いなってありえん。絶対にお前の方が汚れのはずじゃ」

私が憤然と言い返すと、エメルダは怯んだように少し仰け反った。

「よ……汚れって、言うに事欠いてなんて事を言うの。この子は」

エメルダは懔然として私を睨み、私も睨み返す。この後のエメルダの報復を考えると背筋が凍るが、ここは引くわけにはいかんのだや！

じゃが睨みあっていると、不意にエメルダは、ふっと微かに溜息を付くと表情を和らげた。

「確かに神様の言う事も分かるわ。なんていつでも神様はアキヒトの彼女なんだし……」

おお。なんじゃエメルダも分かっておるではないか。

「でも……」

「でも、なんじゃ？」

「やっぱり彼女だけあって、アキヒトも神様の時は張り切っちゃうみたいなもの。そしたらいくらアキヒトが若いって言っても体力がなくなっちゃうでしょ？」

「うーん。そう言う事もあるかも知れんの」

「その後じゃ、さすがに私にも荷が重いわ。やっぱり彼女には勝てないんだもの。いえ、多分私じゃなくても、きっと誰だって無理だわ」

ふむふむ。なるほどな。やはり彼女は別格という事じゃの。

「まあそういう事なんじゃったら仕方が無い。最後まで我慢してやる」

「そう。分かってくれて良かったわ」

エメルダはそういうと安心した様に笑ったが、その表情が若干悪人の顔に見えたのは気のせいじゃろうか？

「じゃあ、順番はこれで決まりね。アキヒトには3人終わったところで、一日休んで貰います。若いから一日も休めば十分でしょう」

ふむ。中一日というやつじゃな。となると4日に1回私の番が回ってくるのか。フランティーヌが入る前は3日に1回じゃったから、あんまり変わらん感じじゃの。

やっぱりここは100人に増やすべきじゃの。そうすれば、途中の休みを考えれば4ヶ月に1回くらいしか回ってこんじやろう。いや、さすがにそれは寂しいか。やっぱり10人くらいで、2週に1回くらいじゃな。

それくらいなら私も我慢でき……。って、私は何を考えとるんじや！ なんじゃ寂しいとか我慢できるとかって！

いかん、すでに、かなり毒されてきている気がする。思いの外ハイペースじゃ。あの黒の○太め。このまま毒されてしまつては、神の力が戻った時、全宇宙の危機じゃ。ハーレム要員を増やすのを急がなくては！

私がそう考えていると、エメルダとフランティーヌが何やら喋っ

ておる。

「順番が変わる事があるかですって？　それは状況が変わればあるでしょうけど、変わりたいの？」

「あ、いえ……。ただ、その様な事があるのかと思い聞いてみたのです」

「もしかして、一番最後になりたいって言う事？」

探る様な目で言ったエメルダの言葉に、フランティーンは慌てて首を振った。

「いえ、そういう事ではないのです。わらわは別にその様な事を考えているわけではありません」

とは言うもののやはりフランティーンは、さっきのエメルダが言った「彼女だから一番最後」という言葉を気にしているようじゃ。

その言葉に、

「ふゝん」

とエメルダは腕を組み首を少しかしげて疑わしげな視線をフランティーンに送っておる。しかし、最後になりたいという事は、私の「彼女」ポジションを狙っているという事じゃな。

ふつ。神である私に戦いを挑むとは身の程知らずな奴よ。アキヒトのトラウマが治った今、理想の彼女となっている私に隙は無いのじゃ。

じゃが待てよ？　フランティーンはハーレム要員を増やすのには

反対していたはずじゃが、良い機会じゃ。人の感情を操っての騙しあいではエメルダには勝てんが、理屈優先の駆け引きでは私の方が得意じゃ。これを機にフランチーヌを黙らせよう。

「エメルダよ。そう言えばハーレムの人数が増えたとしたら、順番はどうなるんじゃ？」

私の問いかけにエメルダは

「増えた時の順番？」

と言うと顎に手を当てて考え込んだ。そしてしばらくすると

「そうね……」と口を開く。

「もう1人増えて4人になれば、2人ずつに分かれて貰う事になるわね。そしてアキヒトには2人ずつで一日休んで貰うわ」

ふむ。やはりそうなるであろうな。

「そのうちの1グループは当然私が最後になるとして、もう片方はどうなるんじゃ？」

すると私の言いたい事を察したのか、エメルダは一瞬にやりとした。そしてすぐに笑いを収める。エメルダだって女戦士に当てがあると言っておったし、100人はともかく、増やすのには賛成のはずじゃ。だからフランチーヌが増やすのに反対なのは、封じ込めたいはず。

「それは……まだ分からないわ。入る子がどんな子か分からないし、もしかしたたらフランチーヌに最後に行って貰うかも知れないけど」

「わらわ……ですか？」

「ええ。まあそういう事もあるかも知れないってだけ、けどね」

エメルダの言葉に確証は無いが、それでもフランティーンは頭の中で状況を考えているようじゃ。人数が増えるのは好ましくない。しかし人数が増えれば私と「並んで」彼女ポジションと言える最後になれる。かもしれない。

アキヒトに惚れているフランティーンにとっては魅力的な話のはずじゃ。もつとも私としても、並んだと思われるのは癪じゃが、実際人数が増えれば避けられぬ話じゃ。避けられぬなら精々有効に使わせて貰おう。

「まあ増やすといっても、まだ当てがある訳ではないしな。それは明日ギルドに行つて、名前が売れそうな依頼を見つけてからじゃ」

「ええ。そうね。今日はもう良いとして、明日からまた活動しよう。100人は行き過ぎだけど、もう何人かは増やしたいし」

そしてエメルダは、フランティーンに

「ね？」

と片目を瞑つて見せた。

「そ……そうですわね。もう……1人くらいなら増えても構わないかも知れせんわね」

よし。上手く行つた！ これで反対する者は居なくなった。さらに増やす時にまた反対するかもしれないが、その時はその時じゃ。

「まあとりあえず、順番や人を増やす話はもういいとして、昨日は町に着いたところでみんな疲れてたから休んだけど、今日からは夜アキヒトのところに行きましよう。まず始めは決めたとおりフランティーヌが行ってね」

エメルダが纏める様にそう言うのと、表面上は落ち着いて見えたフランティーヌも「彼女」ポジションになれるかも、と彼女なりにテーションが高くなっていたらしい。

「はい。がんばります!」
と大きな声で答えた。

思いの外大きな返事に、ちょっとびっくりした顔をしたエメルダじゃったが、気を取り直すと、人の悪い笑みを浮かべる。あ、悪人の顔じゃ。

エメルダは、そっとフランティーヌの左肩に手を置いた。そして優しく微笑む。

「私には何を頑張るのかよく分からないけど、取り合えず頑張りたい」

その言葉にフランティーヌは、自分の言った台詞の意味を理解して顔を真っ赤にしておる。

「いえ。あの……頑張ると言っても……別にへんな意味では無いのです」

しどろもどろになりながら弁解するフランティーヌに、私は追い討ちを掛けるように、笑みを湛え彼女の右肩に手を置く。

「まあ私にも何を頑張るのか分からんが、とにかく頑張るがよい」

フランティーヌはよっぽど恥ずかしいのかさらに顔を赤くし俯いた。あ。なんか凄く楽しい。

第21話..嘘つきな女

私はよく嘘をつく。

「その方は今、オリガという町に滞在しているそうです。ですが…
…あまり一つのところに長期滞在する方では無いので、今から向かってもらっしやるかどうか…」

ギルドの受付である人の行方を訪ねた私への回答は予想した通りのものだった。やっぱり捕まえるのはそう簡単にはいかないみたいね……。

でもあの人だって翼があって飛んでいる訳じゃないし、人知れず隠れて移動している訳でもない。むしろその名を追いかけるのは簡単。足取りを聞きながら追いかければいつかは追いつくはず……。

「ありがとう。助かったわ。それはそうとして、このギルドでは並みの者では倒せそうに無い魔物の討伐依頼の仕事は扱っていないかしら？」

「エメルダ。どうだった？」

ギルドの建物から出た私に、外で待っていたアキヒトが声を掛けてきた。私は微笑みつつも肩を竦ませる。

「残念だけど、この町では名前を売れそうな依頼は無いみたい」

「そっか……。中々簡単にはいかないみたいだね」

アキヒトは残念そうだ。前回の事でみんなに迷惑を掛けたこともあって、その挽回の為に活躍したいみたいね。

「仕方が無いわよ。勿論世界には強い魔物は沢山居るんだけど、近場に沢山居ては世界が減っちゃうわ。この前のフェンリルはたまたまよ」

「そう言えば、フェンリルも一匹で万の軍勢を倒したって言うけど、そのフェンリルを倒せる人っているの？」

「ふふっ」

アキヒトの言葉に私は思わず笑った。とてもじゃないけど、そのフェンリルを10分の1の力で倒した少年の言葉とは思えない。

「そうね。確かにフェンリルは強いけど、過去に倒されたという記録はあるわ。勿論、アキヒトと戦ったフェンリルとは別のだけど、かなり大変だったみたい」

「そうなんだ？」

「ええ、数千の兵士が盾となって犠牲になり、その間に数百人の魔法使いが詠唱して一斉に魔法を放って、そのフェンリルの足を狙い打ったらしいの。フェンリルの牙は凶悪だけど、最大の武器はその巨体に似合わない素早さだから。その後動きが鈍くなったフェンリルにみんなで止めを刺そうとしたんだけど、フェンリルの抵抗にあって、そこでもかなり犠牲者を出してやっと倒したみたい」

私の説明にアキヒトは、

「へへへ」

と関心した様子で頷いている。

「それよりも、早く神様達と合流しましょう。時間が勿体無いから別行動したけど、やっぱりあの2人じゃ心配だわ。フランチーヌは世間知らずだし、神様はしっかりしている様で、常識がないから危なっかしいし」

「うん。そうだね」

と、私の言葉にアキヒトは頷いた。

もっとも今人事のように頷いているアキヒトも相当の世間知らずなんだけどね。

2人は洋装店に行っているはずなので私達もそこに向かう。するとちょうどお会計をしているらしきところに出くわした。

「ちゃんと服は選んだの？」

するとすでに会計はすんでいるらしい神様が手にした袋を振った。

「ああ、今着ているのと同じ様な物を選んだから問題ないじゃろう」

「そうなの？　せっかくだから違う服にすれば良かったのに」

「そうは言っても、どんな服が良いか分からんな。同じ様な服なら無難と思ったのじゃ」

うーん。やっぱり、一緒に選んであげた方が良かったかしら。そこに会計を済ましたフランチーヌがやって来た。

「ちゃんと私が言ったとおりにした？」

するとフランティーヌは紙袋を掲げてみせる。

「はい。おっしゃる通り、白いドレスでは無いものを選びました」

私はその言葉に、うんうん、と頷いた。あんまり心配すること無かったみたいね。

じゃあ、次は馬車を買換える予定だったのだけ……。と、私は、顔に深いシワが刻まれた初老の女店員に尋ねた。

「この町で、馬車を扱っているお店があります？」

「馬車？　そうね。町外れに馬車を作っている工房があるはずだわ」

「そう。ありがとう」

と私は店員にお礼を言って、背を向けた。

でも、どうしようかしら？　町外れまで全員で行く必要はなさそうだし、私とアキヒトだけで行って、2人には馬車に積み込む食料でも買い出して貰おうかしら。神様は好き嫌い多そうだから、神様の味覚に合わせるしかないし、意外とこの2人でも大丈夫そうだし。

アキヒトにも行って貰えばさらに安全かも知れないけど、町外れまで行くのは女の私1人じゃ物騒だわ。それに帰りには私が飲むお酒も買いたいから、荷物持ちも必要だし。

自分の飲むお酒の為にって思われるかも知れないけど、実際お酒

が無いと寝れないのだから仕方が無いわよね。

「私とアキヒトは、馬車を見に行くから、あなた達は馬車に積み込む食料を買っておいてちょうだい」

しかし私の言葉に2人は不満そうに声を上げた。

「馬車に積み込むとなれば、大変な量になるじやろう。そんな物2人で運べる訳が無いではないか」

「そうです。それに私にどんな物が良いかなど分かりますもありません」

「大丈夫よ。沢山買うんだから、自分で運ばなくても、お店の人に宿まで運んでって言えば、運んで貰えるわよ。それに神様、子供舌でしょ？」

「子供舌って言うな！」

神様は不満そうに言うけど、実際その所為で神様の好みに合わないといけないんだから。私は思わず慥然とした表情を向けた。

「いい？ 神様が食べられない物があるから、他の人はそれに合わせないといけないのよ。文句は言わないで。ちゃんとお店の人に言って、味見させて貰ってから買うのよ？」

「くっ！ 子供扱いしおって。私を何歳とおもっとするんじゃ」

そうは言っても、やっぱり自分に好き嫌いがあるのは分かっているみたい。ぶつぶつと文句を呟きながらも、押し黙ったので、今度ハフランティーナに顔を向けた。

「あなたは神様が変な物を買わないかちゃんと見ててね」

「はい。分かりました。お任せ下さい」

神様はフランティヌがお目付け役なのが気に食わない様子だったけど、いつまでも構ってられないとその場を後にする。

「馬車ってやっぱり、今と同じ2頭立ての馬車なの？」

工房へと進む道すがら、そう問いかけてきたアキヒトに視線を向けて答える。

「ええ。私にはそれが限界ね。4頭立ての馬車は私には無理よ。馬4頭を同時に走らせたり止めたりなんて、その技術を持っている人じゃないと難しいわ」

そして工房に着いたのだけど

「馬車を買いたい」

と言う私達の言葉に、その工房の痩せた中年の主人は首を振った。

「今すぐに売ってやれる馬車は無いね。みんな買い手がついている物ばかりだ。10日ほど待って貰えれば、用意は出来るがね」

10日……。お金はあるんだからその間宿に泊まって待てなくはないけど、そうしたらあの人は遠ざかってしまう……。

「お金は倍出しますから、今有る物をすぐに売って頂く事は出来ませんか？」

だけど私の申し出に、痩せた男は眼光を鋭くした。何か怒らせるような事を言ったかしら？

「良いかい、お嬢ちゃん。こっちだって信用商売なんだ。信用を失っちゃやっていけねえ。倍出して貰えるからって、先客を無視してほいほい売る訳にはいかねえんだよ」

お嬢ちゃん呼ばわりされた事は不快だったけど、この男の言う事はもつとも。どうやら焦った挙句に、馬鹿な事を言ってしまった見たいね。

「ごめんなさいね」

と男に頭を下げて工房を後にした。

「馬車を買えなくて残念だったね」

「そうね。でも、今の馬車で問題が有る訳でもないし、馬車は買える時で良いわよ。それよりもお酒を買いたいから持つのを手伝ってね」

「あ、そう言えばエメルダってお酒を飲むんだったね」

私の言葉にアキヒトは思い出した様に言った。私がお酒を飲むのは男が居ない時だけ。だから、アキヒトは私がお酒を飲む所を見た事が無い。

「ええ。アキヒトが居ない時はね」

「そうみたいだね。でも、どうして僕が居る時は飲まないの？」

私はアキヒトの言葉に、媚を含ませた笑みを浮かべ、彼の顔を覗き込んだ。

「だって、お酒を飲むよりもっと楽しい事をしているんだから、飲む必要ないでしょ？」

「え？ あ、うん……」

毎日女をとつかえひつかえしているこの少年は、私の言葉に顔を赤くし、あらぬ方を見て頷いた。やっている事に比べて、ずいぶんうぶな反応だけど、私はこの反応は嫌いじゃない。

顔を赤くする少年の耳元の顔を近づけ、彼の耳に微かに唇を触れさせながら囁く。

「今晚は私の番よ。楽しみましょう」

アキヒトはその囁きに、ますます顔を赤くした。

その後、お酒の瓶を詰めた箱を抱え、はあはあと息を荒くするアキヒトと共に宿に帰った。

果たして、部屋の扉を開け、目の前に広がったその光景に私は眩暈がした。

まず、買ってきた服を広げているフランティヌに声を掛ける。

「それが私が言ったとおりの服なのかしら？」

「はい。やはり外で白いドレスでは汚れが目立つので、青いドレス

にしてみました」

色の問題じゃなく、ドレスが駄目って、もっとちゃん言っておくべきだったかしら……。確かに私もドレスと言われて違和感の無い物を着ているけど、フランティーンが手にしているドレスは、まさに宮廷で王女が着る様な裾が大きく広がった形状の物。こんな物、町の出来合いの服屋においてあったのがむしろ不思議だわ。

でも、移動は馬車でだから今までも何とかなったし、今更仕方ないわね。と、溜息を付いて諦める事にした。そして今度は神様に目を向ける。

「食料を買ってきてって頼んだのに、どうして、お菓子ばかり買っているのかしら？」

その言葉にお目付け役だったフランティーンが、神様より先に口を開いた。

「やはり駄目だったでは無いですか。私はきつと怒られるって申し上げたはずですからね」

「何を言う。これならばみんな食べられるから問題ないではないか」

ふー。アキヒトの事が無ければ、この子が神様だなんて、絶対に信じないところね。デルブランド王やフェンリルとの交渉の時の事を考えれば、頭は良いみたいだけど、日常生活の常識はかなり欠けているみたい。

「いい？ 神様。今度からお菓子は300ブロンズまでにしてちょうだい。それ以上は認めません」

「そんな横暴じゃ。それでは、直ぐに無くなってしまおうではないか！
馬車での移動が何日になるかも分からのに」

「反論は認めません！」

私はビシツと言った。神様は「お前はジャ○ヤンか」と、意味は分からないけど、なぜか侮辱されている事は良く分かる言葉をぶつぶつ言っているけれど、あえて聞こえないふりをする。

「他に食べる物は買ってないの？ まさか本当にお菓子だけしか買ってないんじゃないでしょうね？」

するとぶつぶつ言い続けている神様に代わって、フランティヌが控えめに言った。

「一応、買ってはいます。それです」

と指差す先を見ると、確かにお菓子ではない食料が置いてある。でも、それは生の野菜や乾物など暖めるだけでは食べられない、調理が必要な食材だった。

仕方が無いわね。料理は得意じゃないから最近ではずっとしていなかったんだけど、取りあえずしばらくは私が料理するしかないみたいね……。

その後、夜も更けアキヒトの部屋へと向かう。

彼はハーレムの主。

強い人が好きだから。それが私がそのハーレムの一員になっている理由。でも、本当の理由は別にある。

私はあの人を追わなくてはならない。でも諦めていた。私に追えるはずが無い。そう思っていた。

でもこの少年が。アキヒトが目の前に現れた。自らを神様と称する少女と共に。まさに神様からの贈り物。彼の力を借りれば……。その為にも私はこのハーレムを維持する必要がある。

「アキヒト。入るわよ」

ノックした後、私は返事を待たずに扉を開けた。

部屋に入るとベッドの縁に座っていたアキヒトは、ずっと立ち上がった。

「エメルダ……」

私より僅かばかり背の高い少年は、そう言って私を抱き寄せた。いつも私にリードを任せる彼の積極的な行動を少し意外に思った。

「どうしたの今日は？ いつもより積極的ね」

「うん」

行動ほど積極的には動かない彼の口は、それだけ言うのと、これ以上私に問いただされても返答に困ると思ったのか、唇で私の口を塞いだ。

私はそれに応える様に、少年の背に手を回し、さらにその手を這わせた。アキヒトは神様によって別の世界の日本というところから来たらしい。その所為か顔の作りや肌の色もこっちの世界の男とは少し違う。肌もずっと滑らかで毛深くなくて、嫌いじゃない。少年の身体の隅々まで手と……舌を這わせた。

相手の身体に舌を這わせる……。私はアキヒトと会うまで、そんな事をした事は無かった。多分私だけじゃなくて、この世界の人間は誰も。でも、アキヒトの居た世界では普通の事らしい。

アキヒトと神様の行為を見た時、平静を装っていたけど、本当は目を疑い、驚いていた。順番を決めた時、神様は私の方が凄いはずって言ってたけど、とんでもない。

でも、いつも受身なアキヒトが積極的に私の身体を責めてくる。そして私もそれに応じる様に……。でも、やってみると私の性にはあっているみたい。今までに無い相手の反応。そして……相手の味が分かるから。あの人はどんな味がするのだろう……。そう思うと胸が高鳴る

行為の後、仰向けに寝る彼の胸に手を這わせながら、はじめに感じた疑問を改めて聞いてみた。

「今日は積極的だったけど、どうしたの？」

「僕……。今更だけど、ちゃんとハーレムを作ろうかと思って」

確かに今更ね。でも今までは「僕の彼女は神様なのに、他の女の人として良いのかな？」って、ずっと受身だったのに、こういう心境の変化かしら。

「なにかあったの？」

相変わらず少年の身体に指を這わせながら問いかけると、アキヒトは身体は仰向けのまま首を曲げ視線を向けてきた。

「この前、神様の事を見れなくなった時に神様が言ったんだ。僕の望みでこんな姿になったのに、それを姿も見たくないなんて酷いって」

そう……。あの子、そんな事を言ったのね。でも、それだと、それこそ神様を大事にしたいからって、他の女の人と関係を持つのを躊躇しそうなものだと思うんだけど。

「それで、どうしてハーレムをちゃんとしようと思ったの？」

「僕は神様には責任があるよ。でもそれを……責任をもって考えたら神様だけじゃないって思ったんだ。ハーレムを作るからって、エメルダに来て貰ったし、フランティーヌだって……。フランティーヌは、もうどこにも行けないんだよね？ だったら僕はちゃんとしないと。今更神様だけって……。そんな事言えないよ」

「そうね……」

私はそう言いながら、少年の胸の辺りを指で円を書く様に滑らせた。アキヒトはくすぐったそうに少し身じろぎする。

「それに……神様の事は好きだけど、みんなの事だって好きだよ」

みんな好き。都合の良い言葉かも知れないけど、でも好きにも色

々ある。一番好き、二番目に好き。友人として好き。家族の様に好き。

私はあの人を追わなければならない。でも、そういう意味で言えば、私もこの少年の事は好き。だから……。

「私もアキヒトの事は好きよ」

私はよく嘘をつく。でも、この言葉は嘘じゃない。

第22話：私の番なのじゃが、これも自業自得？

> i 3 3 5 0 1 — 3 5 9 7 <

私は今アキヒトの部屋の前で立ち尽くしていた。

一昨日はフランティース。昨日はエメルダ。つまり今夜は私の番じゃ。

「ギルドにあまり良い依頼が無かったから、次の町に急ぎましょう」

そう言って先を急ごうとするエメルダに私は断固抗議した。

「お前ら2人の時は宿じゃったのに、私の番の日に出発とはどういうつもりじゃ！」

私の抗議にエメルダも渋々了承して、出発を先に延ばしもう一泊する事となった。そしてエメルダの言う、逃げ回らずに自分からアキヒトの部屋に行けという言葉通りにアキヒトの部屋の前まで来たのじゃが、そこで私は停止した。

うーん。女ばかりの時はわりと平気じゃったのに、いざアキヒトの部屋に突入するとなると「恥じらい」設定がフルロットルじゃ。これはあれか？ 女ばかりじゃと恥じらいが無くなるというやつか？ まあ私が「女」なのかは微妙なんじゃろうが。

そして、さつきから扉をノックしようとしているのじゃが、扉に手が触れる寸前で、思わず手が止まる。いつその事扉に体当たりでもかますか？　それの方がまだ出来そうじゃ。

じゃが、今日は少し考えがある。冷静にアキヒトの先手を打つ必要があるのじゃ。体当たりなどしてられん。

よし！　3つ数えたら扉を叩こう！

いゝち、にゝい、さゝん……………。

よゝん、ごゝお、ろゝく、ひゝち、はゝち、きゅゝ、じゅゝう。

コンコン。と、私は意を決し扉をノックした。

「はい？　神様？」

ちっ！　アキヒトも今夜は私の番と認識しとるのか。待ち構えられたと思うと余計恥ずかしいではないか。じゃが、ここまで来て今更引き返せん。

「そうじゃ」

と平静を装って扉を開けて部屋の中に入る。

「神様、来てくれて嬉しい――」

「アキヒト。こう言う事はあまり急いで過激な事はせん方が良からう。お前は少し色々し過ぎじゃ。あまり急いで色々すると飽きるのも早いと言うぞ。もう少し落ち着け」

設定が発動し、にっちもさっちも行かなくなる前に、アキヒトの

言葉を遮って、用意してあった台詞を一気にまくし立てた。

いきなりの私の長台詞にキョトンとしたアキヒトだったが、すぐに我に返ると、私に近づき、微笑みかけてきた。

「そっか。そうだね。ごめんね。僕、神様に無理させてたのかな。今度から神様の言う事もちゃんと聞かないとね」

おお、分かってくれたか。思ったより上手く行ったぞ。遂に設定に打ち勝った！

じゃが、内心勝利の雄叫びを上げる私に、アキヒトは思いがけない事を言ってきた。

「それで、神様って今まででどんなのが一番良かったの？」

今までで一番良かったの？ なっ何を言っとるのじゃこいつは！

「馬鹿者！ そっそんな恥ずかしい事、言える訳ないじゃろ！」

瞬時に「恥じらい」設定が、レッドゾーンに飛び込み、瞬く間に体中が羞恥で赤く染まる。

しかし、アキヒトは私のそれに気付いていないのかさらに言葉を続けた。

「だって、2人でするんだから、神様にも、どうすればいいかちゃんと聞かないと」

「それは……そうかもしれんが、じゃからと言って……」

アキヒトの顔を見ていられなくなった私は、思わず顔を背けたがアキヒトの追及は止まらない。逸らした私の顔をアキヒトは覗き込む様にして見つめてくる。

「僕は神様に喜んで欲しいんだ。神様は今まででどんな事をしたのが良かったの？」

じゃっじゃから、そんな事を言わせるな……。恥ずかし過ぎるじやろ。私は必死で口を噤もうとするが……「設定」が発動する。

「ぜ……前々回の時の……私がアキヒトに――」

ぐぬぬ……。昨夜、アキヒトに根掘り葉掘り聞かれた私は、恥ずかしい言葉を言わされ続けた。そして朝となり、我に返って昨日の台詞を思い出し、のた打ち回った。

ちっ！ ナチュラルに言葉攻めなんぞしおって。黒の○太め！アキヒトだって昨日の私の言葉は覚えているはずじゃ。私を見るたびに、その言葉を思い出すのじやろうか？ そう思うと改めて顔が赤くなる。

なぜじゃ？ なぜか、下手に抵抗しようとするばするほど、泥沼にはまっていく気がする。お払いとかして貰った方が良いんじゃないか？ 自分神様じゃけど。

私が、うーん。と考えていると、扉がノックされた。

「アキヒト、神様、もう起きてるの？」

エメルダの声じゃな。ずいぶん早いがどうしたんじやろう？

「私は起きておるが、アキヒトはまだ寝ているぞ」

「そう。もう少しだけなら寝てて構わないけど、あと少しで出発するわよ」

エメルダの言葉に反射的に窓に目をやると、まだ夜が開け日が出てすぐくらいに見える。

「なんじゃ？　ずいぶん早い出発じゃの」

「なに言ってるの！　本当は昨日の内に出発したかったのに、神様が駄々をこねるからじゃない！」

うっ。それを言われると弱いが、しかし、私以外の2人の時は宿で、私の時は外でなど納得出来る訳があるまい。

私が言い返そうと口を開きかけると、エメルダの怒声にアキヒトが起き出した。おいおい。もう少し寝ていても良かったんじゃないのか？　起こしてどうする。

「もう朝なの？」

アキヒトが身体を起こすと、毛布がはだけ裸の上半身があらわになる。我ながら昨夜さんざんと思いながらも、「恥じらい」設定が発動して、思わず顔を背けた。そして背中越しにアキヒトの問いに答える。

「まだ夜が明けたところじゃが、エメルダがもうすぐ出発するんじゃないと」

すると部屋の外のエメルダもアキヒトが起き出したのを察したのか声をかけてきた。

「あ。もう起きたのね。じゃあ、早く準備してちょうだい」

おいおい。寝ていて良かったんじゃないのか？　ずいぶん急いでるの。

「え？　もう出発なの？　まだ夜明けみたいなのに」

アキヒトは、私と同じく、エメルダの言葉に窓を見ながら言った。

「そう見たいじゃの。私が良いと言うまで、被っておれ」

と、アキヒトの頭から毛布を被せて、服を着る。その後、アキヒトにも服を着させて部屋をでた。

するとすでにフランティーンも起きていて、眠そうな目をこすっておる。まあなにやら急いでおるエメルダと同室じゃったんじゃないから、朝早くにたたき起こされたんじゃないろう。そして私達が来た事に気付いて、こちらに顔を向けた。

「アキヒト、おはよう御座います。神……様も」

「おはよう。フランティーン」

「あ、ああ、おはよう」

屈託なく挨拶するアキヒトにくらべ、思わずどもりながら挨拶し

てしまったが、まさかフランティーンが挨拶してくるとは思っていなかったのじゃ。

フランティーンは私をライバル視しておるはずじゃが、何か心境の変化でもあったのかの。

それはともかく私達は、その後すぐ馬車に乗り込み町を出発した。しかも朝食は

「馬車の中でこれを食べて」

と手渡してきたパンになにやら挟んだ物だった。

「本当に急いでるんじやの」

と馬車の中で朝食を食べながら言うと、しばらく口の中に入った物を咀嚼していたフランティーンがそれを飲み込んだ後口を開いた。

「食べながら喋るなんてお行儀が悪いですよ。今までどんな^{しつけ}駢をされてきたんですか」

「駢？ そんなもん受けた覚えは無い。何せ神様じゃからな」

フランティーンは、ため息をついてパンに噛り付いた。それって行儀良いのか？

「そういえば、神様ってお父さんもお母さんも居ないんだよね。どうやって生まれたの？」

どうやって？ そういえば、気付いたら居たな。自分どうやって生まれたんじやろう？ 私を創造した者がこの宇宙のどこかに居るんじやろうか？ しかしこの宇宙を作ったのは私じゃ。なにやらタマゴが先かニワトリが先かみたいな話じゃの。しかし、分からん

と答えるのも癪じゃの。

「それには、とても重大な秘密があるのじゃ。多くは語れんがの」

ふむ。我ながらいいい返答じゃ。アキヒトは、

「そうなんだ？ 知りたいな」

と言っておるが、絶対に喋らん。って言うか、答えなど私も知らん。

ん？ そうじゃ、アキヒトへの新しい報復の方法を思いついたぞ。食事にマスタードやビネガーを投入するだけでは、すぐにネタが尽きるからの。アキヒトにデタラメを吹き込んだじやろう。

「そこまで、言うなら少しだけ喋ってやろう。実はこの宇宙には暗黒エネルギーが充満しておってな——」

その後も馬車は走り続け、私が星々から集めた戦士と共に、暗黒魔神と戦うところで馬車は止まった。じゃが、続きを聞きたがるアキヒトを残し、馬車を降りて辺りを見回すと、特に何も無い街道が走る森の中じゃった。

「こんなところで止まってどうしたのじゃ？ 昼飯にはまだ時間があろう」

すると、エメルダは腰に手をあて私を睨んだ。

「神様がお菓子ばかり買って、調理しなくていい食べ物買わなかったからでしょ！ 私はこれから料理しないといけないの！ 料理には時間がかかるのよ！」

うっ！　そうなのか。それはすまん事をしたかの？

「そっそうか。それはすまんかったの……。じゃあ、邪魔せんように大人しくしておるな」

私はそう言うのと改めて馬車に乗ろうとしたが、エメルダに後ろから襟首を掴まれ引き戻された。

「え？　なに？　自分は働かないで良いと思ってるの？　途中馬車から西の方に小川があるのが見えたから、水を汲んできてちょうだい。分かったわね」

うう。神様使いの荒い奴じゃ。じゃが逆らうと怖いので言うとおりに、桶を持ってその小川へと向かう。すると後ろでまたエメルダの声が聞こえる。

「あ、アキヒト、神様について行ってあげて、また何かあると大変だから」

「うん。分かった」

と、後ろからアキヒトが追いかけてきた。そして私に追いつくと、「これ持つね」

と桶を取り上げた。

おお、気が利くではないか。そう思いながら並んで歩いておったが、ふと気付いた。じゃったらアキヒトが1人で水を汲みに行けば良いのではないか？　とは言うものの結構な道のりを歩いてきてしまったな……。まあいいか。

「そういえば、次はどの町を目指しているの？」

「エメルダは、良い依頼がありそうな町を選んで旅すると言った。何せギルドの受付をやっておった女じゃからの。そこらへんには詳しいんじゃない」

「そっか」

と言いながら、アキヒトは何やら近寄って来おる。なんじゃろう？　と思っていると、突然手を握られた。サルか！　まさかこんな所で！

「おっお前、何を考えておるんじゃない。いい加減にしておけ」

狼狽する私に、アキヒトは慌てて言った。

「違うよ！　えーと。ちょっと神様と手をつなぎたいと思って」

「手？　それだけか？」

「うん。そうだよ」

うーん。手をか。まあこんな所でさかれるよりはマシか。

「じゃあ、絶対に手をつなぐだけじゃからな」

「うん。勿論だよ」

アキヒトは嬉しそうにそう言ったが、手をつないで何が嬉しいんじゃない。

その後小川に到着し水を汲んだ私達は、馬車の元へと戻る。

「桶は両手で持った方が楽なのではないか？」

水を汲んで重くなった桶を片手で持ち、空いた手で私の手を握る
アキヒトにそう声をかけると、

「ううん。良いんだ」

とアキヒトは微笑みながら言った。本当に、何が嬉しいんじゃない
う？

だがまあ、こういうのもたまにはいいかも知れんな。

第23話：衝撃的な料理

水を汲んだ後馬車に戻り、しばらくするとエメルダの料理が出来上がった。そして鍋の周りを囲んで昼食が始まった。その料理を一口食べた瞬間、私の舌に稲妻が走る。

「アキヒト。もっと食べたいと思うのは美味しいと言うんじゃないっけ？」

「うん。そうだけど？」

とアキヒトは口に入れかけたスプーンを持つ手を止め、私の問いに答える。

「じゃあ、美味しくても食べたく無くなるのは、満腹じゃったっけ？」

「うん」

とアキヒトは、またも手を止め私の問いに答えた。

「それじゃあ、満腹じゃないけど、食べたく無くなるのはなんというんじゃない？」

「えーと、不味い……かな？」

「なるほどな」

私はうんうんと、頷いた。

「不味いぞ！ エメルダ」

「何回りくどい事言ってるのよ。ムカつくわね！ 文句を言わずに食べなさいよ！」

私の言葉にエメルダが憤慨すると、フランティーンがエメルダに加勢してきた。

「そうです。出された物に不満を言うなど行儀が悪いですわよ」

ちっ！　また行儀か。うるさい奴じゃの。今朝は挨拶してきたからちょっとは態度が変わったと思ったら、やっぱり私を目の仇にとるではないか。

「よし！　フランティーンはこれを美味しいと言うんじゃない。では、神様手ずから御代わりをよそってやろう。器を貸せ」

「そっそう言っている訳ではありません！　自分のノルマはこなしなさいと言っているのです！」

じゃが、フランティーンはそう言って慌てて自分の器を隠すように抱き寄せた。やっぱり、お前だって不味いと思っとるんじゃないだろうが！

「良いから、器を寄越せ！」

しかし、フランティーンは必死で器を庇う。私はその器を奪おうとフランティーンに襲い掛かる。しばらくその様子を見ていたエメルダが遂に切れた。

「あなた達……。いい加減になさいよ……」

エメルダの低い声が響き、私もフランティーンも思わず身を竦ませる。いかん。さすがに怒らせたか？　じゃが、自らも一口食べた

エメルダの動きが止まった。そしてしばらくすると、スプーンを器に戻した。

「……不味いわね。料理が苦手だったからずっとしなかったんだけど。しない間に前よりもっと駄目になってみたい」

おい。作った本人が食べられなくてどうする。

「仕方ないわね……。神様が買ってきたお菓子を食べましょう。神様持ってきて」

うーん。神様を当然の様にこき使いおって。じゃが、まあ仕方がないと立ち上がった。そしてフランティーヌの後ろを通る時に、その肩を叩く。

「お前はノルマをこなせよ」

えー！？ という顔を向けたフランティーヌにかまわず、馬車からお菓子を取り出す私の後ろで、

「良いから、鍋に戻しなさい」

「……すみません」

と言うエメルダとフランティーヌの会話が聞こえてくる。

その後、改めてみんなで座ってお菓子を食べる。うむ。やっぱりこっちの方が美味しいではないか。

「どうじゃ？ お菓子を買っておいて良かったじゃろうが」

「何を言ってるの！ 初めからお菓子を買わずに、ちゃんとした物を買って置けばなんの問題も無かったのよ！」

うっ！　そ、そうか。エメルダの怒声に反論できず、口をつぐんだ。

「でも、どうするの？　次の町までずっとお菓子を食べるっていう事？」

アキヒトがお菓子を食べながら問いかける。私はそれでも全然構わんのじゃがの。じゃが、エメルダは不満らしくため息を付きながら言った。

「そうね……。そうなるけど、やっぱり料理が出来る人間が必要なのかも」

とはいっても、フランチーヌは料理は出来んじやろうし、アキヒトも無理じやろう。私も出来んが、それは私に料理が得意と望まなかったアキヒトの所為じゃしな。

「仕方が無いわ。料理が出来る人間を用意しましょう」

エメルダの言葉に私は思わず首を傾げた。

「え？　それは確かに必要かもしれないが、そう簡単にそんな人間が旅について来てくれるもんかの？」

「大丈夫。それは問題ないわ。絶対に連れて行ける人間が居るの。お金が必要だけど」

すると今度はアキヒトが疑問に思ったらしく、話に割り込んできおった。

「それってどういう事なの？」

「奴隷を買うの。急いでいるし、確実だわ」

そういえば、こやつなにやら急いでおるが、何を急いでるんじやろうな？　そう思っておると、アキヒトが驚いた声をあげた。

「奴隷？　そんな人がいるんだ？」

「ええ、そうよ。アキヒトの世界には居なかったの？」

「それは……。居るところには居るって言うか、昔は居たって言うか……。でも、奴隷を買うなんて、良い事なの？」

うーん。どうやらカルチャーショックというやつみたいじゃの。フランティーンに目をやると、奴も不思議そうな目でアキヒトを見ておる。フランティーンにとっても奴隷を買うと言うのは、当たり前前の事のようにじゃの。

「どうしていけない事と思うの？」

「だって、奴隷って人を無理やりさらって来て売ったりするんですよ？　そんなのいけない事だよ！」

アキヒトは憤慨して言った。じゃがその言葉に、エメルダではなくフランティーンが驚いて声を上げた。

「まさかそんな事しません！　そんな事をして売られた人が居れば、その人が訴えてさらった人間が捕まります！」

どうやらフランティーンは、自分がそんな事に賛成しているとアキヒトに思われるのが嫌みたいじゃな。そしてその言葉にアキヒトは首をかしげた。奴隷と言っても、アキヒトの世界とこの世界とは、意味合いがかなり違うようじゃ。

「じゃあ、奴隷ってどんな人になるの？」

「当然、自分で自分を売った人になるのよ。そうじゃなくて誰が人を売れるって言うの？」

エメルダが、さも、当然でしょ？ という風に言うと、アキヒトは虚を突かれた様に一瞬ぽかんとした。

「え？ そうなんだ。でも、どうして自分を売ったりするんだろう？」

「そうね……。良くあるっていうか、ほとんどがそうなんだけど、飢饉で作物が取れなかった農村の娘や息子が、他の家族を食べさせる為にとかね。この場合は自分がっていうより、実際は親が売っているのに近いんだろけど。それでも子供が嫌だって言い続けたら、売るのは無理だわ。それと、たまに働き口が見つからなくて食べるに困って自分を売って人も居るわ。奴隷として買われたら、一応食事は与えられるから」

「そっか……」

アキヒトもエメルダの説明に一応納得したみたいじゃな。自分で自分を売つとるなら、文句の言いようもないしの。

「で、その奴隷はどこで売つとるんじゃ？ 次の目的の町か？」

私の言葉にエメルダは、

「そうね……」

と腕を組んで考え込み始めた。

「さすがにどこの町でも売っているってものじゃないわ。かなり大

きな町じゃないと。目的の町まで行くのに、本当は通り過ぎるつもの大きな町があったんだけど、そこに寄りましょう」

なるほどの。しかしそういえば、以前エメルダは、御者を雇うのはアキヒト以外の男を連れて行く事になるから嫌だとか言っておったな。すると、その料理を作れる奴隷と言うのも女の奴隷を用意するつもりなんじゃろうな。という事は……。

「その、奴隷とやらはハーレムに入れる事になるのか？」

「それは分からないわ。もちろんそれにこした事は無いけど、料理が出来る人って事を優先して選ばないと本末転倒だし、アキヒトにも好みはあるでしょうし……」

ふむ。それもそうじゃの。

「アキヒト。お前の好みってどんな女なんじゃ？」

アキヒトは私の言葉に一瞬キョトンとすると、次第に顔を赤くし始めた。なんじゃ？ 今更女の好みを聞かれて恥ずかしがる様な面子でもあるまい。そう思っていると、アキヒトは言い難そうに口を開いた。

「えーと、神様……が、僕の好みかな」

「あ……」

そういえば、そうなんじゃったな。私の顔も思わず赤くなった。そしてなにやら後ろから殺気を感じると思って振り向くと、フランティーヌが立っている。

「なんじゃ？」

「いえ。何でもありませんわよ」

と、私の問いかけににこやかに答えておるが、なにやら目が笑っておらぬ。ちっ！ アキヒトめ。正直なのは良いとして、もう少し気を使って喋ってくれんと、私が無駄に恨まれるではないか。

「まあよい。とにかく料理が出来る者の中から、出来るだけアキヒトの好みに合いそうなのを探そう。好みに合いそうな奴が居なかったら、料理に専念して貰えば良いんじゃない」

私がそう締めくくると、アキヒトが、あ！ とした顔をして口を開いた。

「でも、条件を選べるなら、馬車を動かせる人が良いんじゃないかな？ そしたら交代で馬車を動かして貰えて、エメルダも休めるよ」

お、なるほどの。アキヒトの癖になかなか気が効くではないか。

「確かにその通りですわね。アキヒトの言う通りです」

フランティーヌもアキヒトを褒めておる。ふむ、アキヒトもたまには活躍しないとな。じゃが、そう思っていると、エメルダがなやら複雑そうな顔をしているのに気付いた。

「エメルダ。何か言いたい事があるのか？」

すると、エメルダは言い難そうな顔をして言った。

「こう言っちゃあ、なんなんだけどね。さっきも言ったけど、奴隷になる女の子って大抵農村の出なの。あなた達ぐらいの年齢の農村

の娘で、私程度に馬車を操れない娘なんて、条件を付けるまでも無く居ないのよ」

コ○助で、すみません……。

第24話：世間は結構狭いもんじゃの〜

料理が出来る者を得る為、奴隷売買を行っているシスカールという町へ向かった私達は、数日馬車で旅しそこに辿り着いた。エメルダが大きな町でしか奴隷売買は行われていないと言っていたとおり、その町は始めにエメルダと出会った町よりも人通りも多く賑わっていた。

「ここが奴隷を扱っているという町か。それでどこで売っておるのじゃ？」

「そうね。私もこの町でなら扱っていると聞いた事があるだけで、来たのは初めてだから……。でも、奴隷売買は、広い場所で行われているはずよ。少し歩けば、すぐに分かると思うわ」

私達はエメルダの言葉通り、取り合えず町をぶらつく事にした。じゃが、ふとアキヒトに目をやると、みんなから遅れがちに後ろを歩いている。そして、なにやらしきりに首をかしげ、時折うーんと唸っておる。私も歩みを遅くして、アキヒトと並んだ。

「どうしたのじゃ？ 何か気にかかるのか？」

「気にかかるっていうか。やっぱりお金で人を買うのってどうなのかな？ って思ってる……」

なるほどの。エメルダやフランティヌの話で、一応納得したと思っておったが、元の世界との価値観の違いで、やっぱり納得しきれないという事か。

「しかし、自分で自分を売るというなら、他人がとやかくいう事で

はあるまい」

「それはそうなんだけど……。でも、僕達はその奴隷を買うんだよね？　だったら、やっぱり僕達の問題でもあるよ」

ふむ。まあそれもそうかの。

「しかし、我々がどう思おうと、実際この世界では行われておるんじゃないし、お前だって、この世界の仕組みまで変えようと思っている訳ではあるまい？」

「うーん。僕のチート能力でもどうにもならないかな？」

どうやら、結構真剣に考えておるようじゃの。じゃがいくらこの世界では最強とはいえ、出来る事と出来ない事がある。

「結局、金に困って仕方なく自分を売つとるんじゃから、売れんかったらそいつら自身が困るじゃろう。まさか金に困っている奴ら全員に金を配って回るわけにもいかんしな」

「やっぱり、お金を配るのって駄目なの？　僕が一生懸命魔物を退治していけば、お金を稼げるかとも思ってたんだけど……」

ふむ。こやつなりに色々と考えておったのか……。じゃがそうは言ってももの……。」

「世の中には金に困っておる者などいくらでもおって、さすがのお前でも、いくら稼いでも追いつかんよ。それに金に困ったらお前が金をくれるとなれば、それを当てにして働かぬ奴らも出て来よう」

「そっか……。そうだね……」

うーむ。アキヒトはなにやら落ち込んでしまったか。しかし無理なものは無理じゃしな……。」

「まあ今から私達自身が奴隷を買う事になるんじゃない、お前に出来る事は、その奴隷に優しくしてやる事じゃな。そしたら少なくともそいつは不幸にはならん」

私がそう言うのと、アキヒトは少し明るい表情を私に向けて言った。

「うん。そうだね……。分かった。そうするよ」

まあ相変わらず頼りない気もするが、優しいといえば優しいか。これでの○太でなく、キ○レツじゃったら、コ○助としても安心なんじゃないが……。

じゃが、そうこう話しているうちに、前を歩くエメルダとフランティーンとは結構離れてしまっていた。そしてそれに気付いたエメルダが振り返った。

「何やってるの2人とも。さっさと行くわよ」

「あ。うん。神様、行こう！

「あ。はいはい」

エメルダの言葉に、私とアキヒトはその後を追った。

町の中心部から少し離れた広場に大勢の人が集まっているのが見えた。そのうち何人かはなにやら文字を書いた白い札を首から下げてる。

「ここがその奴隷を売っている場所か？」

「ええ、そうよ。首にかけている札に書いてあるのは、名前や年齢。それと何が出来るかね」

ふーん。と改めて辺りを見回すと、その白い札をかけている者は、男も女も居て、年齢も様々じゃ。そして札をかけていない者―つまり買い手という事じゃな―となにやら話しておる。どうやら値段や条件の交渉らしいの。

「うーん。なんか僕が思っていた奴隷売買とかなり違うのかな？」

アキヒトはなにやら、拍子抜けとまでは言わぬが、辺りを見回し意外そうに言った。私はと言えば、アキヒトと違い元の世界との比較もなにも無いので、まあこんなものか。と言う感じじゃな。

「お前の世界では、奴隷を売買する時はどんな感じなんじゃ？」

「どんな感じっていても、僕も実際に見た事がある訳じゃないんだけど……。もっと買い手が一方的っていうか……。奴隷は酷い扱いをされるっていうか……。そもそも、奴隷と買い手が条件について話し合うなんて思って無かったよ」

「そりゃそうよ。わざわざ酷い事をしそうな人間に自分を売ったりしないわよ」

「まあそりゃそうじゃの。で、首から白い札を下げている奴が奴隷でいいんじゃない？ そいつらに声をかけて料理が上手いか聞いて、上手そうな奴に金を払ってそいつを買いうって事か？」

「ええ。そうよ」

「そうなんだ？ 奴隷って奴隷商人とかいうのがいて、その人にお金を払って買うんだと思ってた。でも、その払ったお金はどうなるの？ 奴隷が自分で持っておくの？」

「いえ。大抵の奴隷は家族を食べさせる為に自分を売るんだから、仲介人が手数料を取るけど、残りはちゃんとその家族に送られるわ。本当に家族の元に届くのかって心配かも知れないけどそれは大丈夫。お金が届かないなんて事になったら、奴隷の取引が成り立たないもの。横領なんてしたら、普通の窃盗よりよっぽど重罪よ」

「そっか……そうなんだ。だったら安心……なのかな」

ふむ。どうやら、アキヒトもようやく納得したようじゃな。じゃあ、あとは料理が出来る奴隷を探すだけか。じゃが待てよ？

「そう言えば、料理が出来るのは当然として、ハーレムに入れられそうな奴を探すんじゃない？ 奴隷の方でも条件を付けられるなら、そう上手くいかんのじゃないか？」

「そうね……。それは結局その奴隷の状況によるわね。そういう相手をするって条件なら、当然金額は高くなるわ。それだけお金が必要ならその条件を飲むだろうし、そうじゃ無かったら断る。まあ当たり前前と言えば当たり前の話なんだけどね」

「なるほどの」

じゃが、ふと気付いたが、気にかかる事があったからなのか、いつも空気のアキヒトはよく喋っておるが、その代わりにフランティーヌが透明人間と化しておるの。まるでどこにもおらんかの様じゃ。

とフランティーヌに顔を向けると、私の視線に気付いたのかフランティーヌも視線を向けてきて目が合った。

「なんですか？」

「いや、えーと、お前にも何か希望は無いのか？」

すると私の言葉に、フランティーヌは、軽く手の平を握って人差し指を唇につけ、

「希望ですか。そうですね……」

と、少し考えている様な仕草をして言った。

「お茶を入れるのが上手な娘が良いですわね」

「却下じゃ」

と、反射的に言いかけたが、さすがに自分から聞いておいてそれはないと思い、口をつぐんだ。しかしこやつもハーレム暮らしになったと思ったら、まだお姫様気分が抜けておらんかったか。

「まあ料理が出来て、ハーレムに入れられそうで、お茶を入れるのが上手い奴が見つければの」

そんな奴は居ないだろうと思いつつも、無用な諍いを避ける為、フランティーヌに同調してやった。まああまりこやつと険悪になつてばかりもおれんからの。

「じゃあ、はやく条件に合う娘を探しましょう。いい娘はすぐに取引が成立してしまうわ」

エメルダの言葉に、条件の合う娘探しが始まった。じゃが、そこ

いらに立っている娘が首にかけている白札に書いてある条件を読むんじやが、数が多すぎてこれが結構めんどくさい。

「アキヒト。お前の好みの娘を指差せ。その娘の条件を読んだ方が効率的じや」

「え？ 僕の好みより、料理が出来るって言う方が、重要なんじゃないの？」

「まあ実際、年頃の娘なら料理が出来ないって娘の方が少ないしね。アキヒトの好みで探した方がいいかも」

そう言うエメルダに、じゃあ、料理が出来ないお前はなんなんじや？ とも思わないでもないが、敢えてそこは突っ込まずにスルーし、アキヒトに選ばせる事にした。私は、アキヒトのタイプの娘――つまり私に似た娘を次々と指差す。

「あの娘はどうじや？ 私と同じ黒髪じやぞ？」

「うーん。確かに髪は黒いけど……」

黒髪ならいいというものではないのか？ うーむ。

「そうか……。それでは、あの娘はどうじや？ 目元が私と似ておと思うが」

「えーっと……どうなんだろう？」

アキヒトはまたしても煮え切らない態度で口ごもる。

「はつきりせんのか。じゃあお前はいったいどんな娘がいいんじや？」

「別に神様と似てる人じゃなくてもいいよ……。神様は神様でいいんだから」

「うん。そうなのか？」

それじゃあ、いったいどんな娘がいいんじゃないかな。

しかし、確かに同じようなタイプの娘ばかりより、色々なタイプの娘がいた方がハーレムとしても充実するかも知れんの。

よし！ それならこうじゃ！

「どうじゃ？ それなら、いつその事私とは正反対の娘を探すか？」

「そうね。そうしましょう。それじゃあ、私やフランティーヌとも違うタイプの娘にしてみたらどうかしら？」

間髪入れずにエメルダも同意した。我ながらいいアイデアだったようじゃ。

「3人ともと違うっていうと、茶色い髪で、ショートカットの子とか？ みんな髪の毛長いし」

アキヒトがそう言うと、フランティーヌは、

「そうですね。そうすると……」

と辺りを見渡し始めた。アキヒトが他の娘を選ぶと言うのはやっぱり嫌だったのか、さっきまで娘選びに参加しておらんかったのに、急に積極的になりおったな。もしかして、私に似ている娘を選ぶくらいなら、他の娘を早く探してしまおうって事かの？ 複雑な乙女心というやつかの？ 私には良く分かんが。

そして辺りをキョロキョロと見渡していたフランティーヌはある娘に目を留め、

「あの様な……」

と言った後、その娘の顔を確認すると、突然驚いた声をあげた。

「ソフィー！」

そしてその声に、少し離れたところに立っていた、メイド服の娘もこちらを向いて、フランティーヌと同じく驚いた声をあげる。

「フランティーヌ様！」

そして今にも泣き出しそうな表情でこちらに駆け寄ってきて、フランティーヌに抱きついた。

「フランティーヌ様……。お亡くなりになったとお聞きしていたのですが、ご無事だったのですね！」

「ええ……。実は、事情があってわらわは死んだ事になってしまったのですが、今は彼と……。アキヒトと共に旅をしているのです」

とフランティーヌが、視線をアキヒトに向けて言うと、ソフィーと呼ばれた娘もアキヒトに顔を向けた。目はパツチリと大きくて丸く、肩に届かないくらいの茶色い髪。小柄で、私達とは違うタイプじゃが、なかなか可愛い娘じゃの。どうやら、フランティーヌがお姫様暮らしをしていた時の王宮に勤めていたメイドの様じゃな。それがこんなところで再会するとは、不思議な偶然じゃの。しかし……。

「お前、白札をかけておるが、奴隷なのか？」

そして私の指摘に今更ながら気付いたのか、フランティーヌはまとも驚いた声をあげた。

「そっそういえば、いったいどうしたと言うのです？ お前は王宮に勤めていたのではなかったのですか？」

「それが……。私は王女様御付のメイドでしたので、王女様がフェンリルの元に行った時にお暇を出されてしまったのです……。それでも、他の貴族のお屋敷のメイドの仕事を紹介して頂いたのですが、折悪く父が病で……。王宮に務めていれば身元も安心だと融資してくれる人が居たかも知れないんですけど……。ただの貴族のお屋敷のメイドでは、誰もお金を貸してくれず、残った母や妹や弟達を養う為仕方なく……」

ソフィーの告白に、フランティーヌの表情も曇った。やはり自分付きじゃった娘が奴隷となっているのは、ショックじゃったんじゃない。

「そうだったの。わらわの事で、お前にも苦勞をかけたのですね……」

「いっいえ！ 決してフランティーヌ様の所為ではありません！」

まあ確かにフランティーヌをフェンリルの元にやったのは、フランティーヌではなくその父親の国王じゃしの。じゃが、それでも、自分に関係する事で、知っている者が身を落としているのは気にかかるとは。アキヒトへと、視線を向けている。この娘を引き取って欲しいと言いたい様じゃな。

「どうする？ この娘にしておくか？」

「そうね……。メイドなら料理も出来るわよね？」

エメルダの言葉に、ソフィーは頷き、フランティーヌは言い添える様に口を開いた。

「ソフィーは年は若いですが、王女付きのメイドとして選ばれただ

けあって、一通りの事はすべて出来ます。料理も洗濯も、お茶も入れられますし、お菓子だって焼けます」

ん？ 何か聞き捨てならん台詞を聞いたぞ？

「お菓子を焼けるというのは本当か？」

「はい！ 得意です！」

おお！ それは、めっけものじゃ。

「よし！ アキヒト。この娘にしよう。王女付きの侍女なら料理の腕も問題あるまい」

「うん。そうだね。じゃあ、この娘にしようか。これからよろしくね」

「はい！ よろしく願います」

ソフィーはそう言って、大きくお辞儀をした。

「じゃあ、私は仲介人のところに行って、この子との契約をしてくるわね」

エメルダはそう言って、ソフィーと共に仲介人の元へと歩いていった。ふむふむ。なかなか良い娘が見つかって良かったの。これでお菓子にも困らなそうじゃ。

じゃが、ふと気付いた。感動の再会とお菓子作りの技能に目がくらんで契約に走ってしまったが、肝心のハーレム入りの交渉はしてないんじゃないの……か？

第25話：取り合えず集中砲火してみた。

ソフィーとの奴隷契約が終った後、宿をとりその一室にアキヒトをハブって女達だけで集まった。

そして、エメルダ、フランティヌ、そして私の3人とソフィーは、彼女をハーレムに入れる事について話し合っていた。

「これも運命じゃと思って諦めたらどうじゃ？」

「お前を推薦した、わらわの立場と言うものもあるのですよ？」

「誰だっけいつかは通る道だし、これも経験と思ってみてはどうかしら？」

椅子に座るソフィーを取り囲む様にして立ち、それぞれ口を開く私達にソフィーは頭を抱えて叫んだ。

「これは、話し合いとは言いません！ 強要です！」

「分からん奴じゃのゝ。3人で寄ってたかって説得しておるのじゃから、大人しく説得されたらどうじゃ？」

「『説得』に『寄ってたかって』なんていう『修飾語』をつけないで下さい！」

ソフィーは肩に届かないくらいの短い茶髪を振り乱して叫んでおる。細かい事を気にする奴じゃの。しかしどうするか？ 説得は諦めるか？ まあ始めから料理が出来るという事が優先で、ハーレムに入れるのは絶対条件ではなかった事じゃし……。

じゃが、私がそう思っていると、エメルダがソフィーの前に屈みこみ彼女と視線の高さを合わせて優しそうな声で話し始めた。

「あなたとても可愛いわね。あなたみたいな娘が奴隷になってしまふなんて、とても悲しい事だと思うわ」

突然、優しい言葉を掛けられて、ソフィーは戸惑いながらも礼を言う。しかし可愛いと言われた事に照れておるのか少し顔が赤い。

「え？ あ、そうですか？ えーと、ありがとうございます……」

そこにエメルダは

「でも……」

と前置きして、さらに言った。

「あなたみたいな可愛い娘は、それだけにみんなどういう目的であなたを買おうとするか分かるわよね？」

「それは……。分かります」

ソフィーもそれは分かっていたのか俯いて言った。まあ当然と言えば当然かの。そこにエメルダがさらに優しい声で話を続けた。もっとも優しいのは声だけで、内容は結構えげつなかったが。

「いえ、分かっているわ。あなたみたいな可愛い娘なら、よってたかって何人もの男に抱かれたりする事も考えられるわ。あなた初めてなんでしょ？ そんなの耐えられるの？」

「そ……んな。いくらなんでもそんな事……」

あまりの事に青ざめるソフィーを、エメルダは抱きしめてその耳元で囁く。

「でも、大丈夫よ。安心して。ここなら相手はアキヒトだけで良いし、アキヒトは優しいから……。ひどい事はされないわ」

「で……すが……」

なかなか、うん、と言わぬ娘じゃの。しかし結構心は揺らいでいるようじゃ。さすがハーレム大臣じゃの。いつも通り見事な手腕じゃ。

ソフィーはどしたものと視線を泳がせておったが、ふとフランティーンに目を止めた。そして、不意に首をかしげ、あれ？ という表情をする。何か気にかかる事でもあるのか？ と思っていると、フランティーンに話しかけてきた。

「そういえば……。フランティーン様も、その……ハーレムの一員……なのですか？」

ソフィーのど直球な言葉に、フランティーンの顔が赤くなる。

「えっええ。そうです。わらわもその一員ですから……。お前も怖がる事は無いのです」

「ですが、フランティーン様は、隣国の次期国王サミュエル王子との結婚が決まっていたのではないのですか？　それがハーレムの一員だなんて……」

なに？　そんな話があったのか？　じゃあ順調にいけば、こいつ

どこぞの国の王妃じゃったのか。普段こやつと仲が良いとはいえぬ私じゃったが、それでも思わずフランティーヌに同情の視線を向けてしまうほどじゃな。

じゃがフランティーヌは特に落胆した様子も見せず、腰に手をやって無然とした表情をソフィーに向けた。

「あんな結婚、所詮お父様が勝手に決めた事です。わらわはもうお父様の決めた事に従うのはうんざりなのです。勝手に決められて王妃になるくらいだったら、自分で決めたハーレムの一員の方がずっと幸せと言うものです」

「フランティーヌ様……。ですが……」

「それに、アキヒトはとても優しく強いのです。優しくても頼りなかったりする男や、強いばかりで乱暴な男達ばかりの中、優しくて強い男性などそうは居ません。わらわはアキヒトと一緒に居れて幸せなのです」

いや、確かに優しいと言えば優しいが、あやつはかなり頼りないと思うがの。フランティーヌの中でアキヒトは、かなり美化されるんじゃないか？　これが恋は盲目というやつか。恐ろしい事じゃ。

じゃが、それはそうとして、ソフィーの心はさらに揺れ動いたらしい。俯いて、うーん。と唸って考え込んでおる。

しかし、それにしてもエメルダはともかく、フランティーヌもなにやらソフィーの勧誘に熱心じゃの。アキヒトの事が好きなんじゃったら、アキヒトが他の女を抱くという事は嫌がりそうなんじゃないが。

とはいえ、そういえばそこは自分が彼女ポジションである「最後の番」になる為に納得したんじゃないかな。となると、自分と気心の知れた者が入った方が気が楽という事もあるのかもしれない。下手な奴を入れてライバルが増えても困るじゃない。

しかし実際どうしたものじゃろうな？　今回は料理が出来る娘が欲しいという事でハーレムに入れるのは絶対条件ではない。じゃが入られるなら入れるに越した事は無い。そう思って、エメルダに耳打ちをした。

「どうする？　私達3人で変わりばんこにずっと説得し続けるか？　3日3晩ほど寝かせずにずっと説得を続ければ、根を上げて、『うん』と言うかも知れんぞ？」

「何を鬼みみたいな事を言っているのよ。そんなの駄目に決まっているでしょ。ハーレムに入れるなら、ちゃんと納得させて入れないと後が面倒よ」

「ふむ。仕方が無いの。それでは一旦ここで説得は中断するか？」

「そうね……。取り合えずそうしましょう。でも、最後に一つ言っておくわ」

エメルダはそう言うのと、改めてソフィーと向き合って、またもや優しい目で彼女を見た。

「貴女の気が進まないのは仕方がないと思うわ。女の子にとってはとても重要な事なんですもの。アキヒトは優しいし、貴女の気持ちを無視して無理にどうかしようなんて絶対にしないから、しばらく

くよくよく考えて」

「え？　良いんですか？」

エメルダの言葉に、ソフィーの方が拍子抜けしておるな。渋っていたものの、なんだかんだ言っただけで断りきれないと考えておったという事かの？　じゃが、だったらもっと説得を続ければソフィーはハーレムに入ったんじゃないのか？　しかし、エメルダはそれが当然の様にソフィーにさらに語りかける。

「貴女は私達の友達のフランティーンの友達なんですよ？　だったら私達の友達よ。その貴女に無理を言うわけ無いじゃない。私、貴女と友達になれてとても嬉しいのよ」

「あ。はい！　私もエメルダさんとお友達になれて嬉しいです！」

いきなりのエメルダの友達宣言に、ソフィーも嬉しそうに応じておる。そしてその後エメルダは、ソフィーとフランティーンに、「積もる話もあるでしょう。しばらく2人でおしゃべりすると良いわ」

と、声をかけ私共々部屋をでる。

「あれで良かったのか？　しばらく考えさせるなら、初めから説得などする必要なかったのではないか？」

「何を言っているの。飴と鞭は基本じゃない。始めに怖がらせておいて後から優しくする方が効果的なよ。初めから優しくしたら単に舐められるだけだわ」

「ふむ。そういう意味があったのか。じゃが、ソフィーはなんだか

んだ言って断りきれんと考えておったようじゃぞ？　じゃったらかのままだハーレムに入れてしまった方が手っ取り早かったのではないか？」

すると、エメルダは少し目を細め、私を睨んできおった。

「言っておくけど、私だって鬼じゃないのよ？　気が進まない子を無理やりハーレムに入れたくないって言うのは本当」

「じゃあ、気が進まない娘をその気にさせる為、色々と仕掛けているって事か？」

「そうよ。始めに怖がらせて次に優しくして、そして最後にお友達になりましようって言葉。彼女の心の垣根はかなり取り払われているはずよ。私達の仲間に入りたいと考え始めるはず。そしてその仲間と言うのは……」

「ハーレム仲間と言うことかの？」

「まあそういう事ね。普通の女の子はハーレムの一員になるのなんて嫌悪感を抱くわ。私がさっきやったのはその嫌悪感を取り除く事。もちろんだからと言ってそのハーレムの主のアキヒトの事を、こんな奴に抱かれるのなんて真っ平！　って思われたら最後だけだね。フランティーンの時もそうだったけど、最後はアキヒト次第よ」

「ソフィーがアキヒトに好意を持たないとどうしようも無いって事か？」

「ええ。そういう事ね」

ふむ。かなり絶望的な気がするの。始めに倒したドラゴンやその後のフェンリルの時の様に、アキヒトが活躍する場面でも見ればともかく、そうでなければ、ただの○太じゃしの。

じゃが、私が腕を組み懷疑的な表情をしているのに気付いたのか、エメルダが私に笑いかけた。

「大丈夫よ。神様が思うほど、アキヒトも捨てたものじゃないわよ」

そうか？ まあエメルダは強い者フェチじゃからな。アキヒトへの採点が甘いんじゃないだろう。

その後、一旦2人でアキヒトが居る部屋に入りソフィーの事に付いてししばらく喋った後、みなで集まって夕食を食べた。そしてさらにその後。

「アキヒト……。私はな。こ……この宇宙を作ったのじゃ……。お前が……住んでいた星もこの星……も作った。山々やき……ぎを作り、この私達が泊まっている宿……だって私が居なくては存在しな……しなかった。もちろんお前自身……もじゃ。私が居なければなにも……存在しなかったのじゃ……」

「そっか。そう考えると、神様って凄いよね。神様が居なかったら僕は居なかったのか……」

「そう……じゃ。私の……凄さが分かったか？ ふう……」

「うん。やっぱり神様って凄いよね」

「じゃ……からな、その神様に……こういう事をさせるのは……間違っている……思わんか？」

アキヒトの求めを、例によって「設定」の為断りきれなかった私は、アキヒトの腰の上に跨り、顔を赤らめ呼吸を乱しながらも続けた。

「え？　でも前に聞いた時、神様こうするの好きって言ってたよね？」

くっ。やはり前の言葉責めの時に言わされた事を覚えておったか。どうされるのが良いかを言わされるといいう、ある意味裸を見られるより恥ずかしい事をさせられた記憶がよみがえる。

アキヒトに求められても常に拒んでいたにも拘らず、実は好きなの……があると言うのはあまりにも恥ずかしい。私の顔はさらに赤くなり、喋る言葉も思わず歯切れが悪くなる。

「じゃから……。それは感情としての事と、理性での判断の違いと言うか……。これはちょっと不味いと言うか……。とにかく駄目じゃ」

「良いのに駄目なの？　僕よく分からないよ」

どうして？　と言う目で問いかけてくるアキヒトから思わず視線をそらす。そうせねば、またもや「設定」が働き素直に答えてしまいうそうじゃ。じゃが、私が答えないのでアキヒトは再度問いかけてきた。

「ねえ。何が駄目なの？　神様これが好きなんじゃないの？　僕、

神様に喜んで欲しいんだ」

じゃがそれでも私が必死で口を噤み答えずにいると、アキヒトも繰り返し問いかけてくる。そして遂に私は「設定」に屈した。

「じゃから……。この体勢は私が駄目になるから……。駄目じゃ」

「私が駄目になるって……。そんなに良いっていう事？」

設定が発動している私は、その問いかけにも頷いて答えた。そして、あまりの恥ずかしさに涙目になる。そんな私にアキヒトは笑いかけてきた。

「そうなんだ。良かった。じゃあ動くね」

「ちょっとちょっと。ま……。て……。って。じゃから……。私はこの世界で最高の存在で……。その私に……。あ……。こん……。あ……。こんな……。事を……。ああ」

じゃが、アキヒトは私の言葉が耳に入らないのか、サルのように動き続ける。じゃから駄目だって言っとなるじゃろう！　もう、やだ〜！

人のというか、神様の言う事をまったく聞かぬアキヒトの責めにくたくたになった私は、うつ伏せに寝そべりサルから顔をそむけ大きく肩で息をしていた。

駄目じゃと言っとなるのに……。しかもこやつサルじゃからこれで終わりじゃなく、この後しばらくしたらまた復活しおるし。じゃが、

しばらくしたらまた……、と思った瞬間、自分の中にむしろ期待する気持ちがかすかによぎった事に、改めて背筋が寒くなった。

人間の男相手に我を忘れるようでは、神の力が戻った時以前と同じ様に平穩に全宇宙を管理できるか心配になる。……本当に私大丈夫なんじゃろうか？

そう考えていると、アキヒトが私を後ろから抱き寄せてきた。いくらなんでもさつき終ったばかりですぐに再開は早過ぎるじゃろう。

「アキヒト……。もう少し休ませてくれんかの。いくらなんでもサル過ぎるぞ」

じゃが、アキヒトは私の言葉に構わずさらに強く私を抱き締めた。しかしどうやら再開と言うつもりではなさそうで、私に語りかけてきた。

「さつき神様、自分は凄い存在だって言ってたよね」

「ああ。言ったが。それが分かっておるなら、もう少し私を敬え」

私を抱きしめるアキヒトの腕の力がまた少し強くなる。

「僕もずっとそう思ってた。この世界に初めて来た日、僕の理想の女の子の姿になった神様に、僕の彼女だから守れって言われてとても嬉しくて……。でも、それでもどこかで、神様は凄い力を持っているんだからきっと大丈夫なんだと思ってた。でも……僕が人を殺して……それで神様の事を見れなくなった時、神様言ったよね。ただの女の子になってしまってるって」

「ああ、言っただけ……」

「神様が本当はどんなに凄くても、僕にとってはもうただの女の子なんだ。僕の大事な彼女なんだ。僕、神様を守るよ。絶対に守る。だから安心してね」

私を抱きしめるアキヒトの腕の力がまた強くなった。それは少し痛いくらいじゃったが、不快ではなかった。私はその腕に自分の腕を添えた。

本当は、もっと神様として尊敬し恐れ入ろと言いたかったのじゃが……まあこれはこれでよしとするか。

> i 3 4 4 4 9 — 3 5 9 7 <

第26話：孤高の女

わらわは孤高の存在……だった。でも、いずれ戻ってみせる。孤高の女に。

「積もる話もあるでしょう。しばらく2人でおしゃべりすると良いわ」

エメルダはそう言って神様と2人で部屋を出て行った。残されたわらわは改めてソフィーと話す為に、彼女の傍に椅子を運んで座った。

「フランティーヌ様！ フランティーヌ様がその様な事を……。言ってくだされば私が致しましたのに！」

ソフィーは突然叫ぶようにそう言って驚いた表情でわらわを見た。でも、何がその様な事か分からず、思わず彼女に首を傾げる。

「何がです？」

するとソフィーは戸惑った目を向けてきた。

「何が……。椅子を御自分でお運びになるなんて……」

「え？ そんな事？」

思わずクスクスと笑い出すとソフィーはさらに戸惑った顔をする。一国の王女。そして未来の王妃。なのに自分で椅子を運んだ。その事が彼女にはとても大変な事みたい。

しかし王女も王妃もすべて過去の事。今のわらわはただのフラン

ティーン。王女でもましてや王妃でもない。でも、そうだとしたら……。

「わらわはもう王女ではないのですから……。ソフィーさん。あなたも、フランティーンと呼んで良いのですよ」

するとソフィーは頭を両手でわし掴む様に持ち、まるでこの世の終わりの様な表情で大声を上げた。

「フランティーン様！ 冗談はお止め下さい！ 私の事を、さん付けて呼ぶなんて！ それにフランティーン様の事を呼び捨てになんて出来ません！」

ずいぶんと大げさね。でも、これ以上言うのは苛めてしまう事になるのかしら？ 内心の苦笑を隠し、彼女に微笑みかけた。

「分かりました。ソフィー。これで良いですね？」

「はい……」

ソフィーはそう言って少し俯き、文字通り胸を撫で下ろした。そして落ち着いてくると、顔を上げて少し探る様な表情で上目遣いに覗き込んできた。

「それにしても、フランティーン様が御自分で椅子をお運びになるなんて……。いったいどうなさったのですか？」

ソフィーにとっては、わらわが自分で椅子を運んだ、ただそれだけの事が余程大ごとらしく、深刻そうな表情で先ほどと同じ事を繰り返している。その様子が可笑しくて少し悪戯心が疼いた。

「何を言っているのです。もうわらわは王女でもなんでもなく、ただの、このハーレムの一員に過ぎません。旅の途中はわらわはみな

の朝食の支度もしているのですよ」

朝食の用意といっても、ただ温めるだけだし、本格的な料理は出来ない。だからこそ料理が出来る奴隷を手に入れようとしたのだけだ。

別段今言う必要も無い事だったけど、きっとソフィーは天地がひっくり返ったかの様に驚くだろうと期待して、あえて言ってみた。ずると思ったとおり、ソフィーは口をパクパクと開けたり閉じたり。彼女の反応があまりにも予想通りで、思わずクスクスと笑った。

するとソフィーもクスリと小さく笑ったかと思うと、次にクスクスと笑い出し、遂には、あははは、と顔を両手で覆って大声で笑い出した。

「私びっくりしました。フランティーヌ様ったらご冗談ばかり……。でもフランティーヌ様が朝食の支度をなさるなんて……」

ソフィーはそう言うのと、また堪えきれない様に唇に手をやりクスクスと笑い出した。わらわが笑ったので、わらわが朝食の支度をするというのを冗談だと受け取ったみたいね。

わらわは身を乗り出し彼女の耳元に口を近づけ悪戯っぽい口調で囁いた。

「いえ、わらわが朝食を用意しているのは本当です。嘘では無いのですよ」

ソフィーは目を大きく見開いてわらわの表情を確かめるかのようになまじまじと見つめてきた。わらわは手を伸ばして彼女の手を握り、目線を合わせもう一度言い聞かせる様に言った。

「わらわはみなな朝食の支度をしています。それがわらわの役目な

のです」

「どうしてその様な……。フランティーヌ様は……一国の王女様でありますのに」

ソフィーはいかにも信じられない事が起こったという風に驚いている。少し驚かせすぎたかしら？ でも、どうせすぐに分かる事だし、今知っておいて貰っても良いでしょう。

でも……知っておいて貰った方が良い事と言えば、どうしてわらわが死んだ事になっているかという事も説明しておいた方が良いでしょう……。

そう思い、わらわが王国の安泰と引き換えにフェンリルに献上され、その後アキヒトの手によって助けられた事を彼女に説明した。

「そんな酷い事を……まるでフランティーヌ様を邪魔者の様に……死んだ事にしてしまうなんて」

話を聞いたソフィーはそう言って、目に涙を浮かべた。そしてわらわに抱きついて嗚咽を漏らし始めた。

わらわの為にソフィーがこんなにも悲しんでくれるなんて……。

ソフィーは昔からそうだった。他人の事を自分の事の様に悲しむ優しい娘……。

でも少しも悲しい事では無いのだと、貴女が泣く事ではないのだと教えてあげなくてはならない。

泣き続けるソフィーの頭を撫でてやりながら、彼女の優しさに応える様に語りかけた。

「わらわも初めは悲しみました。ですが本当は違うのです。わらわは死んだではありません。いえ……むしろ、それまでが死んでいたのです」

「それまでが……死んでいた……？」

ソフィーはそう呟くと、顔を上げてわらわの顔を見ようとした。けれども、わらわが彼女の頭を撫でているので顔を上げることはできず、また大人しく胸に顔を埋めた。

「そうです。それまでわらわは、お父様の言う通り王女として相應しくあろうと毎日習い事に励み、外交の為と結婚相手を決められ、そしてフェンリルに献上されたのです。いくら王女として幾人もの召使に傳かれ、贅を尽くした生活をしようと、私はまるで心を持たぬ人形、綺麗に飾られた置物でしかありませんでした」

「フランティーン様。決してその様な事は御座いません！」

ソフィーはわらわの胸に顔を埋めながらもそう叫んだ。でも、わらわは首を振ってそれを否定した。

「いえ、人形の様に……、置物の様に……、心など持ち合わせていないとでも思っていないければ魔物に献上したり、死んだ事にするなど出来るはずがないのです。お父様は……わらわの事を……」

ソフィーの頭を撫でていたはずの手が、いつの間にか彼女の頭を掴むように強く抱きしめていた。でもソフィーは胸に抱かれ大人しくしている。

「ですが、死んだ事になったお陰で、やっとお父様から解放されたのです。やっと自分の意志を持つ事が……。死んでいたわらわは、そのときようやく生き返る事が出来たのです」

「でっですが、その……それでハーレムの一員で、フランティーン様ともあろうお方が、食事の支度など……」

「ですから、王女のフランティヌはもう死んだのです。そのような者はもうどこにも居ないのです」

ソフィーに言い聞かせる様にそう言った。だけど、その言葉が以前エメルダから言われた言葉そのままなのに気付いて思わずクスリと笑ってしまう。でもわらわの胸に顔を埋めているソフィーはその笑みに気付かない。そしてまだ納得できないのか繰り返した。

「でも、だからといってハーレムなんて……。会ったばかりの人にこういう事を言うのは失礼かも知れませんが、あえて言わせて頂きます……。フランティヌ様のお言葉ですが、あの男性がフランティヌ様の言う通り優しくて強い男性とは思えません。こう言っではなんですが……とても頼りなさそうに見えました」

「頼りなさそうに見えましたか？」

「はい……。とても」

「でも、彼はあのフェンリルをいとも容易く倒したのですよ。それとエメルダから聞いた話では、あの五色のドラゴンすら倒したとか……」

「あのドラゴンを！」

驚いたソフィーが胸の中で大きく身じろぎする。わらわは改めて彼女の頭を撫でた。

「ええ。ドラゴンが出現したという話はフェンリルから聞いていました。フェンリルは、自分のねぐらの洞窟に隠れていれば安全と言

っていましたが……。でも今そのドラゴンの姿はどこにもありません。エメルダが言っている事は本当なのでしょう」

「では……フランティーヌ様は、あの男性がそれほど強いから……その……ハーレムの一員になっていると言うのですか？」

「いえ、そういう訳ではありません。そうですね……彼が……アキヒトが頼りないからでしょうか……」

「頼りないから!？」

「ええ。頼りないからです」

「でもそんな……まさか頼りない男に母性を刺激されたと言っても言うのでは……」

母性を刺激され……。ソフィーの言葉にまたクスリと笑ってしまった。わらわは少し笑みを浮かべたまま言った。

「そういう事も少しはあるかも知れませんが……。五色のドラゴンを倒せるなら、この世で怖い者など居ないはず。好き放題して傍若無人に振舞っても良いはず……。でもアキヒトって頼りないのですよね……」

わらわの胸の中で黙って耳を傾けるソフィーの頭を撫でながら、言葉を続ける。

「王国に居る時、時々戦がありました。そして戦いが終わると兵士や騎士達は敵兵を何人討ち取ったかを声高に誇り、わらわもその様な者達が強く頼もしい者なのだと思います。ですが……、アキヒトはある女性を助ける為に山賊と思われる男達を倒し……殺しました」

ソフィーはその言葉にびくつと体を竦ませた。わらわは彼女を落ち着かせる為にまた彼女の頭を撫でる。

「今までわらわが強く頼もしいと思っていた者達なら、手柄だと声高に誇るでしょう。ですが……アキヒトはそれどころか心に傷を負いました。人を殺すなんて……なんて酷い事をしたのだらうって。信じられぬ話ですが彼はことは別の世界から来たという事です。その世界とこの世界では色々ちがうのでしょうけど……。でもそれで分かりました。彼はとても……とても優しいのです。どれほど強大な力を持つとそれによって彼がその力に驕る事は無い。多分ずっと頼りないまま……」

そこまで言って、自分がとても酷い事を言っている気がしてきて、そして弁解する様に言い添える。でも、そうは言いながらもわらわの顔は少し笑っていたと思う。

「頼りないは酷いですわね。でも、きっと彼は変わらない。優しいまま……。だからわらわは彼を信じます。彼なら、お父様の様にわらわを捨てたりは……」

フェンリルの元から助け出され、アキヒト達と共に旅を始めて数日後、エメルダから受けたきつい言葉から彼は庇ってくれた。その後、初めてアキヒトと落ち着いて話した。わらわはそれまでずっと他の者達と距離を置いていたから……。

「フランティーンと仲良くしたいとずっと思ってたんだ」

エメルダからの言葉に傷付いたわらわを慰めてくれたアキヒトは、わらわが落ち着くと改めてそう口を開いた。

「フエンリルと戦った時、自分は大丈夫だけどあなた達は危険だつて、僕達の事を気にかけてくれたよね？　初めて会った人にそんな風に気にかけて貰えるなんて思ってたから、とても嬉しかったんだ」

そんな事？　わらわは拍子抜けし、つい

「ふっ」

と吹き出してしまった。

「え？　可笑しかったかな？」

不思議そうに首を傾げるアキヒトの様子が可笑しくて、さらに大きく笑ってしまう。アキヒトは笑い続けるわらわを戸惑った表情で見ている。ひとしきり笑い落ち着いたわらわはアキヒトに顔を向けた。彼と目が合うと思わずまた笑い出しそうになったけどそれは堪えた。

「いえ、可笑しくなんて無いですわよ。でも、そんな事で……大げさではありませんか？」

「えー。そうかな」

アキヒトもそう言って笑った。それからわらわとアキヒトの距離は少し縮まった気がした。そしてアキヒトに手伝って貰いながら、朝食を作る毎日が始まった。そんなある日に、あの事件が起こった。

神様を助ける為にアキヒトが人を殺めたあの事件が……。

とても強大な力を持っている彼。この世界で誰も逆らえないほどの力を持っている彼が、その力に驕るところか人を殺めた事に傷付いている。誰よりも強く、誰よりも優しい人。そしてそれを救えるのはわらわだけ……。そう思ったから……。

アキヒトを慰めに行く。それを神様達に告げる時、あまりの恥ずかしさに舌が思う様に動かず、自分でもどかしいほどだった。でも、エメルダはわらわの気持ちを察してくれ、わらわを抱きしめ、「お願いするわ」と言ってくれた。

「アキヒト？ 入りますわよ？」

震える声でそう言うと、彼の返事を待たず馬車の扉に手をかける。声だけではなくその手も震えていた。勇気を振り絞り来たのに、拒絶されては……。そう思うと、彼の返事を聞く事が出来なかった。震えながらも扉をゆっくりと開く。

中に入ると、彼は小さく縮こまる様にして震えていた。「人を殺すなんて……。僕が人を殺すなんて……」そう、何度も何度も呟く様に繰り返す、震え続ける彼。自分は取り返しの付かない罪を犯したと。自分を責め続ける彼。

アキヒトは以前わらわが自分を気遣ってくれたからと、優しくしてくれた。ならば……わらわも彼にもっと優しくしたい。わらわに彼に与えられるものがあるならば……。

わらわは覆いかぶさるようにしてアキヒトを抱きしめた。

「大丈夫です。わらわは貴方の事を嫌いになどなりません。貴方が人を……殺めたとしても、わらわは貴方を……。たとえ他の誰が貴方の事をどう思おうと……」

彼は傷付いている。自分の存在を否定している。だからわらわが彼を受け入れれば……。自分のすべてをさらけ出す為に、震える彼の前で自ら衣を脱ぎ捨て、彼の胸に顔を埋めた。全裸で彼に身を任せるうちに、彼の震えも止まる。

「わらわも王女という地位をなくし、今までの自分を失いました。貴方も今までの自分と変わってしまったと思っっているのかも知れません。でも、わらわは貴方を受け入れます。だから貴方もわらわを……」

彼の素肌とわらわの素肌を遮る布越しの抱擁は、まだ取り払えない。彼の心の壁の様に感じられた。女が男の服を脱がすなどはしたない、以前はそう思っていた。でも彼を受け入れたい。彼に受け入れて欲しい。

わらわはもうすべてをさらけ出しています……。だから貴方も……。そう思っただけの服に手をかけた。するとその気持ちが通じたのか、彼はわらわの手を止めると自分で衣服を脱いだ。そしてわらわを抱きしめる。

暖かい。そして滑らかで優しい肌の感触。わらわも力いっぱい抱きしめ返した。そうすれば彼にもっと近づける。溶け合える。そう思っただけに力を込める。

でも足りない。もっと近くに、もっと一つに……。そして彼もわらわの気持ちに答えてくれ、わらわを抱くその腕の力を強めた。でもしばらくするとその腕は、わらわの背中から腰へ、そして胸へとその位置を変えた。

罪の意識から逃げる為、わらわへの欲情に身を任せた。そうではない。無防備に身を差し出すわらわに彼も心を開いてくれた。そして初めて経験するわらわに少しでも痛みを感じさせない様にと……。そう思いたい。そしてわらわとアキヒトは一つになった……。

「でも……。それでもハーレムの一員だなんて……」

回想の海を漂っていたわらわは、ソフィーの言葉に心を引き戻された。彼女はいつの間にか胸に埋めていた顔を上げ、わらわの顔を覗き込んでいる。

「確かに今のわらわはハーレムの一員でしかありません。ですが、以前よりずっと幸せなのです」

「幸せて……。まさか他に女性が居る男性を本気で……」

ソフィーは少し悲しそうな表情で戸惑った視線を向けてくる。わらわ以外の女性とも枕を共にする男性を……。そう思い、わらわを哀れんでいるようだ。でもそうではない。

「貴女が思う様な事では無いのです。悲しい事では無いのです。それに……」

「それに？」

ソフィーはわらわの顔を覗き込み、首を傾げている。わらわは誤魔化す様に、ソフィーに笑顔を向けた。

そう、今のわらわはハーレムの一員。その他大勢の1人。以前は王女としてみなに傳かれ国で並ぶ者の居ない孤高の存在だった。

でも……。いつかは唯一の存在になってみせる……。アキヒトにとっての唯一の存在に……。それこそが今のわらわにとって目指すべき孤高の存在なのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2778x/>

かみさまは自業自得

2011年11月14日23時22分発行